

九編卷之十

宋公明之神蓼兒洼に聚る

保義宋公明は既に任處に赴く用意をなしける處に、神行太保戴宗來て訊ひければ、宋江戴宗と貳人坐し間話して在けるに、戴宗忽ち宋江を拜して云く、某已に聖恩を蒙り、袁州の都統制の官を授りしかど、今願くは官を辭して泰安州の嶽廟に住し、間を求て天年を終は、實に某が幸ひなり。宋江が云く、賢弟何の故に此念を起すや。戴宗が云く、昨夜夢中に崔府君我を召す。是を以て某しきりに此善心を起せり。宋江が云はく、賢弟生ては神行太保なり。今より後必ず嶽廟の神とならん。其時戴宗宋江に辭別し、官を朝廷に返し、自ら泰安州の嶽廟に至り、貯へ置たる金銀を廟裡に納て修堂金とし、毎日懺懃に香火を奉り、誠心を盡して怠ることなかりしに、後數月を経て病ひなく一夜多くの道士を集めて辭別し、大に笑て死しけるが、後來嶽廟の裏に於て度々靈驗有ければ、當所の人戴宗の像を彫刻し、今に至つて祭りをなしけるとなり。扱も阮小七は勅命を奉じて宋江に辭別し、蓋天軍に至り都統制の官となりけるが、未だ半年も經ざるに、大將王稟、趙譚等、幫源洞にて罵られし、舊恨を記し、童樞密の前にて度々阮小七の過失を説いてはく、彼方臘の赭黃袍袞龍衣を着し、玉帶を粧ひしは、一時の

たはふれに似たりといへども、終に不良のこゝろあり。況んや蓋天軍の地は東京を離るゝこと遠うして、人民ことごとく蠻の氣あれば、彼後來は謀反をなさんこと必定なりと、度々讒言をなしければ、童貫遂に此事を蔡京につげにける。蔡京天子に奏聞し、遂に勅命と稱し、蓋天軍に至つて阮小七が官を奪ひ庶人となしにけり。阮小七は心中に、王稟趙譚の所爲なりと思へど更に恨みとせず、却つて自から大に喜び、老母を伴うて、再び梁山泊の石碣村に至り、漁りをなして業としけるが、後七十五迄生て終りしとなり。扱も小旋風柴進は京に在つて官人となりしが、戴宗官を辭し去、また朝廷より阮小七が戲に方臘の平天冠、袞龍衣を着るを以て、逆反の意ありとして官を奪へりと聞て、自ら思へらく、我もまたはかりごとといへども、一旦方臘の驕馬となれば、後來もし奸臣知ることを得て天子に讒せば、遂に免るゝことを得ず。燕青が天子と大臣との體、世を見限て身を隠せしは、張良穀を避けて、赤松子の遊びに比するのまねび、一百八人中、義は宋江才は燕青の上に出る者決してあらずと、くれぐれ歎息し、しかじ我も時務をしらんにはとて、自ら詐て風疾に染しと稱し、遂に官を辭して庶人となり、衆官に辭別し、滄州横海郡に回つて再び農業をつとめ、間を得て生活しけるが、後數年を経て病なく死しけるとなり。さて李應は中山府の都統制を授り、任官して半年ばかり過けるに、柴進官を辭し去けると聞きしかば、自ら又詐つて風癩に染て官に任すること能はずとて、遂に致仕し故郷に回り、再び獨龍岡の下に住し生活けるが、後杜興とともに富豪となり、終りを善せしと

なり。又關勝は北京大名府に在て總官兵馬となりけるが、軍人甚はだ是れを敬服しけり。されば日軍馬を操練たり。或時大醉して馬より落て足痛を憂へ終に死けるとぞ。又呼延灼は御營の指揮使となつて、毎日御駕に隨うてありけるが、後大軍を引率し、大金兀述第四の子を破、淮西に至て陣中において死せりとなり。さて朱同は保定府に任官せしが、軍卒を管領して功あり。後又劉光世に隨つて大金を破り、太平軍の節度使に至りしとなり。さても花榮は妻と妹を引具し、應天府に赴きしかば、吳用は只獨り童子を帶て武勝軍に任官す。李逵もまた妻子なければ、只貳人の供を引率し、潤州に行て任官す。されば京師に止まりし十五人の偏將らも、宋清は先に故郷に歸つて農となり、杜興は李應に隨つて故郷にかへり、黃信は青州に行きて任官し、孫立は舊に依つて登州に任官す。孫新、顧大嫂并妻女を具し登州に回れり。鄒潤は官人たるを願はず登雲山に回れり、蔡慶は關勝に隨つて北京に回れり民となり、裴宣は楊林と共に飲馬川に任官せしが、兩人遂に商議し官を辭し間人となれり。蔣敬は故郷を思ひ潭州に回れり民となり、朱武は樊瑞に隨ひて道法を學び、兩人とも道士となつて四方を雲遊し去り、後遂に公孫勝に隨つて天年を終り、穆春は官を辭し自ら故郷に歸り、揭陽鎮にて再び良民となり、凌振は鐵炮の名人なればとて、京に有つて火藥局の役人となりけり。又京師に止りし五人の將も、安道全は大醫院に於て金紫醫官となり、皇甫端は能馬の病を療すとて、御馬監の大使となり、金大堅は内府の御寶監の官人となり、蕭讓は蔡太師の府中にあつて官人となり、樂和は驛馬王晋卿の府

中に在り、官人となつて終身快樂せしとなり。去程に宋江は中書省に在つて、已に用意も備はりければ、盧俊義と相辭し楚州の任に赴き、盧俊義もまた家屬なければ、童僕數人を引率し自ら盧州へ發足せり。原來宋朝太祖武德皇帝より今に至つて朝廷に讒佞の臣多し。今上徽宗天子も聖明の君たりといへども、讒奸の臣に權を專にせられ、忠良の臣を屈害す、豈悲しむべからざらんや。此時に當つて蔡京、童貫、高俅、楊戩四人の賊臣天下を變亂し、國家を壞り人民を害す豈恐るべからざらんや。此時殿帥府の太尉高俅楊戩、天子の禮を厚くして宋江等に高官を授け給ひしを見て、心中に悦びず、兩人密に商議して云く、宋江盧俊義は原我等の仇人なるに、今彼等功あるの臣となれり。況や朝廷より高官を賜つて、彼をして軍民を管領せしむ。我等豈世人の笑ひを被らざらんや。いにしへより云く、恨み小なるは君子にあらず、毒なければ丈夫にあらずと。楊戩がいはいく我一ツの計あり。先に盧俊義の結果せば、宋江の片臂膊を無するなり。此者古今の英雄なれば、若先に宋江を密計することを泄れしかば、彼必らず大事をなさん。高俅が云く、願くは君の妙計いかんぞや。其極を聞しめ給へ。楊戩が云く、潜に盧州より四五人の百姓を招き、此を省院に遣し首告しめんには、近來盧安撫しきりに軍兵をまねき、馬を買糧を貯はへ草料を積、造反の意ありと告しめ、其告狀を蔡太師に呈し、蔡太師と共に詐はり天子に奏聞し、勅命を以て盧俊義を召しめ、天子より彼に御膳を賜らば、其時潜かに食中に些しの水銀を交へ、彼が腰腎に入らば、遂に癡人となつて大事を倣ふこと能ふまじ。其時又別に勅使

を以て御酒を宋江に賜ひ、酒中に又鳩毒を施さば、いまだ半月を経ずして、彼らが命ともに存すること  
 となからん。高俅聞て大に悦んで云く、此計甚だ妙なりとて兩人商議し、計已に定りければ、先  
 づ心服の人をして盧州の百姓兩人を召しめ、告状を寫し、彼をして樞密院に遣はし童貫に告しめて  
 いはく、盧安撫此比盧州に於て軍兵を招き、馬を買糧をあつめ、草を積て逆反の心あり。又頻りに使  
 ひを楚州に遣はし、宋安撫に示し合せ兵を起さんばかりに見え候と訴へけり。元來童貫もまた宋江  
 等の仇人なれば、其儘告状を以て此趣きを蔡太師に告げれば、蔡京、其日高俅楊戩を會して共に事を  
 計り、四人の奸臣遂に盧州の首告人を引て天子に奏聞す。天子宣はく、朕思ふに向には宋江盧俊義等、  
 四方の賊寇を征伐して、十萬騎の兵權を掌に握りし時だにも、聊か異心を生ぜず。況んや今邪を去  
 て正に歸す。同心の義兄弟は十に八分を失ひ、其残る族も諸州に散じ、羽翼もなき今に至つて豈造反  
 を做んや。其上彼ら豪傑氣象を以つて忠義を一途に守る。朕曾て彼等に背かず、彼等朕に背くの理な  
 し。必ず是詐りあらん。未だ虚實を聞ず安りに信用しがたし。高俅楊戩傍より奏していはく、主上  
 の宣ふ處道理は然りといへども、人心は計りがたし。臣愚意によらば、盧俊義官職の卑きを嫌ひ、未  
 だ其足ることを知らずして反意を企て、不幸にして人にはやく知られ候には有まじきや。天子宣はく、  
 朕盧安撫を召て自ら問はば虚實を知ん。蔡京童貫傍より奏していはく、盧俊義は猛獸に異ならず。今  
 若し此事を聞いて大事に及ばば、遂に力を以つて捕へがたし。唯御召あつて朝參する時は、陛下聖言





を以つて彼れが心を慰め、御膳御酒を賜つて彼を賺し、虚實を問ひ給は、自ら知れ候はん。若し此事詐はりなくば罪を加へ給ふまじ。遂に功臣の心に背き給ふにあらすと述べれば、天子其儘勅命を下し、使を盧州に遣し盧安撫を召にけり。されば勅使盧州に着し、大小の官人城を出て相迎へ、勅使を州衛に請じけり。東京の勅使やがて勅状を讀で、急ぎ盧安撫に委用のことあれば、朝參あるべしと。盧安撫義謹で勅命を領し、即日用意をなし勅使と同じく東京に赴き、其日は皇城司に宿し、次の日早朝東華門に伺候せり。其時太師蔡京、樞密院童貫、太尉高俅、楊戩出むかへ、盧安撫を引て偏殿に至り天子に朝見す。まづ盧俊義拜し罷れば、皇帝宣はく、朕久しく卿に一面せんことを欲す。盧州の地身を容るに足るや否や。盧俊義再拜し奏していはく、聖恩天に等しく、彼地の人民も盡く安泰にて、臣が榮光をそ、にしかん。天子また他事を問給ひて、午時に至りければ、厨官奏して御膳すでに成れり。此時高俅楊戩潜に水銀を以つて食中に交、是を御案の上に供へしむ。天子自ら御膳を以つて、盧俊義に給ひしかば、盧俊義更に賊官らが悪謀あることを知らず、拜受して食しけり。天子又撫諭して宣はく、卿盧州に返らば、務めて軍士を安んじ養うて異心を生ずることなかれとあれば、盧俊義頓首して恩を謝し朝廷を出、衆官に辭別して盧州を望て進發す。其日高俅楊戩は各計の成るを賀す。盧俊義は盧州の道中にて一二日を経けるに腰腎しきりに、痛んで歩む事能はず、又馬に乗ることも能はずれば、船に乗じ泗州の淮河まで至りしに、その夜月明らかなること晝のごとくなれば、自ら船端に出

て江中の景色を賞し、酒を酌て慰みしに、料らすも水銀の毒氣腰腎の骨髓に入れれば、酔後竟に跌て淮河に落ちて死しにけり。憐むべし、河北において玉麒麟と呼れし天下無双の英雄、賊官らが奸計に水中の漚と消にけり。其時從人大に驚き、急ぎ死首を撈げ棺槨を具へ、泗州高原の地に葬りけり。されば當所の役人此おもむきを東京に注進ありければ、高俅楊戩等小躍して大に悦び、又蔡京童貫と共に計を定めて天子に奏していはく、泗州より文書を以て告げるは、盧安撫淮河に至りて大醉の後、誤つて水に落ち死し候と、臣等豈是を奏聞せざらんや。たゞ恐らくは宋江此事をきかば、心中に疑ひを設け思へらく、是朝廷の爲す所と謀反を企て候はんも測りがたし。伏して望むらくは陛下勅使を楚州に遣され、御酒を宋江に賜ひ、彼か心を慰め給は、遂に事なかるべしと告ければ、上皇沈思し暫らくものを宜はざりければ、蔡京、童貫、高俅、楊戩、天下に四人の賊臣傍より巧言令色をもつて種々勸め奉り、遂に御酒を給るにぞ定りけり。されば高俅楊戩心服の人を召て勅使とし、潜に御酒の中に鳩毒を用ひ、遂に勅使をして御酒をもたせて楚州に遣しけり。天命とはいひながら賤しかりける計ひなり。さて宋江は當年楚州に安撫となり、兼て兵馬を司りて、下を恵み民を愛しければ、百姓これを敬すること父母のごとく、軍人は是を仰ぐこと神明の如くにて、まことに路に遺たるを拾はず夜戸を鎖さず、人心すでに服しけり。原來楚州南門の外に蓼兒洼とて絶景の地あり。四方は都て水港にて中一つの高山あり。その山秀麗しくして松柏茂り、峰巒環り遶りて、龍虎の蹲踞がごとし。前後す

べて湖水にして、瑠璃を湛へたるがごとく、奇花異草四時に芬芳しく、しかも其風景儼然として、梁山泊に似たりければ、宋江常に此地を愛し、公事の暇あるごとに酒を携へ遊玩し、甚だ喜び自らおもへらく、我若し此地に死せば必ず此地に葬らるべしとて、其地の風景を愛しける。されば年月流るゝごとく、住に至つてすでに半年餘も過て、宣和六年初夏に至りけるに、東京より勅使來つて、御酒を賜はりけると聞ければ、自ら衣冠を着し勅使を郭外に迎へ公廨に至りけり。其時勅使御書を讀んで御酒を宋安撫に遞しければ、宋江謹んで御酒を酌んで自ら飲み、また杯を勅使に回しければ、勅使自ら酒を吞すと辭す。然して勅使は直に回しければ、宋江禮を厚し勅使を送り出で、勅使は東京に立ち回る。さて宋江は御酒を酌けるの後、腹中大に痛みければ、自ら心中に思へらく、是酒中に毒あらんも知るべからずとて、急ぎ軍卒に命じて勅使の着せし路上の旅館に遣し尋ねしむるに、勅使は原來酒を飲しと告げれば、宋江すでに賊臣の奸計に中りしことを知り、自ら歎じていはく、我幼きより儒學をなし、已に長となつて吏に通じ、千辛萬苦を経て、今此任を授りしに、不幸にして身を賊官らが手に失ふ。我原來半點の異心も爲ざるに、天子輕々しく讒言を聞て我に毒酒を賜ふは、我に何の罪かある。豈天命にあらずや。今さらいかんがせん。李逵今潤州の都統制と成つて彼地にあり。若此事を聞知ば必ず兵を起して朝廷を闢がし、我等一生の清名を汚し、又忠義の名を失ふべし。たゞかくのごとく行ふべしと、思案すでに究まり、其夜使を潤州に遣はし、委用有とて急に李逵を招きけり。去程に李逵

は都統制となつて潤州に赴きしより、心中悶えて常に樂しみます。終日只酒を飲で暮せしに、忽ち宋公明の使來つて委用ありと告げれば、李逵がいはい、哥々我を召は必らず火急の用ならんとて、其儘宋江の使者と同じく、直ちに楚州に至つて宋江に見えけり。宋江が云く、賢弟いかなぞや、我汝と別れてより日夜汝を思ふ。吳用軍師は武勝軍に在ば此を去こと遠し。花榮は應天府にあつて久しく消息をきかず。只賢弟は潤州にあれば此地と遠からず。只今汝を請うて一大事を計らん。李逵がいはい、哥々何の事を商議あるや。宋江がいはい、汝先づ酒を飲べしとて、後應に請うて酒食をあたへければ、李逵飽まで飲で酒已に半酣に及びし時、宋江語つてはいはい、賢弟しらす今朝廷より我に毒酒を賜ふ是をいかんがせんや。李逵大に叫んではいはい、哥々兵を起して朝廷を討ち給へ。宋江がいはい、今兄弟の輩盡く分散し、又兵馬もことごとく離散せり。いかんがしてか兵を起すべき。李逵がいはい、我潤州に三千の軍馬あり。是を楚州の軍馬と共に合し、又百姓を召て力を合さしめ、兵を招き馬を買て賊官を破盡し、再び梁山泊に登りて快活さば、此賊官らが手下に在つて、彼らが毒を受んよりも勝らんか。宋江が云く、此議よしと。其夜兩人酒を飲み翌日未明に宋江舟を命じ李逵を送る。李逵がいはい、哥々何れの日か義兵を起し給ふや。我も兵を起して接應すべし。宋江が云く、賢弟我を怪しむことなかれ。昨日朝廷より毒酒を賜つて服しければ、我死せんこと旦夕に在り。我一生忠臣たらんことを思つて、朝廷に仕へ負くことなし。朝廷却て我に背く、我死せば必ず汝造反せん。汝造反せば我梁

山泊天に替つて道を行ふ忠義の名を汚さん。此に因て特と汝を請て相辭し、又酒中に燭を交へ與へたり。汝潤州に回らば必ず死せん。汝死するの後靈魂必ず此地に来るべし。此處の南門の外に蓼兒注とて風景の能き所あり。甚だ梁山泊に相似たり。我死するの日定て此地に葬らしめん。汝の靈魂と相聚らんと云終て涙雨のごとくなりしかば、李逵が云く、罷乎々、我生て哥々に隨へば死してもまた哥々に隨ふべしとて、同じく涙を雨のごとく濺ぎけり。此時はや腹中大に痛みければ、涙ながら永く宋江に辭別し、舟に乗じ潤州に歸りけるに、果して毒發し死に臨み家人をめて懇に云ひ付けるは、我死するの後必ず我靈棺を楚州南門の外蓼兒注に葬り、我哥々宋公明と一處に埋むべしと、云ひ終つて死しければ、家人等その遺言に隨つて棺槨を具へ盛貯しめ、靈柩を昇て楚州に赴きける。去程に宋江は李逵と別れてより後、吳用花榮を戀へとも路遠うして相逢ふこと能はず、其夜毒發しすでに危きに臨ば、家人親隨の輩を召集め、懇に遺囑しけるは、我靈棺を此處南門のそと蓼兒注の高原なる地に葬るべし。必らず汝等衆人の徳に酬ふべしと、いひ畢て死しければ、従人の輩まづ棺槨を備へて禮に依殯盛しけり。されば當所の官人等宋江の遺言に隨つて蓼兒注に葬れり。其日楚州の官吏より百姓に至るまで、宋江の徳を感じ歎かぬものはなかりけり。されば數日を経て李逵の靈柩も潤州より來りければ、同じく宋江が墓の傍らに葬りぬ。さて又宋清は家に在て風疾に染、聊か不快の體なる處へ、楚州より家人回りに來て報じけるは、兄宋公明すでに死せりと。宋清大に驚き悲しみ、急に楚州に行ん

とせしかども、鄆城縣とは路遙に隔たり、身病に臥て行こと能はず。又靈柩は遺言に依つて南門外  
 兒注に葬れりと聞て、急ぎ家人を遣し享祭をなさしめけり。去ほどに武勝軍の承宣使軍師吳用は、自  
 ら任官して後常に樂します、宋公明の恩義を思つて唯日夜懸念せしが、或夜心恍惚として寢られず、  
 半夜に至りしに、夢に宋江李逵二人來り、吳用の衣を引ていはく、軍師我ら忠義を以て主とし天に替  
 つて道を行ひ、曾て天子に負かざるに、今朝毒藥を賜ひ我等罪無うして身死す。今楚州南門の外  
 注に葬られたり。軍師昔の交情を思ひ給はば、一たび墳墓に至るべし。吳用大に驚き再び微細を問  
 んとするに、冷風忽ち身にしみ、散然として夢覺涙雨の濺ぐがごとし。座して旦をまち次の日寢食安  
 からず。則ち行李を收拾從人をも帶ず、只獨楚州をさして急ぎけるが、一兩日を経て楚州の界に至つ  
 て尋るに、果して宋江すでに死し、彼地の人民各嗟嘆せざるはなし。其時吳用は祭儀を調へ、直ち  
 に南門外外注に至り、墳墓を拜し祭りを設け、手をもつて宋江の石碑を撫て哭していはく、仁兄英  
 靈味からざれば我言を聞き給へ。吳用は是村郷の學生にして、始め晁蓋に隨ひて後仁兄に遇ひ高恩  
 を蒙り、共に榮花を受ること十四年、皆仁兄の賜なり。今仁兄國家の爲に死す。夢中に某に告給ふに  
 悲歎し且驚駭す。某曾て仁兄の德に報することなし。唯願くは仁兄と九泉の下に會せんと、云終て痛  
 く歎き自ら縊んとせしに、忽ち後に人音しければ驚いて是を見るに、則ち花榮なりければ、吳用再び  
 驚き問ていはく、我き賢弟は向に應天府に在つて官となりしに、何に仍て宋江の死をしるや。花榮

かいはい、某衆兄弟と別れ應天府に至りしより、日夜衆兄弟の情を思つて忘るゝことなかりしに、此  
 夜の夢に宋公明李逵と共に某を引きとめ、訴へ説、朝廷毒酒を賜うて已に死し、楚州南門外外注  
 高原の地に葬られたり。舊交を忘れずば、一たび墳の前に至るべしとなり。こゝを以て某萬事を打  
 捨夜を日に續いで此地に至れり。吳用がいはく、我もまた夢に見ること、賢弟と異なることなし、  
 此に仍て來れり。今賢弟の此地に至り給ふこと某が幸ひなり。某心中に宋公明を思つて恩義捨がた  
 く、交情忘れがたし。今此所に縊れ死して、仁兄の魂魄と一所にあひ集まらんとす。我れ死せば賢弟  
 萬乞我を此處に葬り給はれ。花榮がいはく、軍師すでに此心あらば某もまた從ふべし。仁兄と同じく  
 死せんことは我願ふ處なり。吳用がいはく、我死せば賢弟に死後の事を托せんと思ふに、いかゞして  
 我と死を同じうせんと云ひ給ふや。花榮がいはく、某も先に大罪を侵し、梁山泊に上りしを幸ひにし  
 て死せず、天子の招安を蒙り罪を赦され、四方を征伐して已に姓名を天下に現はせり。是則ち功成名  
 遂て身退くの時節なり。若此ま、朝廷にあつて、後來奸臣の輩に讒言をもつて罪に落されなば、其時  
 千萬悔るとも及ぶまじ。今仁兄と死を同じうせば、黃泉に歸して後清名を世上に残さん。吳用がいは  
 く、賢弟が言その理に當れりといへども、今某は獨身なれば、死すとも何ぞ妨からん。賢弟は現  
 に妻子あり是をいかせん。花榮が云、此義妨なし、某是まで貯へし銀子あれば、是を妻子に與へ置  
 ば又糊口に足れり。舅の家より料理せば、思ひ殘すことなしとて、其時手を取つて大に泣哭き兩人墓



の樹に縊て死しにけり。されば花榮の従人蔘兒注の麓に待けるが、主人久しく出来らざれば、各山に登て見るに、吳用花榮墓の樹に縊れ死しければ大に驚き、急ぎ當所の官員に告、棺槨を備へて兩人を宋江の墓の側に葬りけり。されば西に四ツの墓を築き、楚州の百姓宋江の仁徳をおもひ、上に一字の廟を立四時の祭絶す。里人風を祈れば風を得、雨を祈れば雨を得るとて、祈ること一ツとして感應あらずといふことなし。さる程に徽宗天子は高俅楊戩等の勸めによつて、宋江に御酒を賜ひし後、聖意常に安からず、屢使ひを設け、宋江の消息を問んと思ひ給へ共、常に高俅楊戩の説に惑はされ、唯風花雪月の御遊に日を送り給ひしかば、四人の佞臣いよ／＼賢路を閉塞し、忠良の人を害しけり。皇帝或る日内宮に遊び給ひしが、忽ち李師々のことを思ひ給ひ、二人の小黄門を引て直ちに李師々の房前に至り、鈴の索を引給へば、李師々は慌たゞしく出迎へ、皇帝を臥房に請じ奉り、自ら房門を閉盛粧して立寄りけり。天子宣はく、寡人常にあらず。此頃は微しく病に染て、神醫安道全が薬を服せり。是をもつて久しく愛卿に逢ず。今一度愛卿を見て思慕の念をとぐ。李師々奏して云く、賤人も久しく陛下の聖恩を蒙りて報ずる所なし。今又聖顔を拜し喜悦に堪ずとて、宮姓に命じ酒肴を供へしめ、自ら杯を取つて皇帝に勸め奉りしかば、帝王も數杯を飲み給ひ、頻りに困倦し給ひ、李師々が膝に寄て休んとし給ひしに、忽ち冷風聖體に入て、燈燭の下に黄なる衣を着せし人、儼然として立ければ、帝王大に驚き問うて宣はく、汝は何人にていかなぞ此處に至るや。彼人奏していはく、臣は則ち

梁山泊宋江の部下に神行太保戴宗と申者なり。宋江御赦免に依つて、某も俱に武節將軍袁州府の都統制に封を受、病に依つて官を辭し、泰安州の岳廟に入て今其傍に住り。天子宣はく、汝何の爲にここに至るや。戴宗がいはく、臣が義兄宋江自から奏聞したきむねあり。是に依つて臣をして聖駕を迎へしむ。帝宣はく、輕々しく寡人を迎へて何國に行くや。戴宗がいはく、清秀甚しき地あり。因て陛下を行幸なさしめん。其時皇帝戴宗に隨つて房外に出で給へば、車馬悉く備はれり。

徽宗帝夢に梁山泊に遊ぶ

天子此時馬に乘じ行給ふに、忽ち雲霧四方に起り、唯風雨の音のみきこえて、前後を辨じ給はざりしに、程あつて雲霧すでに霧ければ、遙か向うを窺覽あるに、唯烟水渺茫として四方に高山聳え、日月の光無うして蘆葉蓼花洲前に暗く、鴻雁所々に哀鳴し曠々たる所なり。皇帝馬を駐め戴宗に問て宣はく、是は何といふ處ぞや。戴宗山上の路を指していはく、陛下彼所に至り給は、すなはち知れんと。皇帝馬を縦て三ツの關を過り、前の方を窺覽あるに、二百餘人の軍將各鎧衣甲盔を着し、地上に俯して拜しけり。此時帝大に驚き問て宣はく、汝等は皆これ何人ぞや。一人の大將頭に鳳翅を飾りし金盔を戴き、身に錦袍を着したるが進み出て云く、臣は則ち梁山泊の宋江なり。帝宣はく、寡人先達つて卿を楚州の安撫使とせしに、今何故に此所にあるや。答ていはく、請ふ陛下忠義堂に至り、臣が旨趣微細を聞給へ。其時帝馬を下り忠義堂に至り堂下を御覽するに、衆將各煙霧の中に拜せり。

宋江階を上て皇帝に向ひ涙を流しければ、帝問うて宣はく、卿何の故に涙を流すや。奏していはく、臣等昔年は天兵に抗拒ふといへども、原來忠義を主とし分毫も異心なし。一たび陛下の敕命を受けてより、遼の軍兵を破り、田虎、王慶、方臘を亡し、義兄弟の輩十にして八を失なへり。後勅命に楚州に任官してより、聊も百姓を侵さず、任所の士民馴順ひ平安静謐なり。然るに陛下何の罪かあつて、臣等に毒酒を與へ一時に害し給ふや。然りとはいへども臣ら、陛下の賜に身を失ひしことを微しも憾にあらす、唯恐らくは李逵此怨みを含んで異心を起こさば、是迄臣等が忠臣の清名なるを汚さん。此によつて某に賜はる處の毒酒を貯へ置き、使を潤州の李逵が任所に遣はし、彼を呼よせ欺き其毒酒をあたへて後の患を除けり。然るに孔明にも比すべき吳用、李廣に劣るまじき花榮、兩人も尋ね來つて唯忠義の爲に死しけり。是を以て楚州南門の外に葬られ、四人同じく蓼兒洼の高地に魂魄を集めり。里人集湊り忠義を憐んで、廟堂を立四時の祭りをなす。今臣等魂魄散せず、こゝにあつまつて平生の哀情を訴ふ。伏して望むらくは陛下鑑み給へと奏しければ、皇帝愕然給ひ、寡人自ら酒瓶を封じて卿に與ふに、何人か毒酒に易るや。宋江がいはく、陛下その時の使者に問給は、直ちに知るべしと奏しける。其時皇帝三關の雄壯なるを見て問うて宣はく、是は又何れの處ぞや。奏していはく、是臣らが昔聚りし梁山泊なり。帝また問て宣はく、汝等已に死して何の故に此地に集るや。答ていはく、天帝臣等が忠義を憐み、玉帝の命によつて臣等をして梁山泊の守護神となさしむ。故に臣ら此地に聚まり屈

情を述がたし。こゝに仍つて萬乗の主を勞して水泊に請じ、平生の哀情を告げ奉る。皇帝宣はく、汝ら何ぞ九重の禁闕に來つて寡人に告ざる。宋江奏していはく、臣は幽冥のいかなぞ鳳閣龍樓に近づかん。仍つて陛下を此地に迎ふ。帝宣はく、寡人暫時此地に遊ぶべしとありければ、宋江等各恩を謝しにけり。時に皇帝玉座を立て堂上より下つて、堂上の額を見給ふに、忠義堂と書せしかば、心中果して梁山泊なることを知り給ひ、すでに階を下り給ひし時、忽宋江の背後より、李逵双の斧を持つて跳り出で、高聲に叫んでいはく、宋の皇帝々々汝いかなぞ賊臣の讒言を聞いて我等を殺すや。今日只今其仇を報す。我は則ち宋江が部下にありし黒旋風李逵なりと、未だ言も終らず直ちに討つて懸れば、皇帝大に驚き階下に跌き給ふと覺しくて忽ち夢は覺けり。此時帝眼を開き給うてあれば、總身冷汗し給ひ、傍りを見給ふに、燈燭猶明らかにして、李師々は以前の儘にて猶眠らずありければ、上皇問てのたまはく、寡人只今何れの處へか行し。李師々奏して云く、陛下今少し寝給ふと。此時天子夢中に彼梁山泊に至り、宋江及び多くの將士に逢ひ給ひ、蔡京を始め朝廷の奸臣等が朕に隠して彼らに毒酒をあたへ、彼等已に死し陰魄散せず。今夢に告る處を語り給へば、李師々又奏して云く、凡人正直なる者は神と成ると聞けば、只今宋江已に死し、靈を現はして夢を陛下に託するにあらずや。天子宣はく、朕明日此事を正し若果して眞實ならば、必ず彼が爲に廟を建列候に封せん。李師々奏して云く、陛下若果してかくのごとくになし給は、眞に功臣の徳に負き給ふまじと。天子其夜は歎じて寐

給はず。次の日早朝文徳殿に出御あれば、蔡京、童貫、高俅、楊戩、各殿上に並び居しが、恐らくは天子の宋江が事を問ひ給はんことを恐れ、朝やんで各宮中を出で去ければ、只宿太尉のみ御前にあれば、天子則ち宿元景に問うて宣はく、卿楚州の安撫宋江の消息を聞きしりたるや。宿太尉奏していはく、臣曾て音信をきかずといへども、昨夜の夢に宋江臣に告て云、陛下毒酒を賜うて死し、楚人其忠義を憐んで南門外蓼兒洼に葬り、祠堂を建四時の祭り怠ることなしと見て覺め候と奏すれば、天子首を振うて、是寔に奇事なり。汝が語る處朕が夢見る處と同じとて、宿元景に命じ心腹の人を楚州に遣し、事の實否を聞繕はしめよと命じ給ふ。されば次の日文徳殿に出御なれば、高俅楊戩傍りにあり。天子問うて宣はく、汝ら近來楚州の安撫宋江の消息をきくや。此時兩人しらざるよしを奏す。聖慮甚だ安からざる處に、宿元景は心腹の人を楚州に遣しけるに、歸り來つて語りけるは、宋江實に賜りし毒酒の中つて死し、李逵宋江と等しく此酒に死し、吳用花榮も來つて歎きの餘り自ら墓の側に繼れ、四人の墓所相並べり。楚人忠義を憐んで、蓼兒洼高原の地に葬つて祠堂を建て、四時の祭怠ることなく、雨を祈つて雨を得風を祈れば風を得、極めて靈驗ありと具さに語れば、宿元景聞て其非命の死を憐れみ、天子四人の賊臣を信用し、幾度か其惡を知り給ひながら、忽ち又此面々の言處を信用し給ふは、第一天下の安危に係る處なりと、後來をも歎き思ひけるが、朝廷に於て具に聞通りを奏しければ、天子も悲傷に堪へ給はず。時に宿元景又奏しけるは、世の諺に大木は風に折れ忠義の士は奸佞

に惡まる。宋江は毒酒を賜りし本人なれば、暫くこれを聞き、吳用の軍慮、花榮が射術、李逵が強勇、此三ツを世に存しても、宋朝の天下いづれの州より窺ふことありとも、磐石のごとく陛下股肱爪牙の臣となるべき者、陛下に左右する四賊臣は賢路を忌塞ぎ、善良を猜み害ふのみにあらず、後來君の天下を危ぶめんことは眼前に明らかなり。臣陛下の爲に愁歎は、是のみなりと述ければ、天子も深く歎息し給ひしが、次の日早朝に百官の前に於て、高俅楊戩を罵り大に怒つて宣はく、汝ら朕に勧め宋江に酒を賜はしめ、毒酒に易へて宋江を鳩殺したるを知れり。汝等忠良を忌妬する奸臣、いかにぞ朕が天下を亡さんとするや。兩人地上に俯して罪を謝し奉れども、龍顏猶も安からず、蔡京童貫傍より奏して云く、陛下先づ怒りを息給へ。人の生死ごとくく定りあり。況や楚州より未だ申狀あらざれば、其虚實を知りたしと、色々と奏するにぞ、遂に巧言に惑ひ給ふぞ淺ましき。時に天子叱つて高俅楊戩を退けし、め御酒を齎せし勅使を召しむるに、料らずも其者はその後病死せしよしを奏すれば、又宿太尉を召して、共に宋江の忠義なることを語り給ひて、各傷むに堪ず。去程に宋江の弟宋清は官に封せられ、宋江の職を續でありしが、久しく風疾に侵され、自ら表を奉り官を辭し、故郷の鄆城縣に回り、元のごとく農業を働んことを願ひければ、天子其孝を感じ給ひ、錢十萬貫田地三千畝を賜つて其家を贍はし、其子安平を朝廷にめされ、後來官を進んで秘書學士となり、子孫永く榮えけるとなり。去ほどに天子は再び自ら勅狀を書し、宋江を封じて忠烈義濟靈應侯と追號し、錢百萬貫

を賜つて梁山泊に廟堂を建立し、靖忠之廟といへる御筆の額を給ひ、玉戸珠門彫簷畫棟その美しいふべからず。黄金殿上には宋公明を始めとして、三十六人の天罡星の像を安置し、左右の廊下には朱武を肇めとして、七十二人の地煞星の像を安置して、四時の祭怠ることなしとかや。されば後々に至つて宋公明しばし靈をあらはし、雨を祈れば雨あり、風を索れば風を來し、立どころに感應あらずといふことなし。されば楚州蓼兒洼も靈驗あらたなりければ、重ねて大殿を建立し、其結構梁山泊に劣ることなく、年々四時に祭をなして萬民頂禮し、今にいたるまで斷絶なしといへり。尤も古跡今に存せりと云々。太史唐律二首哀挽の詩あり。云く、

莫把二行藏一怨二老天一 韓彭當日亦堪憐 一心征臘摧鋒日  
 百戰擒遼破敵年 煞曜罡星今已矣 讒臣賊相尙依然  
 早知鳩毒埋黃壤一 學取鳴夷泛釣船一

又

生當二廟食死封侯 男子平生志已酬 鐵馬夜嘶山月暗  
 玄猿秋嘯暮雲稠 不須出處求真跡 却喜忠良作話頭一  
 千古蓼洼埋玉地 落花啼鳥總關愁

後人の詩に

由來義氣包天地 只在二人心方寸間一 罡殺廟前秋日淨  
 英魂常伴二月光一寒

又一律あり

梁山寒日淡無輝 忠義堂深晝漏遲 孤塚有三人薦三蘋藻一  
 六陵無淚濕冠衣 內苑羯鼓催花發 小殿珠簾看雪飛一  
 義血一腔人百八 罡光煞耀仰神威一

跋

支那有水滸傳之作。世稱奇筆。抑水滸也者。梁山泊之謂傳也者。所聚水泊。天罡地煞一百零八人來歷之謂。卷中之目錄者。如蒙求標題。本文者似各譜。惟原出稗史家一時之戲編。表題冠忠義二字。吳門金聖歎斷一百回為七十回。且省忠義二字。此書專言寇盜放火殺人。之事業。普演俠者不避水火之意氣。其間世態萬變。互交。惟異奇譎。屢儲夢寐託宣。且往々假正史實有之人。強首尾一部。故皇帝叱四賊官。屢而不果。咎有似兒戲。是作者不得止也。諺云。盛名之下。難久居。易云。君子見幾。而作無至悔。宋江盧俊義不曉之。倘令燕青為宋盧。疾察毒饌不食。鳩酒不飲。然此時金國兀求之軍事起。宋盧吳用李逵之們。不如斯一部難約。是亦作者所不得止也乎。嚮水滸畫傳一編十卷刻成。東武簑笠翁所新譯也。其旨趣卷首備言。愚因書肆之需。嗣編八十卷稿。

畢。間有論者之言。舉之。通計九十冊而滿尾焉。固不學老衰之所述。謬誤可夥。四方之君子。枉賜宥恕。

文政戊子孟冬

東武南郊伊皿子隱子高井蘭山翁述

水滸傳(第三卷終)

西遊記序

太史公曰。天道恢々。豈不大哉。譚言微中。亦可以解紛。莊子曰。道在屎溺。善乎立言。是故道惡乎往而不存。言惡乎存而不可。若必以莊雅之言求之。則幾乎遺。西遊一書。不知其何人所爲。或曰。出今天潢何侯王之國。或曰。出八公之徒。或曰。出王自製。參覽其意。近跡地滑稽之雄。卮言漫衍之爲也。舊有敘。余讀一過。不亦著其姓氏。作者之名。豈嫌其丘里之言與。其敘以爲孫。孫也。以爲心。神馬々也。以爲意。馳八戒其所戒八也。以爲肝氣之木。沙流沙。以爲腎氣之水。三藏々神藏聲藏氣之三藏。以爲郭郭之主。魔々。以爲口耳鼻舌身意恐怖顛倒幻想之障。故魔以心主。亦心以攝。是故攝心以攝魔。々々以還理。々々以歸之太初。即心無可攝。此其以爲道之成了。此其書直寓言者哉。彼以爲大丹之數也。東生西成。故西以爲紀。彼以爲濁世不可以莊語也。故委蛇以

浮世委蛇不可以爲教也。故微言以中道。理道之言不可以入俗也。故浪謔笑謔以恣肆。咲謔不可以見世也。故流連比類以明意。於是其言始參差而諷詭。可觀。謬悠荒唐。無端崖涯。淡而譚言微中。有作者之心。傲世之意。夫不可沒已。唐光祿既購是書。奇之。益俾好事者爲之訂校。秩其卷目。梓之。凡二十卷。數十萬言有餘。而充敘於余。余維太史漆園之意。道之所存不欲盡廢。況中慮者哉。故聊爲綴其軼叙。余之不欲其志之盡湮。而使後之人有覽得其意。忘其言也。或曰。此東野之語。非君子所志。以爲史則非信。以爲子則非倫。以言道則近誣。吾爲吾子之辱。余曰。否。否。不然。子以爲子之史皆信耶。子之子皆倫耶。子之子史皆中道邪。一否。非信。非倫。則子史之誣均。均。則去此書。非遠。余何從而定之。故以大道觀。皆非所宜有矣。以天地之大觀。何所不有哉。故以彼見非者非也。以我見非者非也。人非人之非者非。人之非人之非者。又與非者也。是故必兼存之後可。於是兼存焉。而或者廼亦以爲信。屬梓成。遂書冠之。

畫本西遊記刻成。近屬文金堂者。浪華書肆也。遙寄書請叙於余。余以爲。古人往々叙其書。而文辭皆錦繡。亦不可暨焉。因錄舊遂還之。

文化丙寅仲春望

江戶曲亭主人書

西遊記

初編卷之一

靈根孕育源流出  
心性修持大道生

混沌の初其狀卵のごとし。陽氣の輕く清るは上浮みて天となり、陰氣の重濁るは下凝て地と爲る。其中に萬物ごとく發生し、人を生じ獸を生じ、禽を生じ、天地人の三才それごとくに位す。盤古氏の開闢せし時、世界わかれて四大部州となれり。即ち其國の名を東勝神州、西牛賀州、南瞻部州、北俱盧州と號す。其東勝神州の海外に一ツの國あり名を傲來國といふ。此海中に一ツの山あり華果山と號す。山の上に一塊の怪石あり。開闢以來天地の精氣を持ち仙胎を育り。ある日此石忽迸裂て、龜のごときなる石卵を産けるが、化して一ツの石猴となれり。此猴眼より金色の光りを發ち上りて天に輝きしかば、此時上聖玉帝天上の寶殿にましまして、此光りを見てあやしみ玉ひ、千里眼順耳風の兩大將を召して看せしめ給ふ。此千里眼は一目に千里の外を見ぬき、順耳風は居ながら世界のあらゆる



事を聞知れり。かゝる名譽の兩將なれば、かしこまり南天門を開きとくと見聞し、やがて歸り報じけるは、東勝神州傲來國に石猴ありて、眼より金色の光りを發ち候。此猴水を飲五穀を食し候へば、此光りもやがて息み候はんと奏す。玉帝聞給ひ是怪にたらずとて打捨て置れける。されば石猴漸生長し、峰に遊び洞にかくれ、鶴に伴ひ鹿とたはむれ歲月を送りけるが、ある時群猴と共に飛泉の下に遊び居りしに、一ツの猴言を出し、誰にてもあれ此飛泉の水を潜り、中の形容を見届る者あらば、拜して我徒の王と尊むべしと云。時に石猴すゝみ出、我よく是を見届んと云もあへず身ををどらせて瀑布の中へ飛入たり。拇頭を上げて見まはせば、瀧の内は却つて水なく、前に鐵の橋あり其傍に石磧あり。華果山福地水簾洞洞天といふ十字を鐫たり。橋を渡りて行ば、數歩朗らかにして人家の住居に同じ。石猴見終りて再び瀑布の外に跳り出、群猴にむかひしかくのさまを物語り、是我輩の安居すべき究竟の處なり。我にしたがひ瀑布の中へ來れやとて、多くの猴をとまなひ、重ねて瀧の内に案内しければ、衆猴ども内のありさまを見て大きに悦び、先に約せしごとく石猴を拜して群猴の中の王とす。爰に於て石猴自ら美猴王と名を稱し、猿猴、獼猴、馬猴等の衆猴を従へ、朝には華果山に遊び、暮には水簾洞中に宿し、已に三百餘歳を経たり。一日美猴王長嘆して謂て曰く、我今人王をも恐れず猛獸をもものゝかすとせず、洞中に有て樂といへども、後年老血氣衰闕王のとははれと成り、亦世界輪回の中に生れんこそかなしけれ。しかし爰を去て遠く世界の中を周流し、神仙を尋て不老長生



の術を學んとて、多くの猴にいとまを乞ひ洞中を出たりしが、枯松を編て椀となし、竹をきりて筒となし、そことも知らぬ大海の波の上を擡出ける。數日東南の風に吹れて、終に南瞻部州の地に着たりける。猴王やがて岸に上り彼方此方と立やすらふに、海邊の漁人之れを見て大きに嚇ろき、あなおそろしの大猴やと、ちり／＼に逃走るを、猴王追かけて一人を拿へ、其衣裳を剝取て是を着し、市塵の中に入れて人の禮を學び人の詞をならひ、如何にもして神仙をたづね、長生不老の術を需んと日夜心を盡しける。かくて八九年の歳霜を過し、再び筏に乗りて西洋海を渡り、遂に西牛賀州の地に至り、岸に登りて歩み行に、山高く峰秀誠に希代の勝地なり。時に林の中に歌唱ふ人聲す。猴王耳を冷して是を聴に、其歌の辭に曰く、

觀棋柯爛。伐木丁々。雲邊谷口。徐行賣薪。沽酒狂笑。自陶情蒼。逕秋高對月。  
枕三松根。一覺天明。認三舊林。登崖過嶺。持斧斷枯藤。收來成一担。行歌市上。易米三升。更無些子。爭競。時價平々。不會機謀。巧算。沒榮辱。恬淡。延生。相逢處。非仙。即道。靜座。講黃庭。

猴王これを聞て大きによろこび、扱は神仙此地に在なりと、忙ぎ走りよりて是を見れば、一人の樵夫斧を持て柴を伐居たり。猴王禮をなして老神仙と呼ぶ。樵夫もまた甚だ愕き、我は卑き山賤なるに何故に神仙と呼び玉ふと云に、猴王喚うて、今の歌を聞に、相逢處非仙即道靜坐講黃庭と歌

ひ玉へり。黄庭とは道德の眞言なり。神仙にあらずしていかでか是をうたひ給はん。樵夫これを聞きて打笑ひ、此歌は我作る所にあらず、此里に一人の神仙有り、名を須菩提祖師と申すが、此歌を我に教て唱しめ給ふなりと云ふ。猴王の曰く、其神仙の住給ふ處はいづくなりや。樵夫則ち指さしてくはしく是れををしへぬれば、猴王大きによろこび禮をなして相別れ、教へのごとく南の方七八里來り見るに、果して一座の洞府あり。洞門堅く閉て更に入語の聞ゆるなし。前に石碑ありて靈臺方寸山斜月三星洞の十字を鐫付たり。猴王もみだりに門を敲かず、踟躇して行けるに、一人の仙童門を開き立出て猴王に向ひ申けるは、我師汝が門外に、イあるを知り玉ひ、道を學ぶ弟子なるぞ、むかへ入よと命じ玉ふ。汝果して道を修行せんと欲する者か。猴王愕て禮をなし、小子實に道術を師に聽んとす。希くは引て見えしめ給へといふ。童子則猴王をぐして俱に洞の内に入り、直に瑤臺の下に至れば、祖師臺上に座して、左右に三十餘人の仙人ならび立り。猴王謹で禮拜し、道を學んことを乞。祖師の曰く、爾何國の者にて姓名は如何。猴王のいふ、弟子は東勝神州傲來國華果山水簾洞の者にて、候の名師を尋ること十餘年、洋を渡り界を越、幸に祖師を拜する事を得たり。且又弟子姓名も名もなし又父もなく母もなし。我本國華果山上に一ツの仙石あり。其石中より産出たり。祖師笑うて、爾が軀まきに獅猴によく似たり。我爾が身にしたがうて姓名を定むべしとて、姓を孫名を悟空と賜ふ。猴王再拜して恩を謝し、終に此洞中に留り、只一心に道を學ばんことを願ひける。

悟二徹 菩提眞妙理  
 斷魔歸本合三元神

去程に孫悟空は洞の中に在て、道を學び聽事覺えず六七年、唯長生の道を學ばんとのみ希ひて、更に外の道を聞事を求めず。祖師も悟空が才智衆に秀たるをしらせ給ひ、或時試みに僞はつて大きに怒りをなし、手に戒尺を持って罵て曰く、爾が猴猴智恵、此をも學ばず、彼をもまなばず、何事をなさんとするやとて、悟空が頭を三下打、手を背に付て走て中門を闢入玉ふ。悟空此動靜の子細ありげなるを見て、其意を按じ見るに、頭をみたび打給ふは三更の時なり。手を背にして走て中門をとざし給ふは、我に後門より寢所に來れ。人に語らざる道を密に傳へ玉はんとの謎なりと悟り、其夜子の剋しのびて後の門を押に、果して此門半開たり。さればこそとて身を側て門内に入り、地に跪て祖師の覺るを待ひたり。暫ありて祖師眠覺め、悟空を見て、爾夜中爰に來りて何事をかたすやと咎め玉ふ。悟空對て、師父きのふ弟子に、三更の時後門より來れ道を傳んと宣へり。此故に無禮をも願す。此に來つて教を俟。今傍に會て人なく只弟子一人のみなり。希くは不老長生の道を傳へ玉へ。永く師恩の深きをわすれ候はじと申す。此時祖師悟空を近くまねき、長生の妙道を委しく授け玉ふ。悟空謹で其口訣を受け、よろこぶ事いはんかたなし。是より後日夜其術に工夫をこらし、又三年を過しける。ある時祖師悟空に謂て曰く、汝長生の妙道を學び法性頗通するといへども、却てまた三つの災あり。是を

防ぐの術ありや。悟空答ていふ。それ道隆く徳高き時は天と壽を同じうす。水火既に齊き時は百病生せずとこそ承る。何ゆゑに三つの災は候ぞや。祖師の曰く、今より後五百年を経て雷災あり、備が身を砕くべし。亦五百歳の後火災あり、備が身を焼くべし。また五百年にして風災あり、備が身を吹壊るべし。是備が三つのわざはひなり。悟空是を聞て大きにおそれ、師父憫をたれて此三災を免れしめ給へ。爰において祖師悟空が耳に口をつけ、七十二般の地煞變化の法を傳へ給ふ。悟空一々に是を傳授し悦で道法を練ること又三年、終に雲中を飛行せるの道を得たり。祖師是を見て示し玉ふ。備が雲中に在るは飛行せるにはあらず。是雲の中を爬ある者なり。備に筋斗雲の法を授べしとて、又一つの秘方を傳へ玉ふ。此筋斗雲の法は、只一刻の間に十萬八千里を飛行せる自在の法なれば、悟空またはを練ること數年、既に功業完く備り、天地の間に於いて妙道を究めずといふことなし。一日門下の弟子等松樹の下にありて遊びしが、皆悟空にむかひて云ふ。前日師父備に變化の法を教玉へりと聞き。今試に身を變じて松の樹と化し、我輩に見せよかしと望みぬれば、悟空いとやすき事なりと身を揺すと見えけるが、忽變じてひとつの松の大木と化たりけり。あまたの弟子等之を見て、手を打聲を上化し得たるかな奇なり妙なりと稱讚せる事かしがまし。祖師此聲を聞て門外に出て是れを見れば、悟空變身の法を行ひすまし、一大松樹と化したりける。祖父徒弟等を遠く退ぞけ、悟空をまねきとてして曰く、備衆弟子の中に於て變身して松樹と化したり。人皆備が其術にくはしきを見て、必ず備に

求て習ひ得んと乞ふべし。備若傳へずんば渠必ず害心をさしはさみ、備が命も保ちがたからん。快く此所を去て性命を全くせよとの給へば、悟空是を聞て兩眼より涙を流し、我師父にわかれまわらせ、何國の所へか還り申べきと、さめくと詫び歎きけるを、祖父聲を勵して、備何より來たりいづくより去ると示し玉ふに、悟空忽悟り、我は東勝神州傲來國華果山水簾洞の者なりとて、遂に祖師に暇を告げ、即ち筋斗雲に打乗、直に華果山に還り來り、雲より下て聲を高くし、小猴どもいづくに在りや、只今かへり來りたりと呼れば、數萬の猴ども我おくれじと走り出、悟空が前に禮拜し皆一同に申けるは、大王爰を去玉ふの後、我々洞中にかく守りて御歸りを相待しに、このころ一人の魔王此洞を奪ひ取らんとす。是に依て我々力を盡し、防戦ふといへども、却て渠に多くの子弟を生捕られ、既に此山も洞もことごとくかの魔王に奪はれんとす。大王よろしく計りて此妖魔を退ぞけ玉へと云。悟空聞て大きに怒り、此魔王は何れの處より來れるや。もろくの猴答て曰く、渠が住所は此真北に在りと覺候。風のり霧を踏て、自ら混世魔王と名乗飛來候程に、道のほどはいかほどなりとも知り侍らず。悟空是を聞終て忽ち身を聳だて雲上にのぼり、北の方へ飛行はるかに四方を見渡せば、嶮山の間に物の聲あり。頓て雲を下て伺ふに、一ツの水臟洞あり。門外にあやしの小鬼たはむれあそび居たりしが、悟空を見て大きに驚き、我先に門内に逃入にぞ、悟空大音に呼ばはりけるは、備等走ることなかれ。我は是華果山水簾洞の主、備が家の混世魔王我が眷屬をあなどるよし、特に來つて仇を報ず。早

く出て我と闘ひを交へよと罵りけるを、かの魔王ほのかに聞て甚だ憤り、身に金盃鐵甲を着し大の刀を手に握り門外へ走り出、水簾洞の主はいづくに在、はやく来て死を快くせよと、大聲一喝山谷を動搖せり。悟空口を開て呵々と笑ひ、備眼大なりと雖も我が此所にあるを見る事能す。魔王も又大きに笑ひ、あな無慚や備が身纒かに四尺に満す、來つて我に闘んとは、卵を以て大石にあたるがごとし。みよく唯今粉のごとくなし捨んと、大刀を振て斬てかゝる。悟空其時身外身の法をつかひ、身内の毛一把を抜て口に含み、空に向つて噴出せば、忽三百有餘小猿と化し、かの魔王が身邊にむらがりかかり、面部手足のきらひなくひしくとりつきて、唯一寸も働かせず。悟空即ち走より魔王が刀を奪取、兩段に砍て捨洞の中へかけ入て眷屬どもを殺し盡し、魔に生取れし小猿等をたづね出し、水洞を焼て再び雲中に身を投じ、水簾洞にぞかへりける。

初編卷之二

四海千山皆拱伏  
九幽十類盡除名

孫悟空は混世魔王を退治し、水簾洞に歸りて後、屬手の猴等をあつめ日々に武藝を習はしめ、傲來國に行てあまたの鈎戟兵器を奪ひとり、小猿どもにわかちあたへ、専ら洞中を守るの備へをなし、其身は龍宮城に至りて武器をもとめんと、かの水簾洞の橋の下に入り、閉水の法をつかひ、波濤を潜り終に東海龍王の都に至る。忽ち海底を見めぐりする役人巡海夜叉といふ者、悟空を見て甚だいぶかり、備は是何處の者なれば、爰に來て王城を窺ふやと咎めけるに、悟空答へて、吾は華果山の天生聖人孫悟空といへる者なり。備却て我を知らざるは何事ぞや。夜叉これ聞て急ぎ龍王にしかくと言上す。東海龍王忙ぎ出迎へ、誘ひて殿に上り問て曰く、上仙何の時道を得て何れの仙術を得玉ひたるや。悟空が曰く、我生れ出ると其儘出家修行し、無生無滅の體を得たり。このごろ我眷屬どもに武藝を習はずにより、特に來りて打物を需んとす。龍王聞て易き事にて候とて、其重さ三千六百斤の九股叉と七千二百斤の方天戟をとり出し、悟空が前にさし置ば、悟空手にとりて打ふりく試けるが、龍王を

願て曰く、我が、る輕き武器は是をつかふに手にたらず。いかにもおもき武器を出して與へ候得。龍王の曰く、上仙おもき武器をもとめ給は、我海藏中に收めたる神珍鐵の如意棒を見玉へとて、誘いて海藏に至る。悟空近よりて是を見れば、鐵棒の長さ二丈餘りにして金色の光輝たり。兩端に金の箍を入れ、如意金箍棒重一萬三千五百斤と、一行の文字を鐫つけたり。悟空まづ兩手をもつて此棒をとり上、恨らくは此棒あまり長く餘り太しと、其いふ言未だ終らざるに、不思議なるかな此鐵棒忽ち縮みよりて、悟空が心になひたる手ごろの棒と變じたり。悟空大きにあやしみ龍王に向て其故を問ふに、龍王の曰く、此神珍鐵の棒は、往昔夏の禹王水を治め玉ひし時、海の深淺を定め玉ひし定子なり。伸す時は上は三十三天に至り、下は十八層地獄に及ぶ。また縮まる時は僅に一二分計の綉花針となりて、耳の中に藏し入る。眞に奇妙の如意棒なり。悟空是を聞て大きによろこび、猶甲やあるあたへ候得と請ふにまかせ、藕絲步雲の履一雙、鎖子黄金の甲一副、鳳翅紫金の冠一頂をとり出してあたへければ、悟空よろこぶこと斜ならず、終に龍王に別を告げ水簾洞へ歸りける。爰にふしぎの事ありけるは、一日悟空醉に乘じ松樹の下に睡眠けるが、夢に怪しげなる者二人出來り、悟空を引て大きな城門の前に至る。悟空頭を上げて城門を見れば、一つの鐵牌に幽冥界の三字を書たり。悟空問て曰く、幽冥界とは閻王の居所にあらずや。何の事ありて我を此所にいざなひ來りしや。かの兩人答ていふ。爾今娑婆の命數盡きたるにより、我等兩人勾つれて爰に來れり。悟空聞もあへず大きに怒り、

忽ち耳の中より件の如意棒をとり出し、其長一丈ばかりの鐵棒となし、唯一打にかの兩人を打殺し、鐵棒を水車にまはして城中へ打入れば、あまたの鬼ども驚きおそれ、森羅殿に逃上り、騒ぎあへる事大かたならず。十代冥王これを聞き急ぎ出迎へ、悟空を見て其姓名を問ふ。悟空此時大きに呼ばはつて曰く、爾等我名を知らずして、何ゆゑに人を遣して此所へよびよせたるや。我は是華果山水簾洞天生聖人孫悟空なり。元來仙道を修行し天と壽をおなじうし、三界を出で輪回を去れり。然るをなんぢらいかなれば我命數のつきたるといふや。冥王の曰く、上仙まづ怒りをとめ給へ、天下の裡に名の同じきものもあまた有るべし。是かならず人錯にてこそ候はん。悟空が曰く、我曾て聞ことあり、爾等が冥官の記し置く生死の簿子ありと聞き。持來つて我に看せよ。冥王乃掌案判官を召して生死の簿子をとりに出す。悟空手にとりてくりかへし是を見るに、猴の類ひの中に孫悟空天産の石猴壽三百四十二歳善終すべしとかき記せり。悟空筆をとりて眞黒にこれをぬり滅し、其餘猴の名あるものをことごとく滅し終り、かの如意棒をふりまはし、冥王に物をもいはず幽冥界を出ると思へば、忽夢は覺たりける。今に到て猴の類ひの命長きは、陰司生死の簿子に名を除きたる故なりとや。さるほどに東海龍王は、孫悟空無體に武器をとり歸りし事を憤り、表を作て上天玉皇上帝に奏聞し、其罪を糺し給はん事を告せば、又幽冥よりは教主地藏王菩薩よりも、悟空が生死の簿子をぬり滅たるよし訴たへぬれば、玉帝文武の仙卿をあつめ、はやく討手を下さんと議し給ふに、太白星すゝみ出て奏しけるは、此

猴今既に仙道を修し得て獸もの、類ひにあらす。今勅使を下して彼を天上にめし上し、官職を授けて此處に留め置き、若天命に順は、再び恩賞を行ひ、天命に違ひなば其時とらへて刑罰を行ひ給へ。玉帝是にしたがひ給ひ、即太白星を勅使として華果山へこそ下されける。

官封三弼馬一心何足

名註三齊天一意未寧

太白星は玉帝の命を受既に水簾洞に至り、孫悟空に對面し勅諭のおもむき審に述べれば、悟空一言の異議に及ばず、太白星ともろともに天上に至り、靈霄殿の下に參りて玉帝を拜す。玉帝即悟空をもつて弼馬溫の職を授け給ふ。此弼馬溫の職は馬を養ふ役にて、甚だいやしき官なれども、悟空元來官職の高下をしらず、よろこびて任に到り、已に半月を経たりけるが、同寮の官人が物語りに、馬をやしなふ賤官のよしを始め聞、牙を咬んで大に怒り、我華果山に在時既に王位にのぼれり、如何ぞ我をあざむき來りて、馬を養はしむるやとて、忽耳の中より如意棒をとり出し、變じて一丈餘りの鐵棒となし、御馬監を走り出で華果山へこそ立かへり、屬手の衆猿あつまりむかへ、大王天上にありて榮花を受給ふならん。抑何れの高官をか得て歸り給ふと問ふ。悟空憤然と答て曰く、玉帝元來人を用ふることを知らず、我に馬を養ふいやしき職を授け、頗恥辱をあたへたり。是に依て遂に走て爰にかへれり。衆猿是を聞て申けるは、大王此洞中に在して歡樂に足ざることなし。何の望ありてか

天上に至り、かゝるいやしき職を受給ふや。我徒快く酒をすゝめて、大王の悶りをやすめ奉らんと頓て酒宴を催し、良興を催しける時に、獨角の鬼二人赫黃袍一領を獻じて孫悟空が前に再拜し、永く手下に屬せんと乞ふ。悟空大さによろこび、かの鬼兩人を先陣の大將と定め、赫黃袍を身に着し、自から齊天大聖と稱し、一ツの大旗に此四字を書記し洞門におし立、天兵若も押來たらば、只一息に討破んと、勢ひ猛にまち居たり。此時天上には孫悟空職を捨て下界へ出奔せし事、其儘に打すがたしとして、文武の仙卿詮議の上、早く追討あるべきに一定し、托塔李天王と其子哪叱太子を降魔大元帥となし、下界に向うて進發ある。李天王の先鋒巨靈神真先に宣花斧を提水簾洞に跑来り、魔賊孫悟空はいづくに在るや。李天王が部下巨靈神將追討のため爰に來れり。はやく出て勝負を決せよと大音に呼ばれば、悟空其時鎖子黄金の甲を着し、如意金箍棒を提あまたの猿を引領門外に走り出、巨靈神に向うていふ。爾無用の言を費やさずして、早く天上に歸り玉帝に奏して、我を齊天大聖の官に陞さば、我又軍兵を動すまじ、若是に順ずんば靈霄寶殿に打上り、玉帝を追落し我其位に代るべし。巨靈神是を聞て大さに怒り、斧をまはして斬てかゝる。悟空件の如意棒を振りて迎へ戦かひいまだ三合ならざるに、巨靈神が宣花斧真中より打をられ、心驚本陣さして逃歸る。哪叱太子是を見て、忽三身六臂の形と變じ、斬妖劍、砍妖刀、縛妖索、降妖杵、綉毬兒、火輪兒の六般の兵器をたづさへ、悟空を目がけ打てかゝる。悟空もまた三頭六臂と其身を變じ、如意棒を三條に分け、むかへ進て鬪ふ事



半時ばかり、いまだ勝負も見えざる處に、悟空一木の毛を抜て忽變じて我身となし、前面にありて哪叱と戦ひ、正身の悟空は哪叱太子が後にまはり、如意棒を上げて左の肩をはつしと打ば、さしも勇猛の哪叱太子は叶はじとやおもひけん、是も本陣へ逃入たり。大元帥李天王是を見て大きに愕き、渠かくのごとき神通あり。急に征せんことあたふべからず。一先天上に歸り評議の上加勢を乞うて再是を討べしとて、遂に太子と共に軍勢をまとめ、天上に歸り、しかくと奏聞すれば、玉帝も殊におどろき給ひ、誰か李天王を助て此魔賊を捉べきやとありけるに、太白星すゝみ出て奏して曰く、只今加勢をもつて急に攻打給ふとも、たやすく勝利を得こと覺束なし。先渠が望にまかせ齊天大聖の官をあたへ、此所にめしよせ養ひ置給ふ時は、天地の間永く靜謐に候べし。玉帝此議に従ひ給ひ、重て太白星を勅使として下界に向て遣し給ふ。太白星則ち水簾洞に來り悟空に對面し、我玉帝に奏し足下を以て齊天大聖の官を請受たり。早く天に上りて此官を拜受し候得と申ければ、悟空是を聞て甚たよろこび、再たび太白星にしたがひて天上に赴ける。

亂蟠桃大聖偷丹

反天宫諸神捉怪

此蟠桃園といふは三千六百  
 程に玉帝君は孫悟空を封じて齊天大聖とし、蟠桃園を權官とらしむ。此蟠桃園といふは三千六百  
 株の桃の木を植られたり。前の方一千二百株は花微菓もまた小さし。三千年に一たびみのる。是を吃

ふ者は仙道を成就す。中の園にある一千二百株の桃は花層ひらきて實もまた甘し。六千年に一たび  
 熟す。是を吃ふ者はよく長生不老、よく雲に上りて飛行す。後の一千二百株は紫の紋もえぎの核あり。  
 九千年に一たび熟す。是を吃ふ者は天地と壽を同うし、日月と年をとにもす。悟空これを聞て一日衣  
 裳を脱ぎてかの樹上にかき登り、熟せし菓をあくまで偷み吃ふ。此時玉帝の御后王母蟠桃會をなして、  
 天仙をまねき給はんとて、七仙女に仰て桃の實を摘せ給ふ。七仙女おのゝ花籃をたづさへ桃園に來  
 り、齊天大聖に告て園に入るべしとて、こゝかしこ尋ねけれども、悟空はさらに見えず。只冠裝束  
 のみ樹下に脱捨たり。仙女どもせんかたなく樹の下に立より、多くの桃を摘たりけるに、此時悟空は  
 其長二尺計の小猿と變じ、桃の實に喰飽て南の枝の木の葉隠れに眠りたりしが、物音に目覺め俄  
 に本相を現し、耳の内より例の金箍棒を掣出し、大音にて爾等何者なれば桃を偷むや。我悉討殺す  
 べしと罵りければ、仙女等大きにおどろき地に跪て申けるは、大聖怒りを息たまへ。只今王母蟠桃  
 會をなし給はんとて、我徒に命じて桃の實を摘せ給ふ。先に大聖をたづねて告申さんとおもひしか  
 ども、大聖更に見え給はず、刻限の遅なりつらんと押して園に入侍ひぬ。希くは罪を免し給へ。悟空が  
 曰く、王母會をなして誰人をかまねき給ふぞ。仙女の曰く、西天の佛老菩薩、聖僧羅漢、南方の南極  
 觀音、東方の崇恩聖帝、北方の北極靈、中央の黃極黃角大仙、其外八洞の尊神ことごとく集り給ひ  
 候なり。悟空の曰く、我は是齊天大聖の官仙術において至らざる所なし。然るを王母この蟠桃會に

我をまねき給はざるは何事ぞや。爾暫く此所において吾消息を待べし。則ち定身咒を唱へ仙女にむかひ住まれ〜と叫ほどに、七仙女皆樹の下に身をよせて、さらに一步もうごく事あたはず。悟空急に雲にまたがり寶閣瑤池に行て見るに、さまざまの珍珠いろ〜の嘉肴うづ高く積みならべ、右の長廊に酒甕多くかさね、數十人の官人傍に並居てこの酒肴を護り居たり。悟空このありさまをとくと窺がひ見、身の毛二三十根を抜て口中に入れ、嘔吐して噴出に、忽多くの瞋睡蟲と變じ、守護の官人に向うてとびかゝれば、不思議なる哉一人も残らず臥倒れてねむり入り、さらに前後を知るものなし。悟空則ち走りよつてかの酒肴を引ちらし、意にまかせて飲噉醉に乗じて走り出齊天府へといそぎしが、いかゞして道を踏たがへけん兜卒天にぞ至りける。此所は太上老君の住給ふ所なるが、折節老君法を説給ふに、仙童等聽聞に出て一人も門を守るものなし。悟空折よしと窺ひより、仙家の寶とする九轉の金丹を葫蘆の中に納五ツまで貯たり。悟空此金丹を傾けこと〜く吃ひ盡し、今は我身の罪科重なる上は、玉帝よりゆるし給ふまじと心を思惟し、忽隱身の法をつかひ西天門より走り出て、一參に華果山へこそ歸りけり。此時天上には玉帝悟空が罪を犯したるを誅し給はんとて、十萬の天兵を發し下界に下し給ふ。其先陣の大將九曜星真先に水簾洞におしよせ、孫悟空いづくにある、早く來つて我と戦かひ交へよと大音に呼はれば、孫悟空も如意鐵棒を眞向にさしかざし、門外に躍り出で九曜星と二十餘合戦ひしが、九曜星終にかなはず本陣へ引入たり。是を見て天軍には四大天王二十八宿隊

を別ち備へをかため、悟空をめぐり押來れば、悟空もまた味方を下知し、獨角鬼王七十二洞の妖王をはじめ、數萬の羣猴を率て陣を對し、相がかりにかゝり喚き叫んで戦ひけるが、鬼王妖王等打まけて残らず天兵に生どられ、衆猴どもさん〜に成て水簾洞に逃かへる。悟空は是をこと〜もせず、四大天神托塔哪叱を相手とし、火花を散して戦かひしが、透間を見て一把の毛をぬき百千の悟空と變じ、めい〜鐵棒をふりまはし、群がりがかゝつて打立れば、もろ〜の天神さへかね、四度路になつて引退く。悟空もまた強ちに是を追す毛を集て身に收め、明日の軍には大神通をつかひ、天將を生捕へしとして、其日は水簾洞にぞかへりける。

觀音赴會問原因

小聖施威降大聖

此時南海の觀世音菩薩、其弟子惠岸行者を引つれ蟠桃會に赴給ふに、悟空會を亂し罪を犯して只今合戦の最中なるを聞給ひ、惠岸を遣して軍の動靜を見せしめ玉ふ。惠岸即ち鐵棒を携さへ華果山に來たり、自から轅門に出て悟空を見る。其時悟空も衆猴の中より如意棒を打ふりをどり出、惠岸を目がけ只一打と打てかゝる。惠岸元來勇猛不双の手だれなれば、同じく鐵棍さしかざし半時計りも戦かひしが、惠岸終に敵する事あたはず、これも本陣さして引退ぞく。此時玉帝の令甥顯聖真君灌江口におはしけるが、加勢のためとて本部の神兵を引領し、鷹をすゑ犬を牽せ華果山に來り給ふ。四大天王李

天王いそぎ出迎て對面し、軍の次第詳らかに述べられければ、神君笑うて此妖魔いかに神通を得たりとも、我かならず擒とすべし。四大天王は我戦ひ接るとき、四方をかこみて逃ぐる敵を打ちとるべし。托堵天王は空中に在て、照妖鏡をもつて渠が隠るゝ所を照し給へと、手分すでに定めければ、真君みづから神兵を引て水簾洞へおしよせ閑の聲を上たりける。悟空例の鐵棒を打ふり、一言の問答にも及ばず真一文字に討つてかゝり、真君と相むかへ戦ふ事二時ばかり、更に勝負も見えざる處に、真君大神通の天將なれば、一たび身を搖すと見えしが、其長高き事萬丈餘り、緑の面くれなるの髪上下の牙長く生違ひ、三尖利刃鋒を擧て只一打に打たんとす。悟空また神通をつかひ、真君とおなじさまの萬丈の貌と變じ、鐵棒をまじへまた戦ふ事一時餘り、時に真君陣中より數多の鷹を放ち犬を追ひて、むれ猿を追立るに、猴ども大きに驚き懼れ四方へばつと逃散たり。悟空是を見て心愕るき、急に法象を收め本相をあらはし、水簾洞へ逃入らんとす。四大天王かねて四方をかこみたれば、是にさへられて洞中へ入事あたはず。如意棒を變じて綉花針となし耳の中へ納め、身を變じて雀となり木の梢に飛上る。真君是を見て其身を鷹と變じ、同じく飛んで撲んとす。悟空又大鳥となりて天に上れば、真君もともに大鳥となつて是を追ふ。悟空水に入て魚となれば、真君忽ち魚鷹となり、悟空蛇となれば真君鶴となつてこれを尋ぬ。悟空今は詮方なく一座の土地廟と身を化たり。真君見て此ほこら前の戸扉は渠が口なるべし。此所を開かんとせば我手先を噛傷るべし。上の方に二ツの窓あるは必眼ならん。

一打に打て潰すべしと拳を上げてうたんとす。悟空此時大きに驚き、眼をつぶされてはかなふまじと、急に身をのがれて空中に飛上り、跡かたもなく失たりけり。

初編卷之三

前章之下

扱も孫悟空は顯聖真君が大神通に責討れ、空中に飛で行方を隠したり。此時真君李天王が在す所に來り、悟空が在所を問給ふ。李天王頓て照妖鏡を擧て四方を照し見大きに笑ひ、此猴圍を出て真君の住給ふ灌江口へ逃れ行たり。真君是を聞て忽ち中天へ身を躍らせ、灌江口へ急ぎ給ふ。其時悟空はおのが身を真君に變じ、廟中に座してありけるが、真君の回給ふを見て如意棒を奪て跑出たり。真君はのがすまじと追討給ひ、俱に華果山へ立ち歸り追つかへしつ戦うたり。此時天上には玉帝みづから軍の形勢を見給はんとて、觀音菩薩太上老君を伴ひ南天門に出御あり。遙に下界を見おろし給へば、李天王哪叱太子は照妖鏡を擧て空中に立給へば、もろくの天將葉果山の四方を十重二十重にとり圍み、真君と悟空は真中にありて相戦ひ、いつ果べきとも見えざりけり。觀音菩薩是を見て、携へ給ふ水瓶を、悟空が頭に投的んとし給ふ時に、太上老君おしとめ給ひ、水瓶原來磁器なれば、渠が鐵棒に打當たらんには、忽ち微塵に碎くべし。我一箇の圈子を持てり。是を金鋼琢ともまた金鋼套とも名づけて不思議なる寶貝なり。これをもつて此猴を打べしとて、下界に向て抛下し給へば、あやまたず悟空

が頭の正中に撲的と中れば、さしもの悟空足をもためず真うつむけに倒れたり。其時真君の細犬飛來りて腿を啣へて引たふせば、四大尉二將軍真君と共にをりかさなつて、遂に悟空を高手小手にいましめ琵琶骨を穿、ふたゝび變化することを得ざらしめ、師をまとめ上天へと歸陣し給ふ。

八卦爐中逃大聖

五行山下定心猿

さるほどに玉帝君は孫悟空が罪きはまる上は、よろしく斬罪に行なふべしと、大刀鬼王に命じて斬らせ給ふに、只刃の缺損するのみにて、すこしも悟空が身に傷つくことなし。是に依て太上老君の御計ひとして、悟空をとらへて乾坎艮震巽離坤兌の八卦爐中におし入れ、數多の道人に命じて是を焼せらる。悟空則ち巽宮に潜り入りしが、元來巽は風なり火なしといへども大風烟を吹かけ、眼を開く事あたはず。兩手をもつて眼を抑へ、息をつめて潜みわたり。既に四十九日を過ぎて、もろくの道人相集り、爐をひらいて丹を取出さんとす。其時悟空身を躍らせて爐中を走り出、耳の中より如意棒を掣出し、あたるを幸に難立れば、亦是が爲に天上混亂する事大かたならず。爰において祐聖真君自ら三十六員の雷將を引率し、靈霄殿の前に戦かふこと半日計り、悟空すこしもひるむけしきなく、身を變じて三頭六臂となし、如意棒を三條に變じ勇を奮うて戦へば、あまたの天將此勢ひにあたりがたく戦ひあぐみて見えにけり。此時西方の釋迦牟尼如來、迦葉阿難の二尊者を引つれ靈霄殿にきたり給ひ、

天將を呼て戦ひを止させ給へば、悟空もまた法像を收め本相を現し、如來の前に進みより、聲を勵し罵つて曰く、爾何所の者なれば爰に來つて我戦ひをさまたぐるや。如來是を聞て笑ひ給ひ、我は西方極樂世界釋迦牟尼尊者南無阿彌陀佛なり。爾が天宮を鬧すを静めんため此所に來つたり。抑爾は何なる道を歟修し得たるや。悟空が曰く、我は天地生成の老猿華果山水簾洞の主なり。不老長生の法を學び、雲に乗風に御し、一瞬に十萬八千里を往く。如來の曰く、爾我掌の中にのぼりてよく此中を跳り出んや。悟空大きに笑ひ、如來いかなればかく黙子なるや、我通力八十萬餘里を飛行す。然るをいはんや爾が掌の中においてをやと、云も終らず如來の掌の上に躍り上り、白雲を起して是に打乗り、八九萬里も飛行せしが、その所に赤き大なる柱の五根までならび立たり。悟空此柱の許に立て一根本を抜て筆と變じ、正中の柱に齊天大聖到、此一遊すと書記し、又雲を飛で如來の御手に立かへり、我已に入九萬の遠き國に至り、五根の柱に記號を留め回たり。如來其時大きに罵て曰く、爾野猿の徒何事をか修し得たるや。先より我掌の内にのみ往來して、敢て躍り出る事あたはず。爾が五根の柱と見しは我指なり。疑はしくば此指を見よとの給へば、あやしみさしうつむきて是を見れば、如來の右の御手の中指に、齊天大聖到此一遊すと我筆跡にて書付たり。此に至て悟空大きにおどろき、急ぎ掌の中を飛下らんとせし時、如來忽手を翻して手中に提げ、西天門より出給ひ、五指を化して五行山となし、悟空を山の下に押入れ、唵嘛呢叭咪吽の六字を金書したる札を山の頂にはり付け給ひ、土

地神祇におほせて悟空を守護せしめ、餓時は鐵丸をあたへ、渴する時は銅汁を吞しめ、渠が災ひ充て人の救ひ出すを待しめ給ふ。

我佛造經傳極樂  
觀音奉旨上長安

光陰流るゝがごとく、日月梭を擲るより猶はやく、既に五百餘年を経たり。ある時如來西天の雷音寺に在して、法輪經の三藏を南瞻部州に傳へんとて、觀音菩薩を召して、錦欄の袈裟、九環の錫杖、并に三つの緊箍兒をあたへて、東土に到て三藏の經を取るべき人を需めしめ給ふ。觀音菩薩謹で領承し、其弟子惠岸をめしつれ、東をさして立出給ふ。程なく流沙河といふ大河の岸に至り給ひ、其河幅の廣大なるをながめておはしけるに、忽此河水山のごとく卷上り、そのかたちおそろし氣なる妖魔の手に、寶杖を提波を蹴立て岸に上り、菩薩に向て飛かれば、惠岸面前に立ふさがり、何者なるぞ不禮なりと罵れば、かの妖魔答ていふ、左いふ汝はいかなるものぞ。惠岸の曰く、我は托塔天王の二太子木叉惠岸、是に在すは則ち我師父南海觀音菩薩なり。妖魔是を聞て大きに驚き、寶杖を投して菩薩の前に蹲づき、謹で申けるは、我は原天上靈霄殿に在て捲簾の大將なりしが、玻璃の盞を打碎きし罰によつて、鞭打るゝ事八百、終に下界へ逐下され此河中に身を沈め、常に食乏しく飢にくるしみ、たまたま往來の人あれば是を捉て食となす。今も菩薩の來迎をしらす、凡胎の僧なりとおもひ、とら

へて喫はんと思ひしこそ、罪ふかくもおろかなれ。唯望らくは大慈大悲の菩薩あはれみを垂れ給ひ、我此くるしみを救ひ給はば、生々世々の大恩わする、期あるべからずと、泪瀑布をなして告まゐらすれば、菩薩も憐れとおぼしめし、備天上にて罪を犯し下界に來つて殺生をかさねば、さらに滅罪の期あるべからず。我今東土に行て經をとる人を需めんとす。備早く善果に歸してかの經をとる人の弟子と成、西天に來て如來を拜せば、其時罪を免されてふた、び本職に歸るべしと宣へば、妖いよ、涙を流し、さるにても我惡を積し事のあさましさよ。我此河水に居を占てよりこのかた、經をとらんとて爰に來る人九人あり。我ことごとく捉へてこれを吃へり。扱も其九ツの骸願いかにすれども水中に沈む事なく、只羽毛のごとく浮みたよふ。かくの如き我ふるまひつたへ聞ば、只恐らくは此後經をとる人此處へ來るべからず。菩薩打笑うての給はく、備かならず是を憂る事なかれ。かならず經を取る人有て此所に來るべし。且水中に沈ざる骸願は、おのづから用る時あるべき間、備が首にかけて經を取る人を待べしとて、則ち法名を沙悟淨と賜り、雲に登て東へ飛行給はば、妖魔再拜して恩を謝し、水中に入て時の至るを待むたり。爰に又ひとつの高山あり福陵山と號す。山中に洞あり雲棧洞と名付く。此洞に住妖魔あり、面は豕のごとく、手に一柄の釘鉞を執て狂風を發し土砂を飛し、忽ち菩薩の御前に驅來る。惠岸是を見て鐵棍を打ふりさへぎり留て相戰ふ。彼妖魔戰かひながら聲を上げて、そも備は何くの僧ぞや。惠岸が曰く我は南海觀音の弟子惠岸なり。只今師父の御供なして東方に赴く、

はやく路をひらき通し奉るべし。妖魔是を聞て持たる釘鉞をからりと投すて、再拜して菩薩無禮の罪を恕し給へ。我はもと天河の管天蓬元帥にてさむらひしが、酒に酔て嫦娥に戯れ、玉帝の怒りを蒙り此下界へ逐放ち給ひしに、我其時誤て路を踏錯へ、計らずも猪の胎中に入て今かくのごとき形となれり。扱も身に贍はす業もなき儘に、常に人を取り吃ひて日を過し候。哀れ此惡行をいかにして止候はんや。示し教給へかといふ。菩薩聞て、宜く備かくのごとく惡心を改ずんば、日々に其罪深くして更に正果を得るの期あるべからず。此後東土より經を取らんが爲に、西天に至る人此所に來るべし。備其人の弟子となり、俱に西天に至りて佛を拜せば、災悉消滅し樂界の生を得べしとて、是にも法號を賜ひて猪悟能と名付給ふ。妖魔喜事かぎりなく、禮拜して洞中に立歸れば、菩薩また東に向ていそぎ給ふ。爰に又一條の龍あり。空中に在て菩薩を見て叫ぶ事甚し。菩薩見給ひ、備いづくの龍なれば、爰に在て罪を受けるやと問給ふ。かの龍答て曰く、我は西海龍王の子にて候が、殿上の明珠を焼たる罪によつて、かくのごとく虚空に吊上られ、日ごとに鞭打ること三百、このころに誅せられんとす。希くは菩薩我命を助け給へ。菩薩是を聞給ひ、則ち渠がいましめを解き饒し、備白馬と變じて經を取人にしたがひ、西方に至りて功を立べしと云含め、澗水の中に放ちやり給ふ。扱其所をすぎて東の方を見給へば、遙に山の上に金色の光り輝きたり。其時惠岸菩薩に向ひて申けるは、あの光り立候山こそ、蟠桃會をかき亂したる齊天大聖を、如來の封じ置給ふ五行山なり。金字の壓帖則ち

かしこにあり、師父立ちよりて看給ふべし。菩薩則ち其言に隨ひ、かの山上に至りて帖子を見給ひ、一絶の詩を賦し給ふ。

堪<sub>レ</sub>歎<sub>二</sub>妖<sub>レ</sub>猴<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>公

當年<sub>レ</sub>狂<sub>レ</sub>妄<sub>レ</sub>還<sub>二</sub>英<sub>レ</sub>雄<sub>一</sub>

自<sub>レ</sub>遭<sub>二</sub>我<sub>レ</sub>佛<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>困

何<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>舒<sub>レ</sub>伸<sub>レ</sub>再<sub>レ</sub>顯<sub>レ</sub>功

かく詠じて山を下り悟空が在所を尋ね給へば、土地山神都て出迎、悟空が居所に導き奉る。悟空原來石の匣の中に壓へられ、手と口とは働ども身は一分も動く事あたはず。菩薩立よりて爾我を見知りたるやと問給へば、悟空面を上げ我よく爾を見知りたり。南海普陀落迦山の大悲大悲の南無觀世音菩薩にてはあらざるや。向に如來我を此山に壓へ置き、已に五百餘年を経れども、敢て一人も尋ね問ふ者なし。我今前非を悔み此罪業を免んと乞ふ。願くは大悲悲を垂れて我苦患を救ひ給へ。菩薩是を聞て諭して宜く、我今如來の仰を蒙り、東土大唐國に至り、經を取人を得尋ね、此人を得ば爾其が弟子と成りて西天に至りて我佛門を修行すべし。かならず罪業免れ極樂の果を得べし。悟空の曰く、我何事に於ても菩薩の仰に隨がひ奉らん。はや／＼經を取る人をたづねて此所に至しめ給へと、互にかたき契約をなし、菩薩は東の方へ飛去り給ひしが、大唐國に至給ひ、師弟もろとも疥癩の遊僧と形を變じ、長安城に入て西天に赴くべき人を尋ね給ひける。

陳<sub>レ</sub>光<sub>レ</sub>蕊<sub>レ</sub>赴<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>逢<sub>レ</sub>災

江<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>僧<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>讐<sub>レ</sub>報<sub>レ</sub>本

抑長安城といふは、周秦漢よりこのかた歴代帝王の都にして、眞に龍盤虎踞の上邦なり。唐の太宗皇帝貞觀十三年丞相魏徵が勸により、天下に詔りして儒流明敏の者は、軍民に拘らず、長安城に來つて應試せしめ給ふ。爰に海州の人に陳夢字は光蕊といふものあり。學は五車に富文は七步に成る。長安に來りて應試し、選に當りて狀元を賜ひ、江州の國主に叙せられ、丞相殷開山の女温嬌といへるものを娶り、夫妻共に故郷にかへり、其母張氏を携さへて江州に赴んとす。其途に萬花店といふ所に至つて、母張氏假染の病に染み立事あたはず。光蕊母に食を勸めんとて、鯉魚一口を買て斬て煮んとす。然るに此鯉魚より金光を放ち一身金色にして、よのつねの鯉魚にあらず。光蕊あやしみて、江湖の中に免し放たしむ。扱も數日母の病をいたはれども、はか／＼しく快氣のあらざれば、かくて數日を経りなば、又公の首尾もよろしからじとて、其の處に一軒の房屋を賃て母を留置、宿の主劉小二といへる者によろづあつらへ頼み置、其身は妻の温嬌を引具して江州へといそぎける。其道中に洪江といふ大川あり。渡りの船をもとめて夫婦とも手を携て船上に上るが、稍水劉洪李彪の二人温嬌の美色を見て忽ち悪心を發し、川中へ船を出し、終に光蕊を打殺し屍を水中に沈め、歎叫ぶ温嬌を引つれて心の儘に妻と稱し、劉洪自から陳光蕊と名乗り、江州に赴き國主の任に着きにけり。温嬌は深き恨みを心に藏し、折を見合夫の敵を討んものと假に劉洪にしたがひぬ。さるほどに洪江の川中には

巡海夜叉光蕊が屍をとりて、龍宮に歸り、龍王にかくと申上ぐれば、龍王其屍をよく見、是は頃日我を救ひ助けたる恩人なり。何故に川中に殺されたるや。此命を救ひて前日の恩を報せばやとて、頓て光蕊が魂魄を求めて、彌は何所の人又何故に爰に來りて殺されたるやと問ぬれば、光蕊が魂答て曰く、小生は陳光蕊と申して海州の者なるが、及第に選まれ江州に赴く處、此川のわたしもり劉洪我妻の色にまどひ、我を打殺して妻を奪ひて逃げ去りたり。龍王あはれみを垂れて我を救ひ給へといふ。龍王聞て先生心を安じ給へ。足下前日放し給ひし金色の鯉は我なり。此恩を以てかならず先生を救ひ參らすべしとて、かの屍の口中に定顏珠を含ませて龍宮に蓄へ置、時を待て魂をかへし其仇を報せしめんとす。光蕊恩を謝してしばらく龍宮城に止まりける。

初編卷之四

前章之下

陳光蕊が妻温嬌はおもひ設けぬ賊手に陥り、くるしき月日を過しけるが、此時既に光蕊が胤を身に胎しぬれば、此子出生の後海河へも身を投て、死をいさぎよくなさんものと、こゝろを究め劉洪に身をまかせ、おもはず數月を送りける。一日劉洪外に出し留主の間に忽ち産の氣つきて悶絶し、玉のごとき男子を生めり。此時夢ともなく現ともなく耳のほとりに人聲ありて、吾は是南極星君なり、觀音菩薩の仰を受け、此兒を彌にあたふるなり。後かならず名を發すべし。且又彌が夫光蕊は龍王の救ひを得て今龍宮に止れり。夫婦相會して仇を報ふ時あるべしと、云かと思へば驚きて正氣つきたり。温嬌奇異のおもひをなしようこぶことかぎりなし。しかるに賊夫劉洪かへり來り、此子を見て早く殺んとす。温嬌愕きさまなくにすかしなだめ、其命を助けんとかきくどけども、賊更に是をゆるさず。今は詮方なくさらば此子を江湖の中にしづめ、魚の腹に葬るべしと自から小兒を抱へ江の邊りへ出けるが、不思議なる哉一片の板岸の側へながれよりたり。温嬌是を見て觀音菩薩を心に念じ、其板の上に子をかきのせ、帯を以て縛めつけ扱小指を咬て血をもつて、父母の姓名事の始終を悉くかき記し、小



兒の胸にかけ再びめぐり逢ふ時の證にとて、兒の左の足の小指を咬で齒形を入れ、性命を天に任せ江の中へ押流し、涙をおさへて歸りけるは哀なりしありさまなり。此兒水に順ひ流れに引れ遂に金山寺の麓に停れり。金山寺の長老法明和尚ひろひ揚て名を江流と號人をたのみて養育せさせ給ひけるが、誠に年月の過る事東流の水よりも尙はやく、江流已に十八歳になりしほどに、則ち剃髪させて法名を玄奘と名づけ、摩頂受戒し道心堅固に修行しける。一時長老母の血書を取り出して玄奘にあたへ給ふに、玄奘見終て聲を放て大きに哭き、いかにもして母に一たびめぐり合、父の仇を報せんとして長老にいとまを告げ、かの血書を持って化縁和尚となりて江州に赴きける。此時温嬌は門前に出て四方の氣色を詠めぬけるが、親子の縁の盡ざるしるしにや、玄奘もまた門外に來りて抄化を唱ふ。温嬌則ちよび入れて齋飯をあたへ、つらく此僧の舉止言談を見るに亡夫光蕊によくも似たり。あやしみてその姓名を問へば、玄奘則ち父母の姓氏、身の不幸に逢し事を審かに物語り、かの血書を取り出して見せければ、温嬌おどろき悦ぶ事いはんかたなく、扱は備こそ眞の吾子なれとて、親兒一處に相抱て啼泣す。温嬌申けるは、賊夫劉洪此事を漏聞かば、かならず備を殺すべし。はやく金山寺に歸るべしとて玄奘を送りかへし、其後佛參にことよせ度々金山寺にまうで、長老玄奘に對面して事の次第をくはしく物語り、遂に玄奘を長安の都に登し、丞相殷開山に依て仔細に是を訴れば、太宗皇帝詔りして早く此賊を誅すべしと下知し給へば、殷開山自から御林の軍六萬餘騎を引率し江州に進發し、賊

の術をひしくと取かこみ、劉洪李彪の兩人を生捕り、むちうつ事各一百、李彪が首斬て大路に梟させ、劉洪を引立洪江の渡口に到り、前年陳光蕊を殺したる處において活ながら劉洪が肝を斬出し、水中に沈めて光蕊が靈を祭る。此とき江中には巡海夜叉此を見て、忙ぎ龍宮へ走來りかくと報すれば、龍王やがて光蕊を呼出し、其魂魄を屍の内に納め、夜叉に命じて江口へ送り歸らしむ。玄奘温嬌殷開山の人々是を見て喜ぶ事限りなく、互に手をとってはじめ終りを物語り、唯夢の心地して是非を辨ゆるにいとまなし。光蕊は即日萬花店の劉小二が家に來り、母の張氏を伴ひ返り、俱に長安に入て前後の次第逐一に奏聞しければ、太宗皇帝大きに御感ありて、光蕊に文淵殿大學士の職を授け、玄奘は洪福寺に在て佛道を修行せしめ給ふ。

老龍王拙計犯三天條

魏丞相遺書託冥吏

長安の城下に兩人の隠士あり、一人は漁師にて名を張稍と言、一人は樵夫にて名を李定と呼り。一日兩人長安の酒館にて醉を盡し、涇河の岸に至りて相別んとす。此時漁翁の張稍樵夫の李定向ひて申けるは、古人いへることあり。明日街頭少故人。備山に入らば虎の害を用心すべし。もし備不慮の事あらば再び吾と俱に酒館に來て醉を盡し、相たのしむ期あるべからず。李定聞て怒て曰く、備何ぞや我を咀ふことかくのごとくなるや。我もし山に入て虎に害せられれば、備も又浪に遇て水に溺るべし。張

稍笑うて云、我は一生水におぼるゝの患なし。李定の曰、天に不測の風雲あり人に暫時の禍福あり、  
 備何をもつて水に溺るゝ患なしと決定したるや。張稍の曰く、長安城の西門に一人の賣卜先生あり、  
 我日ごとに此先生へ鯉魚一尾を送りて占を頼みて、其ことばにしたがひ網を下し釣を垂るに、百たび  
 下して百たび得ものあり。兼ては其日の風雨晴曇一ツとしてあたらざることなし。是故に賣占先生あら  
 ん限りは、我敢て水難の災ひなし。李定これを聞て大に歎伏し、復明日出會べしと約をなし双方へ別  
 れにけり。この時涇河巡水夜叉岸のほとりにありて此物語を聞、龍宮城に入て一告げ訴ふ。龍王  
 これを聞て大きに憤り、若しかくのごとくなる時は、水中にある處の吾眷屬共、ことごとく此賣卜が爲  
 に捉盡さるべし。我自から長安城に至り、賣卜者を打殺すべしとて劍を提躍り出んとす。あまたの魚  
 臣等推とめて申けるは、大王今怒りを起して彼所へ御出あらば、かならず洪水ありて長安の人民を  
 損じ、上天の咎めを蒙り給ふべし。只々方便をもつてかの賣卜を殺し給はんこそ然るべからんと諫め  
 ければ、龍王も尤と是にしたがひ、身を變じて一人の書生となり、只一人長安城の西門に至り、こ  
 こかしこ尋るに果して一箇の卜舖有先生姓は袁名は守誠と申て、世に名高き賢士なり。龍王舖に立よ  
 り明日の天氣いかんと問うらなふ。先生則ち袖占一課して斷じて曰く、

雲迷山頂一霧罩林梢一  
 若占雨澤一准在明朝一

龍王の曰く、明日何時に雨ふり、水の増る事何ほどなりや。先生の曰く、辰の時に雲起り巳の時に雷鳴  
 り、午の時に雨ふり未の時に雨止み、水を得ること三尺三寸零四十八點なるべし。龍王の曰く、爾其  
 ことばに違はずんば我金五十兩を以て爾に謝すべし。若しも時刻相違寸もあらば、この卜舖を粉  
 のごとく打破り、爾が人をまどはす罪を糺すべし。先生笑うて、我言一毫も違ひなば爾が心に任すべ  
 しと、互にかたく約諾して、別れて龍王は龍宮城へ歸りけり。時に上天より玉帝の勅書ありて龍王に  
 命じ給ふ。其書に曰く、

敕命八河總一驅雷掣電行  
 明朝施二雨澤一普濟二長安城一

かくのごとく明日長安城へ雨を澍す詔りにて、刻限の前後かの袁守誠が判斷と、一毫も差ひあらざ  
 れば、龍王大きに驚き、塵世の中かゝる靈人のありけるよ、所詮雨を行ふ時刻を差へ、水の増ことを  
 相違せしめ、夫を罪にして此賣卜を失はずんば、水族の永き患ならんと、風伯、雷公、雲童、電母を召  
 あつめ、事の子細を委しく命じ、次の日また書生と身を變じ、長安城に至り雨の刻限を待居たり。  
 かねてたくみこしらへし事なれば、玉帝の命に違ひ巳の時に雲を布き、午の時に雷鳴し未の時に雨ふ  
 り申の時に雨を止め、水を得る事三尺零四十八點、袁守誠が占と一時三寸八點を違へたり。龍王かの先  
 生が卜舖に來り、ものをもいはず招牌を打碎き、門の扉を踏亂し大きに罵て曰く、爾妖人今日の雨

時刻尺寸ごとく、備が占と相違せり。備が死罪を饒すまじ。袁守誠呵々と打笑ひ、我原來死罪なし。備は却て死罪あり。備は是涇河龍王の書生に變じたるなり。今玉帝の勅に違ひ雨を降すの時刻を改む。玉帝、備が罪の輕からざるを以て、明日午の時唐王の臣下魏徵に命じて備を斬しむ。然るに返て吾を罵り辱むるは何事ぞや。龍王是を聞て大きに驚き、先生あはれみを垂て我を救ひ給へ。袁守誠の曰く、備命を助からんと欲せば、太宗皇帝にまみえて救をもとむべし。龍王是にしたがひ泪をおさへて退きける。

前章之下

其夜太宗皇帝の夢に、龍王來りかなしみて申けるは、吾上天の主玉帝の勅を背き、其罪に依て明日午の時陛下の臣魏徵が爲に斬候べし。あはれ慈悲の御心を垂給ひ吾命をすくひ給へと、くれぐれと奏し奉れば、太宗此事を諾し玉ふとおもひて夢は覺たり。太宗不思議の事におぼしめし、次の日魏徵が朝に出しをよめて圍碁の時刻を移し給ふ時、午の三刻に當りて魏徵忽ち額を低れて睡りたり。少時ありて一人の官人、龍の頭を提御前に跪て奏しけるは、只今千步廊の南十字街のほとりにて、此龍の首雲中より地に落たり。急ぎ献覽に備へ奉ると奏聞す。此時魏徵目覺再拜して奏しけるは、上帝昨夜臣に命じて、この罪を犯せし龍を斬しめ給ふ。然れども陛下を圍んで臣を去らしめ給はざるをもつて、今夢の中に神を飛し雲中にして此龍を某が斬殺せり。太宗聞て驚き給ふこと限なし。

其夜太宗の御夢に、龍王手に我首を提出來、太宗を罵て曰く、吾昨夜備と約して吾命を救はんことを諾し、今日却て魏徵をして吾を殺さしむ。今汝を引て閻王の廳下に至り、理非善惡を糺べしと、御手を執て引立んとする處に、一人の美人雲中より下り、楊柳の枝をもつて龍王をはらひ除、北の方へ去り給ふ。是則ち土地廟に滯留まします觀音大慈悲菩薩なり。太宗おどろき夢覺給へと、是より玉體異例にまし、御惱日々に重らせ給ふ。文武の百官朝に集り、今ははや崩御の際と見えさせ給ふに、魏徵御前に進より奏しけるは、臣一封の書を陛下に捧奉らん。陰司に至り給は、鄆都判官崔珏といふ者にこの書を與へ給へ。今陰司にありて生死の簿子を掌とる役人なり。渠かならず其書を見て陛下を救ひ奉るべしとて、書を封じて奉れば、太宗これを取て御袖の内に收め給ひ、卒然として崩じ給ふ。其時太子をはじめ奉り、文武の百官歎き悲しむ、暫く白虎殿に於て梓宮を停め奉る。

遊地府太宗還魂 進瓜果劉全續配

太宗皇帝の魂魄都を出て、そことも知らぬ荒たる野邊を、只獨りあゆみかねさせ給ふ折から、大唐皇帝暫く待せ給へやと聲をかけて、かの鄆都判官崔珏御前ちかくす、みより、謹で奏しけるは、涇河龍王の事に依て今日陛下此所へ來り給と承り、御迎の爲參り候と演ければ、太宗大さによろこび給ひ、かの魏徵が書牒をとり出して與へ給へば、崔珏ひらき見て再び奏しけるは、陛下御心を安じ給へ。某

よきに計ひやがて陽間へ回へし奉らんとて、御手を捉てすゝみ行に、閻王の御迎とし、青衣の童子二人、幡幡寶蓋を取て道を守護す。ほどなく一ツの城門に至り給ふに、一面の牌を掛て幽冥地府鬼門關と七字の金書あり。此時閻王陛下を下りて出迎へ、遂に森羅殿に請じ奉。閻王先問うて曰く、陛下前日龍王の命を救んと約し、却て渠を殺し給ふは何故にて候ぞや。太宗答ての給ふは、吾は龍王の命を救はんと計りしかども、誰か知らん魏徵神變ありて夢に化して渠を斬たり。これ朕が力の及ざる所なり。閻王の曰く、かの龍王末生已前既に魏徵が手に殺さるべしと、我簿子には書しるしたり。然れども渠爰に来て糺しをもとむるにより、はるく陛下を迎奉る。誤て我々をうらみ給ふなとて、崔珏をめて太宗の御壽命をたづねけるに、崔珏忙ぎ簿子を出して查べ見るに、南瞻部州大唐太宗皇帝注生定貞觀一十三年と記したり。崔珏大に驚き、急に筆を取て一の字に二畫を副へ、三十三年と改め閻王に奉れば、閻王是を見て太宗皇帝御壽命、今より後猶二十年の寶算あり。すみやかに陽間へ還し奉るべし。但陛下の御妹、壽永からざるに似たり。よくくつゝし給ふべしとて、朱太尉と崔判官兩人に命じて太宗を送らしむ。太宗閻王に向て再拜し、朕陽間に還りて後瓜菓を送りて此恩を謝し奉るべしと約束し、遂に森羅殿を出給へば、朱太尉は引魂の幡をとり、崔判官は後に供奉し、轉輪藏より出て地獄のありさまを一々に看せ奉る。抑十八層の地獄といふは、或は火の坑に落し或は舌を抜き皮を剝、或は確に入れて是を搗、或は腸を抽て水の中に身を苦しめ、或は油にて煎、あやめもしらぬ

黒暗地獄、其の外刀山、血池、阿鼻獄、秤杆獄などさま／＼の刑場ありて、犯せる罪にしたがひ罪人を呵責せる鬼どもの、間なく急がしげなるこそ、世の人の悪行を積ばかりにこそと、そゝろに涙にくれ玉ふ。爰を過ぎて金銀の橋を渡り玉へば、其傍に奈何橋といへる罪人の渡る橋有り。寒風吹て人の肌を裂血の浪湧かへりて、天も共に紅をなし泣叫こゑ四方に聞え、氣も魂も身にそはず。太宗此所をも過行て枉死城にさしか、れば、其途に數萬人の餓鬼共むらがり集り、我命を還せ我命を還せと叫び太宗を通し奉らず。此時崔判官奏しけるは、陛下此道を快く通らんとおもひ玉は、此所に十三の庫あり内に金銀を積貯たり。是は河南開封府の住人相良と云者の金銀なり。陛下これを借用して餓鬼どもに施し玉へ。太宗大きによろこび、かの庫より金銀をとり出させ、餓鬼どもに分ちあたへ玉へば、皆悦びて道をひらき太宗を通し奉る。行先六道輪回辻に至り給へば、或は東西或は南北おのがさま／＼迷ひ行も、陽間善惡の業因によれりといとあはれに見玉ひて、遂に貴道門より地府の境を出玉へば、朱太尉一疋の馬を牽來て太宗をのせ奉り、陛下陽間に歸玉は、先の餓鬼共が爲に水陸會をなして、冤恨をすくひ給へと云終て、飛がごとくに渭水の邊りに至りけるが、水底より金色の鯉魚二ツうかみあらはれ、遠近をあそびたはむるゝを、太宗馬を止めて御覽あるに、朱太尉大きに聲を勵し、爾はやく陽間に還るべしといふかとおもへば、太宗の脚をとらへて渭水の底に撲的と突落したり。此時大唐の朝廷には、文武の百官太子后妃こと／＼くより逢ひ給ひ、諒闇の儀式などとり／＼執行ひ

給ふ折しも、棺の中より我を救へ〜と連りに叫給へば、衆の官々驚き異み、棺を開きて扶け起し奉れば、やう〜に眼をひらき給ひ、朕今馬に乗りて渭水の岸に立やすらひ、鯉魚の戯るゝを見たりしを、朱太尉が爲に水中に推落され、已におぼれ死せんとせりと語り給へば、衆臣皆曰く、臣等先より此にあり、陛下何の水に溺れ給ふ事是あらんとて、さま〜いたはり介抱し奉れば、魏徵則大醫院を召て、定魂安神の御薬を進め奉り、其夜は百官退出し、翌朝に至りて太宗皇帝遂に御心地常に復し、金鑾殿に諸臣をめされ、陰司の次第を具に御物語りあり、遂に非常の大赦を行はれ天下の罪人四百餘人を赦し、おの〜家々に還らしめ給へば、皆萬歳を唱へ御代永久を祝しける。

初編卷之五

前章之下

均州の住人に劉全といふ者あり。其妻李翠蓮といふ者、自から頭にかざせし金の釵を取て門前の僧に親しむを怒り、さま〜と罵り恥かしめければ、妻あさましとおもひて遂に縊て死たりける。劉全これを見て今更憂世の事のうとましく、共に死せばやとおもふ折から、太宗皇帝陰司にて閻王に瓜菓を送るべきよし、約束ありて還り給へば、命を捨てめいどに赴き、閻王に瓜菓を獻すべき者やあると、普く天下をもとめ給ふ。かの劉全幸ひのことにおもひ、長安に至り瓜菓を持て陰司に赴くべき旨奏聞しければ、太宗かぎりなく悦給ひ、やがて劉全が頭に一ツの瓜菓を頂かせ、毒薬をあたへて死せしめ給ふ。されば劉全が一點の魂魄、瓜菓をかしらに戴き、地府森羅殿に至り閻王に呈し奉れば、閻王大きによろこび、頓て劉全をめし出し、陰司へ來りし由來をくはしくたづね、妻の李翠蓮が魂を呼て劉全に對面させ、生死の簿子を閲するに俱に壽命いまだ盡す。鬼使に命じて渠二人が魂を陽間に還すべしと下知せられけるに、鬼使申て曰く、李翠蓮既に死して日久し、其の屍を失ひたり。何れの所へか魂を送り申べき。閻王の曰く、唐王太宗の妹李玉英が命を縮め、李翠蓮が魂を收むべし。鬼使か

しこまり兩人の魂を提り長安城に至り、先づ劉全が魂を其の屍におし入れ、夫より内院に入りて玉英皇主を尋るに、折しも皇主は庭前の花を御覽じ、快く徘徊し給ふを、鬼使走り寄りて推倒し、魂を引きすり出し翠蓮が魂を手ばやく入れかへ、陰司をさしてとび去りける。太宗皇帝はるかに此のありさまを見給ひ、玉英皇主こそ悶絶して死たるぞ、扶けよやくとして自から庭に下り給へば、皇后宮嬪はしり出てさま／＼に介抱あれば、皇主漸に蘇生給ひ、太宗を見て大きにおどろき、抑爾等何人なれば我を此の所にいざなひ來れるや、ゆるし給へと逃出れば、太宗も甚はだ驚き給ひ、手を取て引きとめ、爾夫何事を云ふや、我は爾が兄是なるは嫂なり、恐るゝ者にあらずと宣へども、皇主更に聞入れず。我れ元來兄もなく嫂もなし。均州の民李翠蓮といふ女、我夫の名は劉全とて太宗皇帝の仰せを蒙り、閻王に瓜菓を献じ陰司にて不測の對面をなし、夫婦もろとも陽間にかへり來りしに、道にて夫劉全を見失なひ、誤つて爰に來れり。かへさせ給へと歎く所へ、一箇の官人走り來り、閻王に瓜菓を献せし劉全、只今蘇生いたし朝門に來り候と奏聞す。太宗是を聞いていよ／＼おどろき給ひ、則ち劉全をめし入れ、玉英皇主に相合すれば、皇主劉全を見て我夫何處にかくれる給ひしやと走りよりて、さめ／＼と哭くほどに、劉全もまた大きにおどろき、其聲は妻の李翠蓮に似たれども、其人は夢にだに見ぬいとやんごとなき雲の上人、何といらへまゐらすべき、唯あきれにあきれ果て茫然として言葉なし。太宗此始終を御覽ありて、前に冥途にて閻王の吾妹が命こそ危かるべしと云ひしことは、今

の不測に的當れりとして、事の子細を語り聞せ、遂に皇主を劉全に賜りければ、夫婦もろとも悦ぶことかぎりなく、恩を謝して俱に故郷へ回りけり。

唐王選僧修三大會

觀音顯像化金蟬

爰に河南開封府といふ所に、水を賣て生業とする相良といふ者あり。妻の張氏と共に深く佛を尊み、命を繋ぐ食の外は一錢も家に留す、こと／＼僧に施し佛に供養し、さらに蓄るもの一箇もなし。時に長安城より胡敬徳といふ大臣、太宗皇帝の命を受け數百人の人歩に、數多の金銀を荷ひもたせ、相良があばら家の四方にうづ高く積かさね、勅使なりとひしめくにぞ、相良夫婦大きにおそれ、門外にまろび出で慄ひ戦き命を俟つ。胡敬徳相良に向ひ、主上太宗皇帝、爾に借らせ玉ふ所の金銀を、某に命じて只今かへし給ふなり。誰んで受收むべしと聞こえければ、相良再び仰天し、野人原來貧賤にしてむかしより一錢の貯なし。何ぞ大唐の天子へ金銀をかしたるべき、是は人たがへにて候べしと申けるに、敬徳の曰く、爾何ぞ現在すして天子へ多くの金銀をかしたるべき。爾平常僧に施し佛に供養せる財寶、陰司に於て十三庫に充々たり。主上先に冥途に至り玉ひ、其一庫の金銀をからせ給ひ、今其員數を合せて返し給ふ者なり。只よろしく是を受納むべしとありけれど、相良更に合點せず、萬歲爺たとへ陰司にて金銀を借玉ふとも慥なる證據これなし。吾命をめさるゝともいはれなき金銀を

得こそ受け申まじとて、一向したかふ氣色なし。是に依て急使をもつてこの趣きを太宗皇帝に奏聞すれば、太宗即ち渠が爲に寺院を建立し、僧を乞うて供養すべしと詔ありければ、敬德遂に其金銀をもつて一大寺を建立し、勅建相國寺と號し今も猶現然たり。扱ても太宗皇帝は閻王に瓜菓を送り、相良に金銀を返し、今は施餓鬼を修行して陰司の約束を終るべしとて、天下の名僧をまねきあつめ、其中より選み出し玉へる壇主には、西方金蟬長老の轉世玄奘禪師、則ち陳光蕊が子殷開山の外孫なり。此時貞觀十三年九月三日、化生寺に壇をひらき、一千二百人の僧をあつめ、施餓鬼の大會を執行ひ玉ふ。然るに觀音菩薩は玄奘法師が壇主なることを聞き玉ひ、如來より賜りし錦襪の袈裟九環の錫杖を、手づから持ちて木叉と俱に疥癩の僧に化し、長安の東華門に往て件の袈裟と錫杖を賣らんと呼ばり給ふ。太宗兩人の化僧を召して袈裟錫杖を看玉ふに、艶々と光りかややき、いづれも凡常の物にあらず。依て求めて玄奘に與へんとおぼしめし、其價を問ひ玉ふに、觀音答へて宣はく、袈裟の價五兩錫杖は二千兩なり。然れども陛下佛門を歸依し、高僧を崇敬し給ふことのありがたさに、價におよばず獻上し奉るべし。されどもかの壇主の僧玄奘法師、只小乘の法のみを知りて大乘の法をいまだ知らず。今天竺國大雷音寺我佛如來の許に三藏の眞經あり。是れ則ち大乘の佛法にして衆生成佛の眞法なり。陛下德行の僧に命じて、はや／＼かの三藏の眞經をもとめ玉へと宣は、太宗つらく是を聞きしめされ、儼已に大乘の法を知らば、多寶臺に上りて法を説かば可ならん。菩薩すこしも辭し

玉ふ色なく、木叉とともに臺上に昇り給ふと見えけるが、忽ち金色の光りを放ち手に淨瓶楊柳をささげ、觀音菩薩の本相を現し給へば、木叉も亦鐵棒を執て御跡にしたがひ奉り、白雲に乗りて西天へ還り給へば、太宗をはじめまゐらせ、文武の百官僧俗男女大地にひれふし上天に拜し、南無觀世音菩薩と唱ふる聲しばしは鳴りもしづまらず。太宗忙ぎ時の晝院吳道子を召され、菩薩の眞形を寫さしめ給ふ。則ち今の世に傳ふる吳道子が觀音の畫は是なりけり。扱ても太宗皇帝係る奇瑞を見給ふ上は、一時もはやく高德の僧に命じ、かの大乘の眞經を取來らしめ、普く善果を修行すべしと宣ひけるに、玄奘すゝみ出でて申けるは、貧僧不敏なりといへども、願くは生命を捨て西天に赴き、眞經をとり來るべしと奏聞すれば、太宗御感斜ならず、二人の從者と白馬一疋を賜り、吉日を選らんで首途をなさしめ給ふ。玄奘法師恩を謝して都を立出ぬれば、太宗皇帝もろ／＼の官人と共に關の外まで送り出でたまひ、自手御盃を賜り勅して宣ふは、酒は僧家の制禁なれども、此一杯は朕が餞別なり。快く飲みほして別れの情を盡すべし。且つ三藏の眞經を需め歸る備なれば、今より三藏と號くべしと仰ければ、玄奘法師君恩の深きに落涙止めがたく、太宗皇帝に辭謝し奉り、衆人にわかれを告げ西方さして出で行ける。

陷虎穴金星解厄  
雙奴嶺伯欽留僧

さる程に玄奘三蔵は、行方はかなき旅の空を、そことも知らず立ち出でて、白馬に跨がり従者二人を引具して、數月を経て唐國の西の界河州の地に着き給ふ。此所の福原寺といふ寺院に一夜を宿り、しのめの鶏が音に打ち驚きて、また馬にのりて出で給ふ。頃しも秋の長き夜なれば、鶏の鳴くこと尙ほはやく、霜を踏み月に詠じとある高山によちのぼり玉ふに、忽ち三蔵白馬に乗りながら、従者二人もろともに一ツの坑坎に陥りたり。こはいかにせんとあきれたるに、洞の奥に聲ありてはやく擒へて伴ひ來れと呼るほどに、其かたちさま／＼におそろしき妖邪五六十人出來り、三人をとらへて魔王の前へつれ行きたり。おそろ／＼頭を上て是を見るに、眼は電のごとくこゑは雷の如く、左右の牙するどく現れ、鉤の如き爪を鳴らして掴み喰んとす。時に外面より案内して熊山君特處士來れりと罵りて、二箇の怪物入來り、何事にや物語り終り、三蔵が二人の従者を引裂てこと／＼く喰ひ、東方既に明なるとする時、あまたの妖怪何所ともなくかきけして見えすなりぬ。三蔵一人地にひれふし、今や妖靈の爲に命を失ふかと、人心地もなくおはしけるに、忽然として一人の老叟天下り三蔵が手をとりにて坑の外へ引き連れ出で、扱て老翁申けるは、此所は雙嶼嶺と號けて、虎狼の集まる所なり。坑の中にありし魔王將軍とて山猫の精なり。外より來る特處士といふは野牛の精、熊山君は熊罷の精なり。爾が本性元明なるに依て喰ふことあたはず。吾は西天太白星なりと、云ふかとおもへば一陣の風につれ、白鶴に乗りて西の方へ飛行きたり。三蔵奇異のおもひをなし、天に向かひて禮拜し馬を牽

て、また山中を半日計りあゆみけるが、あらおそろし前面より二疋の大虎跑來たり、吼る聲雷の如く、後ろの方よりは數十丈の大蛇口をひらき、焰を吹て追來る。三蔵氣も魂も身に添す、今や命をとらるると見る處に、不思議や虎も大蛇もあわて慌きたるありさまにて、谷の蔭へ一參に逃げ入たり。三蔵大きに怪しみ、かゝる猛獸惡蛇の恐るゝ者は、いかなる妖怪にやと頭をかへして是れを見れば、一人の大漢子手に鋼叉を拿り、腰に弓箭をかけ山上よりあゆみ來る。三蔵再拜して活命の恩を謝し、貧僧は大唐皇帝の勅を受け、西天に往て佛を拜し眞經を求るものなりと申し給へば、かの漢士も禮を返し、某はこの山の獵師劉伯欽と申者なり。すべて此山の虎狼其外の獸類、我を見てはかならず恐れ逃走れり。長老心を安んじ、我家に來たりて勞れを休め玉へといふ所に、忽ち山間より土風吹き來り、一匹の斑爛虎跳り出でたり。伯欽是れを見て、長老爰にて某が此虎を刺殺すを見給へと、鋼叉をひらめかして前みよれば、かの大虎吼て爪を振うて飛びかゝるを、鋼叉を以つて向ひ戦かひ半時計り揉合しが、さしもの大虎力勞れ終に伯欽に刺殺さる。三蔵是れを見て大きに驚き、足下の勇壯眞に鬼神のごとしと稱歎し、伯欽に誘はれ渠が住家に入り給ふ。伯欽が老母大きに悦び、幸なるかな明日は伯欽が父の正當忌日に中れり。今宵は我々が爲に佛事をなして給ひ候へとて、齋飯の用意とり／＼いとなみければ、三蔵ねんごろに讀經し、翌朝また馬に乗て立出給へば、伯欽便ち三人の家僮を引つれ後に就て送り參らせ、行く事半日にして一箇の大山あり。其高き事天とひとしく、山路九折し嶮難いふ計りなし。



此山の半腹迄上りし時、伯欽三藏に向ひて申けるは、此山は兩界山と申て、東半邊は唐朝の地、西半山は韃靼の地なり。韃靼の地の虎狼は我を見て懼るゝ事なし。故に某此境を越しがたし。名残はつきす候得共、是にて御別れ申べしと立歸らんとしけるを、三藏馬より飛下り扯留て復何れの日か相逢べきとて、袂をとりて涙を流し別れかねてぞおはしける。

心猿 歸正

六賊 無踪

三藏と伯欽と既に別れんとし給ふ時、山の麓より我師父來り給へと呼るこゑ頻に聞えければ、三藏おどろき何者かかくのごとく我を呼ぶやと異み給ふに、伯欽申けるは、此山は原五行山と號せしに、我大唐王兩界山と改め給ふ。いにしへより傳へうけ給はる、漢の時天より此山を降し下に一箇の猴を壓へ、土神に仰せて饑時鐵丸を喰はせ、渴する時は銅汁を飲せ、今に至て此猿死せずと申傳候、必定かの猴が長老をまねく物にて候はん。試みに山を下りて見申さんとて、三藏を導き山下に至れば、果して石の匣の中に一箇の猴有、頭を出し手を延て三藏を招き、長老は大唐皇帝の勅を受け、西天に往て經をもとむる人ならずや。三藏の曰く、我乃ち是なり、偏是を問て何とかするや。猿の曰く、我は五百年前天宮を闢がせし齊天大聖と申す者なり。如來我罪あるを以て此の所に押入れ、敢て出る事をゆるし給はず。向に觀音菩薩爰に來り給ひ、經を求むる長老の弟子となり、西天まで守





護し功を立なば善果を得べしと教へ給ふ。師父憐みを垂て我をすくひ給はば、御供致し西天に赴くべし。三藏の曰く、彌伽かゝる善心ありといへども、我いかにして彌伽を救ひ出さんや。猴の曰く、この山の巔きに金字の壓帖あり。師父これを除き給はば我即ち爰を出で申べし。爰に於て三藏伯欽と俱に山に上りて見給ふに、果して大石の正面に封皮を貼り、唵嘛呢叭唵吽の六字を金書したり。三藏近く立よりて禮拜し除き去んとし給ふ時、忽ち香風一陣吹き來り、かの帖を虚空へ吹き上げ西の空へ飛び行きければ、三藏伯欽再び天を拜禮し、山を下りて舊の所に來たり給へば、向の猴大きに悦び、師父爰を去て遠く退き給へ。吾此所を出ば必ず驚き給ふべしといふ。三藏伯欽則ち身をかへして東の方へ走り下り給ふ時、忽ち天地も崩るゝ計り響き渡り、忽然としてかの猴三藏の馬前に來つて再拜して禮をなす。三藏問て曰く、彌伽は何と申すや。猴の曰く、我に法名あり孫悟空と申す。三藏の曰く、此名我々の宗派によく合へり。彌伽かたちを見るに小頭陀に似たり。我又別名を孫行者と名づくべしとて、遂に師弟の契りをむすび、伯欽と別れを告げ西と東へ出行ぬれば、孫行者行李を背ひ後に付き進みける。爰にまたとある溪間より、猛虎一疋跳り出で三藏に飛かゝるを、行者見て大きによろこび、師父恐れ給ふ事なかれとて、耳の中より如意棒を引出し、虎に向うて只一棒に打殺し、一根の毛を抜て尖刀となし、虎の皮を剥て身にまとひ、如意棒を绣花針となして耳の中へ收めたり。三藏此始終を見て大きに驚き、彌伽いかにしてかかくのごとき大勇神通ありや。行者笑うて曰く、天地の間にあ

らゆる者我に敵する事決してあたはず。就中只今つかひし鐵棒は、延す時は上天に達し縮める時は耳の内に收む。則ち龍宮より取來る處なり。三藏之を聞てたのもしくおもひ、馬をはやめて進み給ふ。さるにても限りさだめぬ旅なれば、或は野に臥し山に宿り、あかし暮して往く程に、冬の初になりければ、物淋しさもいやまして、枯野の中を心ぼそくも過行けるに、忽ち路の側より六人の剪徑あらはれ出で、手に鎗刀を拿て路を遮り、命をしくば行李及び金銀を我々が中へさし出すべし。否ならば斬て捨んと口々に罵りければ、三藏おそれ驚き己に馬より落とす。行者いそぎ扶け下し、師父かならずおそれ給ふな。我これを逐拂はんとて、ちか／＼と進みより、爾等何者なるぞ、名の有ば名乗べしと云ひけるに、銘々聲に應じて名乗りける。其一人は眼看喜、一人は耳聰怒、一人は鼻嗅愛、一人は舌嘗思、一人は意見慾、一人は身本愛とぞなのりける。行者笑うて爾等原來六箇の毛賊、我は爾等が主人公なり。貯へ置たる財寶あらば取出して我に與へよ。六人の賊大に怒り鎗をとり、刀を擧げ、孫行者を中にとりこめ、八方よりたゝみかけて砍かけぬれど、行者自若と立て毛の一根も砍くとあたはず。六人のもの目と目を見合せあきれ果てぞゐたりけり。

初編卷之六

前章之下

此時孫行者大きに笑ひ、爾等我一棒を受て試よとて、耳の中より鐵棒を引出せば、六人の賊等大きに驚き、我先にと逃走る。きたなし者どもと呼はつて、追詰めく如意棒を振て一人も残らず打殺せり。三藏是を見て眉をしわめ給ひ、剪徑の賊原惡行の者といへども、悉死刑に究者にはあるべからず、爾いかなぞ都て是を打殺すや。行者の曰く、吾今他を殺さずんば他却て我師父を殺すべし。三藏の曰く、我は出家なり。たとひ人に殺さるゝとも決して人を殺すことをなさず。爾今既に佛門に入てかくのごとく暴惡を改めずんば、善果を得ん事覺束なし。行者是を聞て心に怒り、我西天に至りても善果を得ることなくんば、師父に別れて是より歸り去るべしと、云より早く身を翻し虚空に揚り東の方へ飛失たり。三藏もせんかたなく頭を仰て東をながめ給へども、行者の形ちの見えざれば、行李をとりて馬に背せ、みづから韁繩を引て心ぼそくも出往給ふ。此時前面より一人の老女、手に綿衣と花帽とをさゝげ出來り、三藏を見て問て曰く、長老何國へか赴給ふや。三藏の曰く、貧僧は東土大唐皇帝の勅を受、西天に往て佛を拜し經を需んと欲する者なり。老女の曰く、西方如來の在大雷音寺と申す

は、爰を去る事十萬八千里、長老只一人いかでかかしこに行着給はん。三藏の曰く、前刻まで從弟一人召具し候得とも、此者生得頑にして唯今吾を捨て東方へ飛さりたり。老女の曰く、吾も幸ひ東方へ往者なれば、御弟子に逢ひて呼かへし參らすべし。又此綿衣直裰と欲金花帽とを長老に送りあたへ候はん。かの御弟子回り來る時、直裰を着せ花帽をいたかせ、我教ゆる咒を唱へ給へ。ふたゝび悪事をなす事あるまじきぞとて、三藏の耳に口をよせ、定心眞言の咒文を授け、長老固く心に秘して人にもらし給ふことなけれ。此咒文を緊箍咒と申候とて、忽金色の光りを身より放ち東の空へ飛去りぬ。三藏是を見て觀音菩薩の眞言をさづけ給ふと、いとありがたく香を焼て禮拜し、直裰帽子の二品を包袱の中へつゝみ、行者の回るを待居給ふ。此時行者は筋斗雲に打乗り、只一飛に東海龍王の許に至る。龍王行者が來るを見て禮をなして曰く、大聖いかにしてか久しき難を免れ給へる。行者の曰く、我觀音菩薩の勸めに依て唐僧に隨ひ、西方に至經をもとめんとす。此故を以ていましめを免がれたり。龍王のいはく、大聖邪を改め正に歸り、何事の悦びか是にしかん。しかし大聖西方に至らずして、却て東海に來るは何の故ぞや。行者の曰く、かの唐僧心せまく吾剪徑の賊を打殺したるを以て、嗚々と我を叱り候故、打捨て茲に來れり。吾再び水簾洞に入て快くたのしまんとす。龍王の曰く、大聖大きにあやまれり。今水簾洞に歸り候とも、やうく妖仙の魁にして遂に正果を得るの期あるべからず。はやく觀音のをしへにしたがひ、唐僧を具して西方にいたり、全き善果を得給へと

す、めければ、行者さしうつむきて半時計按じ居けるが、忽席を立て吾再び唐僧を供して西に赴くべしとて、龍王に別れ飛去りけるが、雲中にて觀音菩薩に出合たり。菩薩の宣く、爾我教誨にたがひ何方へ走りたるや。行者急に禮をなして曰く、唐僧我を嘖る事きびしき故、東海に行て氣をのぼし候なり。是よりまた御教のごとく、僧を供奉して西天に至り候はんとして觀音と相別れ、須臾の間に舊の所へ歸り、三藏の前に來り、師父路を急がすしていつまで茲に座し給ふや。三藏が曰く、我は唯茲にありて爾が歸るをまち居たり。抑爾何處へか往たるや。行者の曰く、我東海龍王の家に往て茶を飲て參りたり。三藏の曰く、爾偽はりを云て我をあざむく事なけれ。暫時の間に何ぞ東海に至り來らん。行者笑うて、師父吾雲に乗りて一飛に十萬八千里を行事を知り給はず、東海に至る事何の間どりかこれあらん。三藏の曰く、爾は是神通を得たり既に龍王のもとにて茶を吞來れり。吾は茲に在て甚だ餓たり。爾包袱をひらき中なる乾飯をとり出し吾にあたへよ。行者かしこまり包袱をおしひらくに、かの直裰と花帽あり。行者兩品を見て問て曰く、師父此衣帽は東土より持來り給へるか。三藏の曰く、夫こそ我幼稚時着せし帽子直裰なり。此帽子を戴時は習はずして經を讀、直裰を着すれば、聞ずして禮を知る。行者の曰く、師父此二品を我に賜らんや。三藏の曰く、是は吾身邊の寶貝なれ共、爾に附屬し與ふべし。行者先身に直裰を着し、頭に帽子を戴きたり。此時三藏老女の教たる緊箍咒を口にて唱へ給へば、行者忽地に倒れ、こはいかに何とて頭の痛むこと急なるぞや、疼やくと叫びつゝ、

かぶりし帽子を粉微塵に破裂れば、中に一條の金箍ありて、取ども不下掀ども不斷、金箍より根を生じて肉と俱につらなりたり。三藏も不思議におもひ、口を閉て咒を止め給へば、行者頭疼痛頓治し、恰も平常のごとし。茲に於て行者大きに怒り、耳の中より如意棒を引出し、三藏目がけ唯一打とふり上ぬれば、三藏又口中に咒を唱へ給へば、持たる鐵棒を大地に打捨、あな痛や〜師父恕せ給へ恕させ給へと聲を上げ頭をかへ涕泣す。三藏の曰く、爾今より心を改め我教を聞ばこれを赦さん。行者の曰く、我敢て師父の命を守り申べし。さるにても此法は何人より授り給ひしやと問ふ。三藏の曰く、向に一人の老婆來たりて我にをしへたり。行者是を聞て、此老女は必らず觀音菩薩ならん。吾を師父にそむかしめざる方便の計にてこれあらん。何事も此後は師父の教をそむき申すまじ。師父もまた憐みを垂て咒を念へ給ふ事なかれとて、三藏を馬にかきのせ後に着て西方へいそぎける。

蛇盤山諸神暗佑  
鷹愁淵意馬收糧

さるほどに三藏は、悟空と俱に數日をかさね西の方へ赴き給ふ。頃は臘月はじめつかた、朔風凜々いと寒きに、山間の淵の中より、忽數丈の龍あらはれ出、浪をひるがへして跳來る。行者是を見て忙三藏を馬より抱きおろし、高き崖の上に居らしめ、耳の中より如意棒を取出し、提て舊の所に來て見れば、師父の乗りし白馬、龍と俱に在所を知らず、只行李のみ其所にあり。行者大きにあやしみ立歸りて

三藏に申けるは、只今の龍を打殺さんとぞんじ候得ども、誰か計らん師父の馬を吃ひて淵の中に隠れたりと相見え、行李のみ残りありて候。某再びかしこに參り、此惡龍をたづね出し師の馬をとりかへし申べし。暫く此處に待せ給へと云捨て出行を、三藏袂を取てとめ給ひ、爾かしこに行たる跡へ、かの龍出來りて我を喫んもはかりがたし。爾決して此處を離るゝ事なかれと仰ける時に、忽ち虚空に聲あつて、長老おそれ給ふことなけれ。我輩茲にあつて急難を救ひまゐらせん。行者是を聞て、左云ものは何者ぞや。又虚空に聲して、我々は六丁六甲の神五方揭諦四值功曹護駕伽藍等觀音の命を受け、經を求むる人を守護せり。行者聞て、扱は是等の神將師父を守れり。今は心を安じ給へとて、ふたゝび淵のほとりへ走り行き、翻江攪海の神通をつかひ淵水をひるがへし、泥水とかき濁せば、彼龍たまり得ず、牙をならして跳り出で悟空と戦かふ事半時ばかり、さしもの大龍力、勞れかなひがたくやおもひけん、身を變じて小蛇となり艸の中にかくれたり。行者いよく怒り大聲を發し、唵字咒語を唱へ土地の山神を呼出し、龍の在所を尋ねけるに、山神こたへて申けるは、此所の山を蛇盤山と號し、此淵を鷹愁淵と申て、むかしより曾て邪神住ことなし。原來淵水底清くして、鴉鵲のたぐひおのれが影を群鳥とおもひ、多く水底に陷るをもつて鷹愁淵の名あり。さる清き淵水なれば、惡龍の住べきいはれなし。前年觀音菩薩一條の業龍を此淵に放ち、經を取る人を待しめ給ふ。只今觀音菩薩を請ひ來らば、此龍忽ち出來らん。行者是を聞て南海に走り行き觀音を請來らんとす。此時空中に在し

金頭揭諦の神呼で曰く、大聖しばらく待候へ、我南海に行て菩薩を請じ來らんとて、南をさして飛行しが、暫時の内に観音をいざなひ蛇盤山に立回る。行者菩薩の來り給ふを見て忽ち罵て曰く、爾は大慈悲の教主にして、何ぞ我をあざむき帽子を戴かせ、又唐僧に緊箍咒とやらん咒ををしへ、我頭を疼しむる事はそもく何の慈悲ぞや。菩薩の曰はく、爾佛門の教へに順がはず。若しかくのごとくせざれば、再び悪事をなして天上を鬧すべし。是爾に正果を得させん我慈悲心なり。行者曰く、然らば今此潤水に惡龍を放ち置、我師父の馬を喫はしめて、西方に行く途を妨ぐるは是も又慈悲なりや。菩薩の曰はく、我此所に放し置し龍は西海龍王の子なり。向より此潤底に在て經を取る人を待しめしに、爾其經を取を云ざるにより、渠しらすして馬を喫ひしならんとて、揭諦に命じてかの龍をよび出し、柳の枝をもつて龍の渾身を拂ひ給へば、忽一匹の龍馬と變ず。また柳の葉三ツを摘て行者が頭の後に置て、三根の毛となし、爾若し大難に逢たる時、此三根の毛其災ひをすくふべし。爾勉めて唐僧を守護せよとねんごろに云含めたまひ、南の方へ去り給へば、行者御跡を禮拜し龍馬を牽て三藏の前に來り、事の子細をつまびらかに物語れば、三藏南に向かひ三拜し、また馬に乗りて潤を渡り山を過ぎ西に望んで駈給ふに、紅日西に沈み天色すでに晚なんとす。路の傍に一ツの廟あり。里社祠といふ大字を書して門にかけたり。三藏馬より下り門内に入給ふに、内に一人の老翁あり。三藏師弟を見て齋飯を設け一夜を宿せしめ、翌朝馬の鞍轡其外皆具をとり出して三藏にあたへ、俱に送りて門を

出けるが、忽然として老翁の姿を失ふ。時に空中に聲あつて、我は落迦山の神なり。觀音菩薩の命を受け馬の皆具を與ふなりと云捨て、雲井はるかに飛去りければ、三藏忙ぎ空に望みて禮拜し、又馬に鞭うち西の方へ急ぎ給ふ。

觀音院僧謀二寶貝一  
黑風山怪竊二袈裟一

扱も玄奘三藏孫行者は、西の方へ兩月餘り急ぎ給ふに、已に春の氣色のどやかに霞たなびき、木草の色翠を帯て旅のあはれぞまさりける。はや西蕃哈叻國を過ぎて、遙に山の凹の所に樓閣建てつらねたる寺院あり。三藏かの寺に一夜を宿るべしとて、かしこに至り見給ふに、正殿の屋上に觀音禪院と大字して額をかけたなり。三藏馬より下り山門に入て案内を乞ひ給へば、一人の僧立出て何處の人と問ふ。三藏くはしく其來歴を語りたまへば、かの小僧三藏をいざなひて方丈へつれ行けるが、孫行者をつらつら見て、世にもかゝる醜をのこのありけるよ。恰も是猴の一般と密に心におもひつゝ、遂に方丈に至れば、院主和尚數多の僧と共に出迎て、茶をすゝめ菓子を獻じ、さまざまにもてなしまわらす時に、一人白髯の老僧出來り、三藏に禮をなし童子に命じ白銅壺を提、三杯の香茶を三藏に獻す。三藏呑をはりて其器のうつくしきを深く讚給へば、老僧笑うて曰、此器何ぞ賞翫するに足らんや。貴僧上國より來り給へば、定めて此處に珍しき寶を持給ひ候はん。我に一見給へかすと云ふ。三藏笑う

て、貧僧いかでかざる寶具を持候はん。時に行者進み出て曰く、師父かの袈裟を見せ給へ。院主の曰く、袈裟のごときは此寺に七八百も所持し候へば、いかなるうるはしき東西なりとも、見るに望みなく候と云。行者是を聞て忽行李をとり出し是を開かんとす。三藏ひきとめて密語て曰く、備人と富を争ふことなかれ。貧婪の人は是を見れば必ず悪心を生ずべし。行者の曰く、老猿是にあり師父放心し給へとて、遂に包袱を開きかの錦襪の袈裟を取れば、其紅光堂に滿彩色は庭に盈てり。衆僧立寄見驚歎する事大かたならず。老僧果して欲心を生じ、三藏に向ひ申けるは、我今年今月までかゝる紅光袈裟を見ず。希くは一夜かして得と拜見なさしめ給へと、手を合せて乞けるに、三藏は答ふべき詞を知らず唯黙しておはしけるが、行者打ち笑ひ、備が數多の袈裟ありといへども、かくのごとき光彩はあるべからず。此夕一夜は師に請て備に借べし。老僧大さによろこび遂に後房に入て燈のもとに彩はあるべからず。我かゝるうるはしき袈裟を着るならば、世の望み足りなんとてさめんと泣ければ、彼袈裟をひらき、我かゝるうるはしき袈裟を着るならば、世の望み足りなんとてさめんと泣ければ、廣謀といふ和尚すゝみ出、老僧さばかり此袈裟を愛し給ふならば、計ごとを以て奪ひ取たまへ。今客僧旅の勞れにて禪堂の中によく寝たり。急に堂の四方へ柴薪を積上げ、火を付て焼殺さば、此袈裟自然老僧の東方となるべし。老僧是を聞てかぎりなく悦び、此はかりごと究めて妙なりとて、衆僧に命じて其用意をなしたりける。此時悟空は三藏と俱に禪堂の内に睡り居たりしが、外面に人音さわがしきを聞心にあやしみ、忽ち身を變じて一ツの蜂となり、廳の間より出て窺ふに、多くの僧ども柴薪

をつみて禪堂をやかんとす。行者是を見て果して師父の言のごとく、我袈裟をとらんと欲してかゝる悪心を發しけるよな。よし／＼我もまた他が計ごとに就て計を行はんとて、直に天に馳登り廣目天王の許に走り行、辟火罩を借來り、禪堂の上に打おほひ、其身は後房の屋上に座して袈裟を守護し、火の燃出るを待たり。もろ／＼の僧徒、行者がかゝる手術あるともしらず、禪堂の廻りへ火を放てば、行者忽ち大風をまねき出し、火燭四方に散じて本堂方丈、回廊鐘樓ごとく／＼燃上り、防ぐべきやうあらざれば、僧徒皆あわてさわぎ、器財衣服を奪て猛火の中を逃走り、をめきさけぶありさまは、目もあてられぬ有さまなり。爰に觀音院を南へ去る事二十里にして、黒風洞といふ所あり。洞の裡に一個の妖精有。此火光を見て火を救はばやと、雲に乗て觀音院に來りて見れば、諸堂ごとごとく火燭の中にくづもれたるに、禪堂と後房のみ更に火移す。あやしと目を止て是を見るに、後房の屋上に一個の老猿在て風をまねきて座し居たり。かの妖精忙ぎ房中に入て見れば、案上に霞光瑞彩かゝりきわたる錦襪の袈裟を置たり。妖精是を見て心によろこび、密に袈裟を偷んで黒風山へ歸りけり。既に五更の天にいたり、火もやう／＼にしづまれば、行者禪堂に蔽ひたる辟火罩をとりて天に上り廣目天王に返し、復蜂となりて禪堂に入り、師父を呼起して事の子細を物語りぬれば、三藏大さにおどろき玉ひ、忙ぎ門を開きて見玉ふに、さしも華麗に建つらねたる觀音院、悉く灰燼となりて禪堂後房のみ纔かに残れり。三藏はあきれながら、先袈裟をとらんとて馬を行者に牽せて後房の方へ來り玉へば、



もろくの僧徒三藏師弟を見て大きに驚き、一齊に老僧は是神人なり。かゝる大火にいまだ曾て焼死せず。はやく袈裟を返し給へと申にぞ、老僧も殊に驚きかの袈裟を尋れ共いづちへ行しやさらに見えす。今は唐僧に逢て何云分すべきやと、遂に柱の元に立よりて頭を碎き死したりける。行者是を聞て大きに怒り、必定下僧徒がかくしたるに違ひなしとて、焼残り箱籠を査すれども曾て袈裟のゆくへを見ず。三藏此體を見て深く行者をうらみ、爾我寶貝を猥に他人に借あたへ、今何のほかりごとかあるや。はやく袈裟を尋ぬ出さずんば、我必ず緊箍咒を唱ふべし。行者聞て大きに懼れ、師父かならず此袈裟をたづね出し申べしとて、衆僧にむかひ問て曰く、此ちかき邊りに妖精の住事はなきか。院主の曰く、是より二十里計り南に黒風山黒風洞と申處あり。洞の裏に一個の黒漢あり。此者常に老僧と交り深く當院へも往來せり。此黒漢頗る神通ありて、此ほとりの妖精なり。行者の曰く、師父の袈裟を偷みとりしは、將に此妖精に疑ひなし。いで取かへして來るべしとて、三藏に暫時のいとまを乞ふ。忽ち雲に飛びのり南をさして出行ければ、衆僧行者が神通を見て大きに驚き、いよく三藏を尊敬し後房に留てもてなしける。

初編卷之七

行者大闢黒風山

觀音收伏熊熊恠

孫行者筋斗雲に騰り黒風山に來り、空中より覗み見れば、石崖の下に三人の妖精居ならびて物がたりす。其一人は件の黒漢、左の一人は道人、右に座したるは白衣秀士なり。行者雲を下りて崖の陰にかくれて、その物がたりを聞くに、黒漢の曰く、明日は某が母難日也。兩公を請て一杯を酌べし。さても昨夜錦襪の佛衣を得たり。明日の酒宴を佛衣會と號け、公等には是を見せ申さん。行者是を聞くや否や如意棒を打振り跳り出で、爾黒漢我袈裟を偷み佛衣會をなさんとや。とり出して我にかへさずんば、此鐵棒忽ち爾が身を粉になさん。三個の妖精是を聞きて大きにおどろき、黒漢は風と化して逃れ行き、道人は雲にのりて走り、秀士一人踪に後れたるを、只一棒に打殺せば、白花蛇と變じたり。行者是を見て黒漢はかならず熊の精なるべし。何所に隠るゝともさがし出して、袈裟をとりかへさずんば止まじと、其山中を尋るに一座の洞あり。石門かたくとざし石板の上に黒風山黒風洞と書たり。行者鐵棒を揚て門の扉を打ち、大音に罵つて曰く、賊恠早く吾袈裟をかへせと呼れば、黒漢身に甲冑を

着し、手に一桿の黒纓鎗を提げ、門を開きてをどり出で、行者と鎗をまじへ戦かふ事十餘合、黒漢敵しがたくやありけん、身をかへして洞の中へ入り石門を扉したり。行者も三藏の待佗給はんことを恐れ、觀音院へ立ち歸り、黒漢の袈裟を偷み隠し置たることをくはしく物がたり、後房に入て齋飯を喰ひ再び黒風山へ赴けるに、其道にて黒漢が屬小の小妖、書牒匣を持て出来る。行者見るより只一打に打殺し、かの匣を開き見れば、則ち先に頭を碎き死たりし觀音院の老僧を接待せる書帖なり。行者讀み終り、身を變じてかの老僧の像となり、洞門に至り、かくと案内すれば、黒漢大にあやしみ、觀音院の老僧かくばかり速に來るべきやうなし。是は老猿めが化たるにてこそあらん。我是を試んと先づ佛衣を隠し置き請て客殿に請じ、とかくの對話しける處へ、巡山の小妖あわたくしく馳來り、大王の觀音院へ送り玉ふ使者を孫行者が打殺し、則ちかの行者觀音院の老僧と像を變じ、洞の中へ入候と注進す。黒漢聞もあへず鎗を奪つ突きかれば、行者も本相をあらはし、鐵棒を耳の中より引出し、さん／＼に戦ひける。此時天色すでに晩、いまだ勝負も分らざれば、戰を明日と約し黒漢は洞裡に歸り、行者は觀音院へ立歸りぬ。翌早朝行者又立出往んとするを、三藏引留て曰く、備いづくへか行くや。行者の曰く、我此度のことをよく／＼考へ見るに、都て是れ觀音菩薩の仕事なるべし。我南海に往きて菩薩に此事を問はんと欲す。三藏の曰く、爾南海に至りいつか爰に歸り來るや。行者の曰く、我必ず午時飯時には歸るべしとて筋斗雲に騰がり、直に紫竹林中寶蓮臺の下に至り、菩薩にむかひて

申けるは、爾我西へ赴く其道に禪院を作りおきて人間の香花を受け、其隣に黒熊精を住しめ渠に師父の袈裟を偷ませたるは何故ぞや。今我と同じく彼所に往きて、袈裟をとりて我に返し候へと云ふ。菩薩の曰く、爾猴偽りを云ふことなかれ。爾師父の言葉にしたがはず、袈裟を小人に借あたへ、又風を呼び火をおこして我下院を焼はらひ、妖精に袈裟をぬすまれたるは、原爾があやまりなり。行者却て我處に來りて圖頼話をいふは何事ぞやと噴り給へば、行者忙ぎ禮拜し菩薩我罪をゆるし給へ。只かの熊精袈裟をかへさず、我恐るゝは師父の咒をとなへ給はんことを。菩薩慈悲をたれて袈裟をとり返し給はるべしと申にぞ、遂に觀音祥雲に打のり行者とともに黒風山に至り給ふ。此時一個の道人手に仙丹二粒を玻璃の盤にもり、岨をあゆみ行けるを、行者見るより走りより一棒に打殺し、菩薩に向うて申けるは、此道人は是れ蒼狼の精なり。今日熊精の誕生日を賀せんため、此仙丹丸薬を持つて黒風洞に至る者なり。菩薩身を變じて今の道人となり、盤を捧げて彼洞に至り給へ。我は丸薬と變じて盤中に上り、熊精が吞下すを待て其腸を攪亂し、而してかの袈裟を出させんに、他其くるしみにたへかねかならず袈裟かへすべし。觀音大きに打笑ひ給ひ、則ち道人が像に變じ給へば、行者は一粒の仙丹に化し、盤の内にまろび居たり。かの盤を兩手にさげ洞の内に入り給へば、黒漢忙ぎむかへ奉り客殿にいざなひ、座定りて後菩薩の給はく、小道一粒の仙丹を獻じて、大王の壽を賀し奉るとして、盤を黒漢の前にさし出し給へば、熊精大によろこび、則ち丸薬をとりて口中に入たりける。

行者急に腹中に飛入り、手脚を延て舞躍る。熊精仰天する事大かたならず、命をゆるせいのちを免せと、さげびけるに、菩薩忽ち本相を現はし給ひ、命をしくば袈裟を出し返すべしとの給へば、熊精いそぎ小妖を呼んで袈裟とり出して、菩薩の御前にさし置たり。此時行者鼻の孔より飛び出で、袈裟を取て走り出るを、熊精怒て鎗をあげて突んとす。観音菩薩ふところより、金箍一ツをとり出して黒漢が頭に戴かせ咒を念へ玉へば、熊精頭をかへ地にまろび、あな痛や頭痛や菩薩吾をゆるさせ玉へと泣叫びて詫けるに、観音則かたが爲に摩頂受戒し給ひ、御弟子となして南海へ引領玉へば、行者菩薩に向ひ禮拜し、袈裟をさへげて観音院へかへりけり。

観音院唐僧脱難

高老莊行者降魔

さる程に玄奘三藏は、なんなく袈裟を取り返し、衆僧にいとまを告げ、観音院を立出で玉ひ西に行く事七日計り、爰に一人の後生あわたくしく走り行くを、行者聲をかけ引住て問て曰く、此所は地名を何と號し候や。かの漢答て烏斯藏國の地高老僧と、云ひ捨て走りゆくを、行者とらへて再び問て曰く、爾何事ありてかくはあわたくしく道を走るや。かの漢の曰く、我は此所の住人高太公といふ者の家人高才と云ふものなり。我家過し年女に婿をとりしが、此婿妖精にて後宅に女を引入れ、其生死を人にしらしめず。これによつて今修験者をまねきて、かの婿の妖精をとらへんとす。行者笑うて曰

く、爾遠く修験者を尋るに及ばず、吾ばけものを捕ることに妙を得たり。我徒をいざなひはやく家に歸るべし。此漢行者が言を聞きて、半は信じ半はうたがひ、遂にいざなひて家に歸る。此家の主人高太公門を出て向へけるが、行者が像のあやしげなるを見て大きに恐れ、家人高才を呼て曰く、我家すでに妖精のためになやまさる、事少からず。爾其上にかゝる雷公を伴ひ來るは何事ぞや。行者是れを聞きて曰く、老人我を恐れ給ふ事なけれ。我かたち醜といへども、妖精を捕る事我原來手段あり。高太公爰において、兩人を請じ入て座すでに定りければ、三藏主公に禮をなして曰く、貧僧は東土唐國よりはるく西天に至て經をもとむる者なり。此家の妖精とはいかなる者に候やと問ひ給へば、太公の曰く、三年前の事にて候。一人の漢來り我女の婿たらんことを乞ふ。我其何處の人たるを問へば、福陵山の産姓は猪と申すよし、我他が妖精なるをしらすして、遂に招きて婿となすに、他さまざまに形を變じ、遂に長嘴大耳なる獸子となり、其食を吃ふ事常人の三十人當に猶過たり。されども常に素にして葷きを曾つて喰はず。もし他葷を好まば我家産忽ち倒るべし。しかのみならず風を起し雲にのりて往來し、剩へ我女を後宅にひき入れ、ふたゝび其面だに見たる事なし。せめては女の生死を聞かば、我希ひ足りとてさめんとこそ歎きける。行者是れを聞て打笑ひ、太公こころを安じ給へ、こよひかならず此妖精をとらへ此家を去らしむべし。太公よろこぶ事かぎりなく、齋飯を備へてもてなしける。日すでに暮れければ、行者鐵棒を提げ後宅にいたり、見れば門扇かた

くとざしたり。行者鐵棒を以て一打に打碎き、裡に入り臥たる女に向ひ、妖精はいづくにあるや。女  
勞れたる聲を出し、渠日ごとに雲にのりて出で行く、その行く所をしらず。行者則ち女を引立て本  
宅へ立かへらせ、其身はかの女のかたちに変じ、房に入て臥居たり。しばらくありて一陣の風吹き來  
り、口長く耳大きな妖精空中より下り來り、直ちに房裏にいりて牀の上に登らんとす。行者則ち長  
き嘴をとらへて突落せば、妖精甚だ驚き、今日備何故にかく力強きや。我歸るの遅きをうらむるにあ  
らずや。行者の曰く、我今日こゝろにかなはざる事あり、かまへてちかより給ふな。妖精の曰く、備  
何ぞかくのごとく我を恨るぞ。我此家の茶飯を吃ふといへども、又田畠を耕し家業の事をおこたらず。  
備が衣服食用に至るまで皆我設にて事足れり。其餘備が心になはざるは何事ぞやと問ふ。行者の曰  
く、今日我父母外面にありての給ふは、我婿はあやしき者にて人間のたぐひにあらず。今修験者をま  
ねきて逐出すべしと云ひ給へり。我是れを聞て甚だ心にこれをくるしむ。妖精の曰く、備心を用ふる  
事なかれ。我原來天罡變化の術あり。又九齒の釘鉈を持たり。何者をおそるべき。行者曰く、我爹  
の宣ひしは齊天大聖といふ通力の神をまねき、君をとらへしめんと云ひ給へり。是にも恐れ給はぬや  
といふ。其時妖精おどろきたる顔色にて、それこそ天宮を鬧がせし弼馬溫孫悟空なり。渠もし來らば  
敵しがたしとて座を立て出んとす。此時行者本相をあらはし、我は則ち孫悟空なり。妖精これを見て  
あわておどろき忽ち萬道火光と化し、福陵山をさして逃走れば、行者もまた雲に騰がりのがすまじ

悟空 追猪 到福 陵山



下

悟空



とて追て行く。

雲棧洞悟空收二八戒一

浮屠山玄奘受心經一

孫行者は妖精が踪を追うて福陵山に至り見れば一個の洞あり。雲棧洞の三字を門上に彫付たり。洞の中よりかの妖精、九齒の釘鉈を提げをどり出て、呼はつて曰く、そもく我を誰とかおもふ。其往昔は天上に在りて天蓬元帥の職を任せられしが、王母瑤池の會の時、我醉にまかせて嫦娥をとらへ戯れし科により、下界へ逐下され錯つて猪の胎に入り、遂に此山に止り名を猪鬃鬃といふものなり。爾五百年前天上を鬧せし孫悟空、なんのためにか爰に來るや。行者曰、我今邪心をあらため東土三藏法師を守護し、西天に往て佛を拜し經を需んとす。爾高太公が女をくるしめ悪行をなす故に、唯一棒に打殺さんとす。はやく來つて勝負を決せよ。妖精是れを聞きて忽ち釘鉈を捨て申けるは、我向に觀音菩薩の勸により受戒持齋し、經を取る人にしたがひ、西天に往て佛を拜せんと、此所に待こと既に久し、願はくは吾を引いて三藏法師にまみえしめよ。行者が曰く、爾が云ふ所恐らくは偽ならん。實に唐僧にしたがひ、西天に至らんとならば、誓ひを立て我に見すべし。妖精其時天に向ひ合掌し、南無阿彌陀佛、此言妄ならば忽ち天の咎を受け、屍を劈こと萬段ならんと誓をなせば、行者遂に妖精を伴なひ、三藏の前に禮拜し、師父我罪をゆるし給ひ、憐みを垂れて從弟となし、西天へめしつれ

たまへとて、先に菩薩の教誨し玉ひし事を委細にものたれば、三藏大きに悦び玉ひ、遂に師弟の約をなし且つ其名を問ひ玉ふに、妖精答て菩薩我に法名を賜り猪悟能と申候。三藏曰く、此名備が法兄孫悟空と同派なり。我又備に別名をあたふべしとて、八戒と號け玉ふ。太公此始終を見て大きによりこび、青錦の袈裟と鞋一足を八戒にあたへ、又二百兩の銀を三藏に獻呈す。三藏あへてこれを受け給はず、暇を告て立出給へば、八戒は行李を背おひ、行者は鐵棒をふりかたげ、三藏を供奉し西の方へいそぎける。行事一月ばかりにして、浮屠山といへる高山に至り、烏巢禪師に謁し給ふ。此の禪師と申は香檜樹上に巢を作り、其中に住み給ふ。四方には麋鹿の類ひ花を捧げ、猿猴の屬菓を獻じ、青鸞彩鳳ひとしく啼き、白鶴錦鷄多く集る。三藏馬より下りて禮拜し給ふに、禪師もまた木を下りて答禮し、心經一卷を三藏に授け、魔障の難あらん時此經をとらへば、おのづから害を遁れ候べしとありけるに、三藏謹で此經を記憶、拜謝して西におもむき給へば、禪師も金光と化して巢の中にかくれ給ふ。

黄風嶺唐僧有難  
半山八戒先爭

扱も三藏師弟は日をかさね月を送り、西方へといそぎ給ふに、はや夏のはじめ黄風嶺といふ山にさしかへり給ふに、山の麓より猛虎一疋をどり出たり。八戒是れを見て釘鉈を取て立向ひ、虎の頭を突

んとす。此虎又一个の妖精にて、忽ち人のごとく立て罵りて曰、我は黄風大王の屬下虎先鋒といふ者なり。爾等凡夫とらへ歸て案酒となさん。八戒も又怒て曰く、我徒また何ぞよのつねの凡夫ならん。東土大唐の聖僧を供奉し、西方に往て佛を拜し經を需るものなり。爾道をひらき通さずんば只一突に突殺すべし。虎先鋒大きにいかり、叢の中より兩口の刀をとり出し、八戒と戦ふこと十餘合、行者これをたすけて妖精を打殺さんとして鐵棒をふるうて打てかゝる。虎先鋒今はかなはじとおもひ、身を返して逃れけるが、忽ち金蟬脱殻の術を行ひ、身の皮を脱下し傍なる石上に打着せ、虎の踞りたるかたちとなし、本身は風と化して走りしが、道に三藏の座しておはしけるを、一爪に提げ洞の中へ立歸る。行者八戒は虎を追うて山を下りしが、件の虎崖の傍に臥したりけるを、得たりかしこしと棒を上げてはたと打に、只虎の皮にて大石を包みたるなり。行者大きに驚き、此妖精金蟬脱殻の術を行ひ我徒をあざむきたり。はやく立ち歸りて師父を守護せんとして、八戒と供に舊の處に來り見れば、南無三寶三藏はおはしませす。行者雷のごとくをめき叫び、口惜きことかな師父はすでに妖精にとられ給へり。いづくまでも追ひ行て尋ね逢で置んやと山中をかき亂して尋ける。しかるに山の凹たる下に大きな洞あり。門の上に黄風嶺黄洞と云ふ五字を書したり。行者鐵棒を揚て門の扉を碎るまで打たき、我師父をかへせ。かへさずんば此洞を微塵にせんと大音に罵たり。此時洞の中には黄風大王三藏法師を見て申けるは、此僧原大唐において徳高き聖僧なり。是が弟子に孫悟空といふ神通廣大の者ありと聞

及べり。他が尋て来るや否やを待て此法師を吃ふべしとて、樁木に三藏をからめ付し處に、行者洞門に來つてかへせくと叫びけるに、さればこそ孫悟空ならめとて、虎先鋒洞門をおしひらき、行者に向うて討てかへれば、行者鐵棒を水車にまはし、さんくんに戦ひしが、虎先鋒いかでか行者に敵すべき、身をかへし山の小路を逃行けるに、猪八戒爰に有て備を待つ事已に久しと云ひも終らず、釘鉈を拿のべ只一突に虎先鋒を殺したり。行者是を見て八戒を稱讚し、ふたゝび洞に入て師父の命を救はんと、一手に鐵棒をひつさげ一手には殺したる虎を引づり、洞門さして駆行ける。

初編卷之八

護法設莊留大聖  
須彌靈吉定風魔

孫行者死たる虎を牽て黃風洞に來たり、我師父を返さずんば、此虎を以て例とせんと大音に罵れば、黃風大王三股鋼叉を提げ、門外に走り出で、我備が師父を吃ざるに備却て我先鋒を打殺せり。今其仇を報すべしとて、行者と戦かひをいどむこと三十餘合、行者一把の毛を抜き口に含みて噴出せば、變じて百千の行者となり、八方より黃風王をとり圍む。黃風王もまた口をひらきて氣を吐に、忽ち黃風大きに起り、毛の變じたる行者悉く虚空に吹上られ、足もたむべきやうぞなし。行者急に毛を集めて身に返し、風をくわいて突來るを、黃風王ふたゝび行者が面に向て、怪風を吹かくれば、此風行者が眼に入て更に目をひらく事あたはず。行者大きに驚き身を返して逃走るを、黃風王もまたこれを追はず、風を收めて洞の中へ歸りける。行者八戒に逢て戦の始終を物がたり、妖精猥に我師父を殺すことあるまじければ、再び計を定めて救ひ出しまゐらせん。我怪風に吹れて眼珠痛み涙流れて止す、此邊に眼科先生あらば療治を受て、後戦かふべしとて、八戒と共に馬をひき、山の麓の人家に立より一



宿を乞ひけるに、裏より老翁一人立出、兩人をいざなひ入れ胡麻飯をすゝめてもてなしける。時に行者老翁に問うて曰く、我今日黄風洞の妖怪と戦かひ、風に吹かれて眼の痛たへがたし。此ほとりに眼薬を賣る家やあると尋るに、老翁曰く、かの妖怪が吹出す黄風は、味神風と號て人の命を縮む。神仙の方にあらざれば治することあたはず。我家に花九子膏と云ふ仙薬あり。風眼を治するの仙方なりとて取り出してあたへければ、行者大さによろこびくすりを眼に點じ、八戒と同じく其夜は爰に睡りける。夜明て行者目をひらき見れば、眼さらにあきらかに常より益よし。起上りて四方を見るに、ありし家居も老翁も俱に見えずなりて、只柳の木かげに八戒と同じく臥し居たり。八戒大きに愕ろき、我何時にかゝる荒野に寝たるぞや。こゝもとに家はありし、老翁は何地へ行しとうろたふるを、行者笑うて爾馱子氣をしづめて樹の上にかけてし帖子を見よと云ふ。八戒仰て是を見れば四句の頌あり。其詞に曰く、

莊居非是俗人居

護法伽藍點化廬

妙藥與君醫眼病

盡心降怪莫躊躇

行者八戒に示して曰く、是れ伽藍觀音菩薩の命を受け、暗に師父と我々を保り玉ふものなり。爾爰に在る馬と行李を守るべし。我は師父の安否を窺がひ來らんとて、洞の前に飛び行き身を變じて一個の蚊蟲となり、洞中へ飛入り師父をたづぬるに、椿の木に三藏をからめ置たり。行者師父の頭の上に止

りて、師父々々と呼けるに、三藏行者が聲を聞き難がへりたる心地して、悟空備いづくに在ると問ひ玉へば、行者が曰く、我は是則師父の頭の上に止り在り。我今日中に妖精をとらへ、師父を救ひ奉らん。心安くおぼしめせとて、又飛行て黄風王が居間の梁の上に止りてうかひ聞くに、忽ち一個の小妖走り來り、某只今山を巡見候處に、耳大きく口長き和尚、林の中に在て釘鉈を振りて、すでに我を殺さんとす。我やうゝに逃れ來り候が、きのふの毛臉の和尚は見え申さすと云ふ。黄風王聞て孫行者は昨日の風に中り、必ず死したる者ならん。此上いかなる強敵來り攻るとも、我是を應にすべし。只我風を鎮るものは靈吉菩薩のみなりと云ふ。行者これを聞きて大さによろこび、洞の中を飛び出で本相を顯し、八戒を呼て黄風王が云ひし言を物がたり、靈吉菩薩の住處はいづくなるらんと二人商議してありける所に、忽ち老翁一人歩行來れり。八戒の曰く、師兄此老人に問ひ玉はんはいかに。行者點頭て老人の前に走り寄り、靈吉菩薩の住玉ふ所や知り給ふと尋るに、老人答て、此正南に小須彌山といふ山あり。是れ靈吉菩薩の住所なり。かく云ふ我は太白金星李長庚なりと云ひ終て清風と化して飛去り玉ふ。行者是を聞きて直に筋斗雲にまたがり、暫時に小須彌山に至り、靈吉菩薩に事の子細を物語り、師父を救ひ玉へと申すに、菩薩そのまゝ領承ありて、定風丹を懐にし飛龍寶杖を携へ、行者と打つれ雲に乗りて黄風洞に至り玉ふ。行者洞の前にすゝみより、鐵棒をもつて門の扉を微塵にくだき、黄風來れと叫びければ、黄風王大きに怒り、例の鋼叉をさげをどり出て、行者と戦

かふ事數十合、黄風王またもや口を開きて風を吹んとしける時、靈吉菩薩雲中より飛龍寶杖を投下し給へば、忽ち八爪の金龍と變じ、黄風王が頭を掴んで空中へ引上れば、遂に黄風が本相露れ、黄毛貂鼠となりける。菩薩行者に宣く、他は靈山に住し得道なるが、瑠璃盞の清油を偷み、金剛が爲に把られん事を恐れ、此所に來りて妖精となれり。我れ渠を如來の許へつれ行き、御下知によりて計らふべき旨ありとて、遂にかの鼠をとらへ西の方へ去り給ふ。行者西に向て禮拜し、八戒と俱に洞の中に入れ入り、小妖を悉く打殺し、師父を救ひ出し暫く洞の内に勞れを休め、再び路をもとめて西をさして行き給ふ。

八戒大戰流沙河

木父奉法收悟淨

寒蟬敗柳に鳴き大火西に向て流る、秋のはじめになりければ、こゝろぼそくも三藏は二人の弟子にいざなはれ、嶮難を凌ぎ道を急ぎ給ふに、忽ち前面に一條の大河あり。大波湧かへりて河の廣さ其いくばくといふ限りを知らず。岸に上て望み見る時、傍に一つの石碑あり。上に流沙河の三字を篆字にて彫付け、腹上に四行の小楷字あり。

八百流沙界

三千弱水深

鷲毛飄不起

蘆花定底沈

三藏是を見てさては聞き及びたる流沙河なり。何さま此河を渡らんこと容易ことにあらざと、河岸に立て眺め給ふに、忽ち河浪山のごとく卷上り、一個の妖精あらはれ出たり。八戒釘鉞を提げ走り寄て是を見れば、かの妖精項に九個骷髏を繋ぎ掛け、一根の寶杖を振て八戒を目がけ討てかゝる。八戒も釘鉞を持てさへ、戦ひすでに二十餘合に及ぶ所に、行者鐵棒を揚て戦かひを助けんとす。此妖精行者が來るを見て、叶まじくやおもひけん、深く水中に沈みて行方を見失なひぬ。八戒大きに怒て罵りけるは、我むかし天上に在て天河水兵を督どり、頗ぶる水性を知れり。何處へ隠るとも拿へ來つて此河案内させんと、云ひも終らず直覆を脱ぎ、釘鉞を提げ水底に潜りいれば、かの妖精杖を擧てさへざりとやめ、水中に在て戦かふ事半時ばかり、八戒心中に一計を生じ、偽り負て水上に走り出れば、妖精精進すまじと同じく追て水面にあらはれ出で、浪を蹴立て二時計も戦ひしが、行者また八戒を助んとて、雲に打乗り鐵棒を振てすゝみければ、妖精是を見て再び水底へ引入たり。八戒行者に向かひ罵りけるは、爾急猴子我妖精を牽て岸に上らんとおもふ所に、再び來つて水底へ放ち遣りたり。行者笑うて、爾啼しく云ふことなかれとて兩人等しく三藏の御前に來り、戦のさまを物語り、かさねて行者申けるは、今日は已に晩におよべり。夜あけなば再び計ごとをめぐらし、此妖精をとらふべし。師父こゝろを安んじ、今宵は此川端に一夜をあかしたまへとて、また身を起し雲に乗り、人家を尋て一鉢の齋飯を携へ歸り、師父にすゝめまゐらす。八戒問うて曰く、哥々何國に往て齋飯をもとめ來る

や。行者曰く、北の方七千里の内に人家あることなし。我此齋飯をもとめし家は、爰を去ること凡壹萬里。八戒笑うて曰く、爾僞を申事なかれ。かゝる遠き道をいかでか須臾の内に往來せんや。行者の曰く、爾いまだ知らず。我勛斗雲は一瞬飛行こと十萬八千里、いはんや五千里一萬里の道を行くは、一たび頭をふるよりも猶やすし。八戒が曰く、哥々左ばかり飛行に自在ならば、水中の妖精を打捨て置き、師父を背て一とびに此河を渡り候へ。行者の曰く、爾も原來雲に騰る事を知れり。何ぞはやく師父を背て先此河を渡らざる。師父は凡胎肉骨の人なるゆゑ、雲中にいざなひ俱に飛行する事あたはず。彼の大山を移し大地を縮る法に至ては、我よく是を行へども、苦海超脱せざる人を携さへ一寸も動く事あたはず。只々師父の身命を守護し、我徒が業果の満るを待ばかりなりとかたり合て、其夜は川岸に一夜をあかしぬ。翌朝行者師父に向ひて曰く、此河の妖精我々が計略に陥らず、我今より南海に往きて観音菩薩をたのみ申べし。師父は八戒と暫時此處にまたせ給へとて、雲に飛のり南をさして出で行きける。ほどなく普陀落山紫竹林に至り、菩薩を拜し流沙河に妖精ありて、師父渡りになやみ候。ねがはくは菩薩計ごとををしへ給へとて、戦の始終を物語りければ、菩薩の曰はく、流沙河の妖精は吾先きに善をすゝめ、唐僧を守護して西天に行くことを約し置きぬ。爾徒經を取ることを云ば、渠みづから歸順すべきに、要なき事を勞するものかなと笑ひ給ひ、木父をめされ爾流沙河に至り、悟淨を呼び出し唐僧を守りて河を渡すべしとて、一個の紅葫蘆をとり出し、木父にあたへた

まへば、行者拜謝して木父と俱に雲にのり、流沙河に至りければ、木父則ちかの葫蘆をさゝげて流沙河の水面に至り、沙悟淨はいづくにあるや、經をとる人爰にあり。早く來りて調を乞へと叫ければ、忽ち大浪をひるがへしかの妖精あらはれ出で、木父を看て禮をなし、菩薩はいづくにおはしますやと問ふ。木父曰く、菩薩は來り給はず、我に命じて爾を唐僧の弟子となし、此河を渡し申せとの仰なり。妖精精是を聞きて曰く、其唐僧はいづくにありや。木父曰く、東の岸上に座せる僧則ち是なり。妖精大きにおどろき、黃錦の直裰をかぶり岸に上り、三藏の前に禮を行ひ、弟子師父の尊容を知らず、多くの不禮をなしたり。願はくは其罪をゆるし給へ。三藏の曰く、爾眞實に我教を守らんとするか。妖精の曰く、弟子向に菩薩の教化を受け、法名を沙悟淨と賜り、師父の來り給ふを待詫てこそ候へ。何ぞ僞はり申の理あらんや。三藏是を聞きて大きによろこび、別に名付て沙和尚と呼び給ふ。其時木父沙悟淨をまねき、首にかけたる九ツの骷體を索にて繋ぎ、菩薩より賜りし紅の葫蘆を其正中に居る、水に浮めて三藏を請てこれに乗せまゐらせ、八戒悟淨左右に在り、孫行者龍馬を牽て後にしたかひ、木父は雲にのりてこれを守護し、飄然として流沙の大河を西の岸に着き給ふ。木父いそぎ葫蘆をとり收めぬれば、九個骷體も陰風と化して消失たり。三藏木父に向つて再三拜禮し、三人の弟子と俱にまた西の方へいそぎける。

三藏不忘本

師徒四人流沙河を過ぎ、路をもとめていそぐほどに、早秋の季に至りて、日はやく西に没し宿るべき家やあると、向うの方を望み見れば、松林の下に一簇の人家あり。其中に家作り大きにしてこゝろにく、住なしたる家あり。行者門内に入てうかがひ見るに、南面に三間の大廳あり。壁に一幅の壽山福海の畫をかけ、前に香几を置き空焚の薫り得もいはれず住みなしたり。内より色よき婦人立出て、備何人なれば寡婦の家を窺ふやと咎めけるに、行者答て曰く、我々師徒四人東土大唐天子の勅をかうふり、西方に往て經をとらんとす。日既にくれて候へば、一夜の宿りをめぐみ玉へかして申すに、婦人笑うて、なにかくるしく候はん、こなたへ入らせ玉へやとて、みづからむかへて廳房に請じ禮をなして相見ゆ。此婦人脂粉の色をからずしておのづから風流あり。女のわらはに命じて香茶を獻じ、齋飯を設く。三藏ふかく恩を謝し、且つ土地の名と婦人の姓氏を問ひ玉ふ。婦人答て曰く、此處は東印度と申地、妾が姓は賈氏にて候。近年不幸にして夫を失ひ、三人の女ありて只男子は一人もなし。このころ家事の納むべからざるを以て、接脚夫を招き入れんとおもふ折から、長老師弟四人我家に宿り玉ふも奇縁にてや候はん。我々母子の女もまた是四人、未だ曾て人にゆるさず。長老遠く西天に至り、要なきことにくるしめ玉はんより、我家に止りて偕老同穴の因みをむすび、妻よ夫よと見つ見られ給ひ、幾するながくさかえなんは、いかばかりたのしからん。我女の女は眞眞と等け、其次は愛愛と呼び、

末女憐憐とて艶色また風流あり。其上我家水田三百頃、旱田三百頃、果木三百根、牛馬群をなし猪羊數をしらす。莊堡草場、ともに七十餘ヶ所、家内八九年の米穀あり。其外綾羅金銀倉庫に充たり。長老志しを決して還俗し、我家の主人となり給へかして勸るにぞ、三藏是を聞き給ひて恰も孩子の雷に驚き雨に打る、蝦蟆のごとく、呆れ果ておはしけるが、八戒此事を聞きて心神恍惚として忍ぶべからず。三藏の袖を引て、師父先より婦人のさまとて説話し給ふに、何とて一言の答へはなし給はざるや。此時三藏聲を荒らかにして叱て曰く、備も是れ出家人にあらずや。富貴を以て心を動かし美食を見て意を留るは、我從弟にはあらずと宣まふ。婦人聞きて笑うて曰く、出家に何の好處事があるや。三藏の曰く、故人詩あり證とすべし。

- 出家立志本非常
- 身中自有二好陰陽
- 勝似三在家貪二血食
- 推倒從前恩愛堂
- 功完行滿朝朝金闕
- 老來墮落臭皮囊
- 外物不生閑口舌
- 見性明心返二故郷

婦人は是を聞き大きに怒り、這和尚かゝる不禮を云うて、我をあざむく事何ぞ甚しき。再び備徒と説話をせじとて、裏面に入て腰門をとざしたり。八戒此動靜を見てこゝろに三藏をうらみ、師父をはじめ兄弟皆是れ情なきにあらず、世の諺にも和尚は是れ色中の餓鬼なりといへり。誰か今般の美事をきらふ者あらん。備徒好事を都て打破り、燈火もなく茶さへ與ふるものなきは、いかにくるしとはお

もはずや。たとへ備等飢渴するとも自らもとめたる事なればこらへもせん。此馬こそ便なきわざなれ。俄につかれなば明日人を乗することあたふまじ。我馬を引て草を喂ふべじとつぶやきつつ、韃靼を引て出で去りける。行者見て沙悟浄に申けるは、此獸子何處へ行や我跡について窺ひ見るべしとて、身を變じて蜻蛉と化し、八戒がなすありさまを見るに、八戒は馬に草喂んともせず、此家の後門へまはり窺がふに、向の婦人三人の女兒と共に、菊の咲りなる花を看てたはむれりたりしが、三女八戒を見て恥かしげに門内へかくれたり。かの婦人八戒に向ひ、長老いづくへ行き玉ふや。備も師父の執意に引こまれ、食を乞うて西天に行かんとする歟。八戒笑うて曰く、唐僧はこれ天子の勅をうけて經をもとむる人なれば、其君命に違ん事を恐れ、敢て婦人の勅にしたがはず。我はまた是れと異なり、娘吾嘴長く耳大きなを嫌ひ玉はずんば、謹で命にしたがはん。婦人の曰く、備吾言に順がはんとならば、再び師父兄弟にも商量し玉へ。八戒笑うて、師父原來我父にあらず、何ぞ某が身上にあづからん。都て我心のまゝに行はんのみ。爰に於て婦人三人の女と商量せんとして、後門をとぎして内に入れば、八戒もまた馬を引て立歸る。行者この動靜をよく見とやけ、先に歸りて師父と沙悟浄に物がたり、一笑を催す所に忽ち腰門を押しらき、紅燈の光りさつとかややき、かの婦人三人のむすめを携へて出來り、三藏師弟を拜せしむ。其三人の女繚致尋常にあらず、蛾眉翠を畫き粉面春を生じ眞に傾國の色あり。八戒立歸り此美女を見て恰も酔るがごとし。此時行者一手に八戒をとらへ、一

手に婦人を引き、我備徒が後門にて物がたりせしを聞き置きたり。婦人はや／＼女婚を帯て進り玉へとて、推て裏面に突入るれば、八戒は足も起々によろめきつゝ遂に門を扉して入たりけり。

初編卷之九

前章之下

去にても八戒は、かの婦人にいざなはれ、始て内堂に至り、先づ問うて申けるは、婦人いづれの女をもつて我に配せ給ふやと云ふ。婦人曰く、我も此事いまだ決せず。大女に配せなば二女恨むべし。二女に配しなば三女うらむべし。三女に配する時は則ち大女うらみん。是れをいかに計るべきや。八戒の曰く、若しかくのごとくならば三人の女ひとしくわが妻となさんはいかに。婦人の曰く、爾胡説事をいふことなけれ。吾自ら計あり。今三人の女を此所へ呼び來らんに、爾手帕を以て面を蔽ひ、暗拿にとらへたらん女を、爾が妻と定むべし。八戒是を然りとし、手帕を以て臉をおほひ、兩手をひろげ待ちゐたり。時に婦人聲を高くし、我女真々、愛々、憐々、早く來て女婿を定めよと呼はれば、忽ち蘭麝の薰り芬々と吹來り、是や仙女の來迎かとあやまたれ、八戒は心神中天に飛び身しびれ、手足なえて西によろめきては柱をいだき、東に走りては壁に躓り、地に倒れて嗚氣す、なんぢがむすめ皆乖滑てとらへがたし。婦人笑うて曰く、わがむすめ皆謙讓がりて互に爾をまねかず。吾別によきはかりごとあり。三人のむすめ銘々巧に制へたる汗衫あり。此汗衫三ツを爰に捨て置かんに、爾暗に

とりて身に穿なば、其汗衫を制たるむすめをもつて、爾に配すべし。八戒が曰く、此はかりごときはめてよし。我もし衫三個ながら穿得ば、三人のむすめことごとく我妻とすべしとて、再び大手をひろげて探り需るほどに、果して一ツの汗衫に當り、あなうれしとて、身に纏は、忽然として地に倒る。原來是れ汗衫にあらずあらし繩を幾條もかさね、身を引縛つて動く事あたはず。此時東方正に白なんとすれば、三藏師弟三人睡り覺て普く四方を見渡せども、昨夜ありし高堂玉樓一字も見えず。只見る松樹の下に颯々たる風のおとづる、より外に見るべき者もなし。三藏をはじめ師弟三人呆れ果て、我

鬼の爲に欺かれけるよとて、よく見れば松樹の上に帖をかけて八句の頌を記したり。  
 黎山老母 不思議凡  
 南海菩薩 請下山  
 普賢文殊 皆是客  
 化成美女 在林間  
 聖僧澹漠 禪機定  
 八戒貪淫 劣性頑  
 從此洗心 須改過  
 若生三意 慢路途難

三藏是れを讀終て合掌して禮をなし玉ふ。忽ち林の内に聲ありて、師父我を救ひ玉へあなるしと叫ぶほどに、師弟三人かしこに行きて見れば、八戒數條の繩にからみ付け、樹の上へ吊りあげたり。沙悟淨忙ぎ繩を解きたすけ下し、樹の上にかたりし帖を指さし、ことごとく示し教ゆれば、八戒更に慚愧に堪ず香を焚て禮拜し、再び行李を背て供奉しまゐらせ、皆打ちつれて大路にむかひいそぎ給ふ。

萬壽山大仙留三故友

五 莊觀行者竊二人參

ゆきくして萬壽山といへる高山に登り給ふに、山のけしきたいならず、松柏森々と生繁り層巒疊々岨  
 たり。山中に大きな寺あり五莊觀と號す。三藏馬より下て山門に参り給へば、二人の童子立出で禮  
 をなして問うて曰く、長老は大唐より西天に往て、經をもとめ給ふ唐三藏にてはましますや。三藏  
 驚いて曰く、貧僧則ち是なり。仙童いかゞしてこれを知り給へる。二童子曰く、我師は鎮元師混名を  
 與世同君と申す仙人にて候が、前日元始天尊の請待により、上清天彌羅宮におもむき給ふ時、三藏い  
 たり給はゞよろしくもてなしまゐらせよと、我々に分付け給へり。老師先づ入て休足し給へと申けれ  
 ば、三藏大さによろこび、三人の弟子もろとも客殿に入て齋飯を調し喫し給ふ。二人の童子三藏に向  
 ひて曰く、我師長老をもてなしまゐらせなためとて、菓子二枚をとめて置たり。献じまゐらせんと  
 て、房中に入て兩個の果を、丹盤に盛りて三藏の前に持ち出たり。三藏是を見給ふに、生れ得ていま  
 だ三日も過ぎる嬰子なり。三藏大さに驚き、今歳豊かに五穀よく熟したるに、何ぞ淺猿しくも人を吃ふ  
 や。童子の曰く、長老怪しみ給ふことなけれ。是は人參果といふ樹にむすびたる菓なり。はやく嘗め  
 給へとすゝむれど、三藏曾て信じ給はず、豈木の上のみどり子を生ずることあらんやと、座を立て避  
 け玉ふに、二人の童子もせんかたなく、また房中へ持かへり、二人相語て申けるは、此人參果は三千  
 年にして花をひらき、又三千年にして果をむすび、又三千年にして初て熟す。一たび是を喰ふ者は四

萬八千歳の壽を得る、誠に希有の珍果なりといへども、這唐僧かゝる靈果なる事をしらすして吃ふ事  
 なし。いざ汝と我と喰ひ盡さんとて、口音高く吃ふありさまを、八戒壁のこなたにありて、始終のこ  
 さず聞きすまし、忙ぎ行者に向うて申けるは、爾人參果といふこのみを知りたるか。行者の曰く、我  
 其名を聞くといへどもいまだ形を見せず。是を食ふ者は長壽かぎりなしと云ひ傳ふ。今いづくに此  
 果ありや。八戒かの二童子が云ひし事を物語り、爾隱身の法をつかひ、三ツ四ツの果を偷み、我にも  
 あたへ吃はしめよと云ふ。行者聞きて、我此果をぬすみとらんこと何よりも最やすし。我兼て聞く事  
 あり。人參果は金にあひて落ち、木にあうて枯れ、水に逢うて化し、火にあひて焦がれ、土にあうて  
 沈といへり。此果をとるには、金にあらずんば取るべからずとて、暗に房中に入て見るに、二人童子  
 も外に出で臆の上に、二尺ばかりの金撃子をかけたなり。行者是こそ人參果を打ち落す具ならんと、と  
 り下して一手に提げ、後園に走り出て是れを見れば、一株の大樹葉は芭蕉のごとく、其長さ數千尺枝  
 の上に二十餘の人參果顯れ出で、形ちまことの嬰子のごとく、頭をふり手足を動かす。行者樹の枝に  
 上り、かの金撃子を取て敲き落すに、たちまち地中に沈みけり。行者是れを見て其奇なるを感じ、直襪  
 の襟をひらきて三個の果を打おとし、懐にして立かへり、沙悟淨と八戒に分ちあたへ、皆悦んで是れ  
 を喫ふ。一人の童子是れを見て大きに驚き、急ぎ三藏の前に走り來り罵りて申けるは、爾三人の弟  
 子吾師父の秘め置き玉ふ人參果を偷み喰ふ。爾此事を知りたるか。三藏聞て驚て曰く、人參果とは先

に童子賜りたる嬰子にてあらずや。吾徒弟何の爲にかかゝる怪しき果を偷みくらへるや。只今吾これを糺すべしとて大音に三人を呼び玉へば、沙悟淨聞て申けるは、今師父の急に我々を呼び玉ふは、果して人參果の事なるべし。行者の曰く、是れ飲食の小事なり。只我門知らずといはんに、何の事かあるべしとて頓て三藏の前に跑行ける。

鎮元仙起捉二取經僧

孫行者大鬧五莊觀

此三藏三人の徒弟にむかひ、僮們誰か人參果を偷たるや。八戒とりあへず答て曰く、われらさやうのもの曾て知り申さず。行者是れを聞ておぼえず吃々と噴出し笑へば、童子指さしてかの笑ひたる者こそ、人參果を偷みくらへり。行者の曰く、笑顔は我生質なり、僮菓子之失なへるとて、我わらひがほを疑がふことなけれ。三藏の曰く、徒弟皆出家人にあらずや、誠に偷みくらひたらば、わび言して罷べきに、何ぞ僞はりを申ぞや。行者師父の言葉の理あるを聞て、我實を語り申さん。八戒此菓子を吃はんことを望むにより、吾この菓三個を落して三人に分ち喰たり。童子の曰く、爾また僞りを云ふことなけれ、爾四つを偷みて三つを取ると云ふか。八戒是を聞て行者を恨みて曰く、爾我に只一つをあたへ、却て爾は二つを食ひしならん。行者心におもふやうは、此童子もまたにくき奴かな、菓子を三つ四つとりたればとて何ほどの事かあらん。索性此樹を引倒しなきものにしてくれんと、忽ち一

根の毛を抜て行者と變じ、其所に座せしめ本身は人參園に飛び行き、金箍棒を振て枝も葉もことごとく打落し、推山移嶺の神通をつかひ、かの大樹を一推におし倒せば、這人參果のこゝろす地下に沈みて、只一個ものこるものなし。行者心地よしとよろこび、舊の所へ立歸りさあらぬ體にて座したりける。此時二人の童子さゝやきて申けるは、向より三人の者ども一言の答へもなく黙して在るは、或は人參樹高く葉繁きにより、我輩が數へたがへたるも知るべからず、今一度查せば可ならんとて、兩人ひとしく後園に出て是を見れば、おもひもよらず樹は倒に打たふれ、果は一個も見えざれば、二人の童子肝を潰しこれかならず毛臉和尚のしわざなるべし。渠等四人をとらへ置て、師父の歸り玉ふを待て此うらみをはらすべしとて、兩人ひとしく客殿の門を撲的とざし、外面より罵て申けるは、爾等秃賊人參果を偷みくらひ、又仙樹を推倒たるは何のふるまひぞや。其所にありて我師父のかへり玉ふを待べしとて、都て門々に鎖を下し房中に入りける。三藏これを見て深く行者をうらみ、爾ら菓子をぬすみ食ひしさへあるに、なんぞかの樹をおし倒したるや。行者の曰く、師父心を安んじすべて我にまかせ玉へとて、既に日もくれ果ていとくらきころになりぬれば、行者耳の内より金箍棒をとり出し、門上にむかひて一たびまねけば、門々の扉忽ち唳的とひらけり。忙ぎ師父を請うて門を出で、馬にかきのせ八戒沙悟淨後に引そひ、道を急ぎて馳たりける。すでに行程五十餘里を走る所に、一人の行脚出で來り三藏に向ひて申しけるは、長老いづくへ行き給ふや。三藏の曰く、貧僧は東土の者西天



に往て經をもとめ候なり。かの行脚の曰く、長老東より來り給は、貧道が住所萬壽山五莊觀を過て來れるか。行者これを聞きて忙ぎ前にすゝみて答て曰く、我門曾て左やうの所を通り申さず。此時かの行脚行者をはたとにらみ、爾這潑猴我を誰とか思ふ。五莊觀の大仙鎮元師は我なり。爾人參樹を打倒し夜にまぎれて逃れ走る。快く回りにて吾木を返すべし。行者大きに怒り鐵棒を引き出し打てかかる。大仙忽ち本相を顯はし、塵尾をもつて鐵棒をうけとめ、袍ぎの袖をひらき四人の僧と馬ともに引つゝみ、提げて觀中に歸り、徒弟に命じて三藏をはじめ四人の僧を柳の木に縛り付け、龍皮にて作れる七星鞭をとり出し、童子に命じて是を打しむ。童子かの鞭を取て問て曰く、先づ何れの僧を打すべきや。大仙の曰く、唐三藏吾に不遜なり、先づ三藏より打はしむべし。行者是を聞て聲を揚て曰く、先生差ひ給へり。菓子を偷み樹を倒したるはすべて我なり。師父をゆるして先づ我を打も給へ。大仙笑うて、這潑猴却ていふ所に理ありとて、行者が腿を三十鞭うたしめ給ふ。其時行者腿を變じて鐵となし只童子の打に任す。時に日既に西に沈みぬれば、明日再び鞭打べしとてみなく裏面に入りて、其後はさらに人聲なし。三藏は兩眼より涙を流し、爾等さまのわざはひを引出し、我を帶累になしてかゝる罪を受しむ。いかゞして此の所をのがれ出んや。行者曰く、師父かならずうれひ玉ふな。我今救ひ出しまゐらすべしとて、縛り索を心安く脱け出で、三人のいましめをも手ばやく解き、柳の枝四個を折りて索を以て縛り付け、舌を嚙て呪文を唱へ、かの枝に吹かれば忽ち變じて三藏師弟四人

が像と化したりける。行者今は心安しとて西に向かひて走りけり。翌朝大仙再び殿上に立出で童子に命じ、今日は四人とも三十鞭を打べしとて、先づ三藏より打はじめ、八戒沙悟淨を打て行者を打ける時、不思議や今まで在し四人の僧忽ちに變じて柳の枝となりける。大仙是を見て孫悟空實に神通を得たり。我また捉へ來らんと雲に飛のり、須臾の間に追ひ來り、孫行者いづくへ走る。吾人參樹を返すべしと呼はれば、行者八戒沙悟淨三人ひとしくとつてかへし、大仙を中に取りこめ打殺さんとひしめきける。大仙少しも驕がず再び袖を開きて、四僧馬供に引つゝみ觀中に飛び歸り、袖の中より拾ひ出しては索にてからめ、衆仙人に命じて庭前に大鍋を居ゑ、油をたへて孫行者を釜煎にせんと油の煮るを待たり。行者心中におもひけるは、我此頃久しく洗深せず、幸この油にて行水せばこゝろよからんとおもひをりしが、此大仙もさる者なれば、いかなる法をつかひ我をめいわくせんも計りがたし。先づ此油を試て後、我自から洗湯せんと側なる大石を行者と變じ、本身は空中に立て油鍋をのぞきゐたり。已に油焼滾り黒烟り燐々と立上るほどに、童子三四人立よりて行者をかきあげんとするに、其重き事盤石のごとし。終に二十四人の仙人あつまりて、やう／＼にかき上げ、かの油鍋へ打入れけるに、鍋の底忽ちに打ち破れ焼滾りたる油四方に飛散り、傍に在し仙人達臉も手足も焼たれあわてふためきよくよく見れば、行者はなくて一塊の大石火中にあり。大仙これを見て大きに怒り、潑猴我鍋を打ち碎きたるこそ安からね。鍋を改めて唐三藏を煎殺し出氣をなすべしとて、新しき

鍋を取らせ、再び油を焼んとす。行者此體を見て急に空中より飛下り、大仙にむかひ禮をなし、先生怒りを止め玉へ、吾先きに小便急なりし故、若し料理の鍋を穢すまじとて小用に行たるなり。師父をゆるして我を鍋に入れ玉へ。大仙大きに笑ひ、備誠に神通あり、吾人參樹を返しなば、我もまた備と兄弟の約をなさん。行者の曰く、大仙我師父のいましめを免し玉は、我かならず人參樹を活し申さん。茲において大仙先づ三藏を解ゆるし、八戒沙悟淨も共に索を解き、正殿に請じぬれば、三人悦ぶことかぎりなし。三藏行者にむかひ、備いかゞしてかの樹を活さんや。行者曰く、我今東洋海に往て普く三島十洲をめぐり、もろくの仙人に商量して、起死回生の法を求め、かならず此木を醫し申さんと、大仙三藏に三日の暇を乞ひ、筋斗雲に打ち騰り東海さして飛去りける。

初編卷之十

孫行者三島求方

觀世音甘露活樹

扱も行者は筋斗雲に打乗り、東洋大海中蓬萊山に至り、福祿壽の三星に逢て樹を活す方を尋れども、禽獸のたぐひは少しの靈藥にて活すべけれども、人參樹を活すべき方なしと答ふ。是に依て行者身をかへして方丈に往て、東華帝君に見え、又瀛州に至りて九老をたづね、木を活すの方を問へども、いづくも仙樹を醫すべき藥なし。行者遂に南海に飛行き、觀世音に見えて事の子細を物語るに、菩薩聞しめし笑うて宣く、是甚だ安き事なり。吾此淨瓶に入れし甘露水、仙樹を治するにはなほはた驗あり。向に太上老君我と賭して勝たる時、此楊柳を奪ひ丹爐の中へおし入て焦したり。吾其柳をとりて瓶中にさし入れ、甘露水にひたしたるに、忽ち生活して今に青々たり。是をもつておもふに人參樹を活さんこと、何のかたき事あらん。行者大きによろこび、直に觀音の御供して五莊觀に立歸る。大仙をはじめ三藏、八戒、沙悟淨等、菩薩の來り給へるを見て、一齊に出で迎へ謹で禮をなす。行者大仙に向かひて申けるは、吾南海に往て菩薩をたのみまらせ、かの人參樹を活さんとす。はやく用意をな

し給へと云ふ。大仙則ち仙徒仙童に命じ、後園をきよめ菩薩を乞うて人參園に入れまゐらせ、衆人皆皆後に引そひ立入たり。菩薩頓て行者をまねき、渠が手の心に起死回生の符を畫き、瓶中の甘露を以て是をひたし、樹の根に拳をさし入れ給へば、忽一道の清水湧き出たり。菩薩仙童に命じて其水を玉碗にて多くくみ出し、行者、八戒、沙僧等に仰てかの大木を引起させ、玉器の水を楊柳の枝にひたし、樹にむかひて澆ぎ給へば、暫時の内に舊のごとくに生茂り、二十三個人參果枝につらなり、前よりも尙ほあざやかなり。此時童子申けるは、前日行者が人參果を偷みしあとに二十二個残りたるが、今日却て二十三個現れたり。行者是を聞て大きに笑ひ、原來吾只三個を偷めり。一個は誤て地におとし深く地中に沈み入たり。八戒是を以て吾が多く吃へるか疑ひしが、今日はじめて明白なり。大仙其時よろこび給ふこと大かたならず、遂に十個人參果をとりて、菩薩をはじめ三藏師弟をもてなし、已にして菩薩も南海に回り給へば、大仙は孫行者と兄弟の約をなし、此所に五六日滯留し三藏師弟遂に大仙に別れを告げ、西にむかうて立出給ふ。

尸魔三藏唐長老  
聖僧恨逐三美猴王一

玄奘三藏は五莊觀にて人參果を喰ひてより、忽ち仙骨生じ心神爽にして、高山に登る事平地をあゆむがごとし。時に三藏行者に向ひて曰く、我今飢に勞れて進みがたし。備いづかたへも往て少しの齋

飯をもとめ來れ。行者是を領承し雲に飛びのり南の方へ去りにけり。爰に一個の妖怪あり。身變じて容儀妖艶しき美女と化し、手に縁磁の器をとり前面よりあゆみきたり、三藏に向て申けるは、此山は白虎嶺と申、此麓に我家あり。近き頃父母をうしなひ、亡者の爲に一鉢の齋飯を供養せんとす。長老是をうけ給はんや。三藏よろこんでかの器をとりて既に喫はんとし給ふ所に、空中より大音に呼はつて曰く、師父其食吃ひ給ふ事なけれ。三藏驚て是れを見れば、孫行者一參に下り來り、金箍棒を打ち振りてかの美女を只一打に打殺したり。原來此妖怪解尸の法を使ひ、本身は空中に在て女屍をもつて爰に据ゑ置き、孫行者にうたせたり。此時三藏大きにおどろき、備故なくかゝる善人を打殺すは何事ぞや。行者曰く、師父あやしみ給ふこと勿れ。此女子原來妖怪なり。女の屍を以て身を解け、吾鐵棒をのがれたれども、器の中の齋飯を見て其妖怪をしり給へと云ふ。三藏再び驚き、磁器を取て見給ふに、癩蝦長尾蛆の類蠢きゐたり。此時八戒行者がうるはしき女を打殺したるを見て、心に是を恨み進み出て三藏に告て曰く、行者元來人を殺す事を好み候。この女は是れ怪にあらず正しく農家の女なり。器の中に蟲蛆を入たるも、全く行者が法術にて師父の目をくらますものなり。三藏兩徒弟が言を聞て、更に心に決することあたはず、躊躇としてことばなし。この時空中にありける妖怪、再び身を變じて八十餘りの老婆となり、三藏の前へあゆみ來る。行者目を定て此老婆を見るに、是もまた人にあらずして妖怪なり。行者怒て備妖怪精再び來て、吾師父に戯るゝやと云ひも終らず、

鐵棒を擧て老婆を打殺せり。妖怪また解尸の法をつかひ、身を脱して老女の屍を取て倒し置きたり。三藏おどろき玉ふこといはんかたなく、行者を責て宣ひけるは、爾何ぞ人を殺す事かくのごとく甚しきや。八戒また進んで曰く、此老婆は果して先の女の母なるべし。行者罪なき人を殺してたのしむは原來行者の生質なり。行者是を聞て怒て曰く、爾猥子猥りに言を發すること勿れ。向の女は年紀わづかに十七八、今の老婆は八十有餘、何ぞ六十に餘りて子を生んや。時に妖怪また一個の老翁と化し、崖の下路をとぼくとあゆみ來る。行者又是を見るに同く已前の妖精なり。大きに怒て口中に咒語を念へ、土地の山神を呼出し申ける。此妖怪已に三度まで來りて吾師父をたぶらかす。汝等空中に在て妖精を走らしむることなかれ。衆神領承し空中にありて妖精を圍み住む。孫行者今は心安しとして鐵棒を振うて、かの老翁を一討に打殺せば、一陣の靈光と化し四方に散じて飛び失せたり。行者鐵棒突て三藏に向て曰く、師父今こそ妖精を實に打殺せり、ちかよりにて見玉へと云ふ。三藏いよ／＼おどろき馬をよせて見玉ふに、一堆の骷體地に倒れたり。三藏行者に問て曰く、是はそも／＼何者ぞや。行者の曰く、渠原來倒れ死したる者の靈魂、此の所に集りて妖をなす。此吾に打れて本相をあらはしたり。八戒かさねて申けるは、師父行者の申ことを信じ玉ふな。渠三たび人を打殺しぬれど、師父の緊縮呪を唱へて責め玉ふことを恐れ、法術を以て屍をかくし骷體となし、師父の眼を掩ふものなり。三藏此八戒のことは信じ、行者がふるまひを恨み叱て曰く、爾今に至て兇性を改めず、豈我徒弟とな

りて西天に至り得んや。はやく故郷へ歸り去るべし。行者の曰く、吾妖精を殺して師父の害を除きまゐらすに、一個の猥子が申ことを信じ、我を逐ひ玉ふは何事ぞや。抑我兩界山を救ひ出されてよりに來、古洞を穿ち深林に入り、千辛萬苦して妖魔を除きしも、畢竟鳥盡て弓藏れ兎死して狗烹る、と云ふ世の諺もおもひ合されよといふ。三藏行者が言を聞て益腦怒を發し、手づから貶書を寫して行者にあたへ、爾等々云ふことを止よ。我再び爾を以て徒弟となさじと、西に向かひて立ち出で玉へば、行者今はせんかたなく、沙悟淨に向て申ける。是より往向もし妖精ありて師父を捉らんとせば、爾聲を發して孫悟空といへる大徒弟あり。師父をあやまらば忽ち爾等を罪すべしと呼はるべし。千禽萬獸我名を聞かば、かならず駭き立さるべしと、云ひ終て筋斗雲に打のり、華果山へ立かへりぬ。

華果山群猴聚義  
黑松林唐僧逢魔

孫行者此時東洋大海を過て、遂に華果山にかへり見れば、山中すべて荒すさみ、峯倒れ崖崩れ、むかし見し山とも覺えず、暫くあきれてたゝすむ處に、坡の陰より七八個の小猿走り出で、大聖歸り玉へりとして我先きに禮をなす。行者問て曰く、我暫く歸らざる内に何としてかく山中の荒はてたるぞ。小猿泣て申けるは、近來大勢の獵人此山に入て我々眷族を獵り取り、或は煎て是を吃ひ、或は跳圍せてなぐさみとなし、敢て一個の猿も頭をさし出すものなし。大聖憐みを垂れて是れをすくひ玉へ。行

者聞て大きに怒り、備心安くおもふべし。吾此獵人を塵にして、爾們が仇をむくふべしとて山の  
上に多くの碎石を積置き、獵人の來るを待むたり。時に南の方より數千人の獵師鷹を居る、犬を走ら  
せ鑼鼓を鳴し、華果山に臨んで押よせたり。悟空是を見て山の嶺に立あらはれ、咒を唱へて巽の方に  
向かひ、一度氣を吐下すに忽ち狂風吹起り、那積貯はへし碎石雨あられとび散て、獵人を討ほど  
に或は頭を討れ手足を損じ、死傷の者數を知らず散り々に成りて逃失たり。悟空左もあらんと大き  
に笑ひ、水簾洞の前に一個の大旗を立て、十四個の大字を寫す。其書に曰く、

重修華果山復整水簾洞齊天大聖

さるほどに玄奘三藏は、遂に心猿を放ち意馬に鞭うち、西の方白虎嶺を過ぎけるに、一個の松の林に  
入たり。爰にて三藏また腹中飢に及び、八戒をして齋飯をもとめしむ。八戒釘鉞を提げ西に向ひて十  
餘里を馳せけるに、いまだ一軒の家もなし。草茫茫と生茂更に人倫絶たる荒野なれば、身體勞れかの  
草窠に這入て、萬事放下おもふ儘睡りける。さるにても三藏は松林の中に在て、八戒を待ともかへ  
らす。沙僧に向ひて議し給ふは、八戒原是馱子何れの處へ行たるを知るべからず。備行きて引つれ  
來れ。沙僧命を受て寶杖をたづさへ、同じく西に向うて走り去りぬ。三藏一人松林に座して待佗給  
ふに、忽ち南の方にあたつて一座の寶塔あり。三藏心におもひ給ふは、我東土を出て西に至るに、途  
に寺院廟塔あらば、佛を拜し地を拂はんと誓をなせり。兩徒弟の歸る間に、此塔を拜まんとて行李と

馬を其處に繋ぎ置き、かの塔門に入て見れば、石床の上に臉青く猫のごとき牙生たる妖魔よく寐入り  
てありければ、三藏大きに驚き身を轉して逃給ふを、那妖魔目を開らき矢庭に來りて引とらへ、備  
何國より來れる僧なるやと尋けるに、三藏大きに恐れ謹んで申て曰く、貧僧は東土唐國の者天子の勅  
を蒙り、西天に至て經をもとむるものなり。此寶塔をはるかに見て拜せんとて參りたり。妖魔の曰く、  
備同行の者ありや。三藏の曰く、徒弟二人馬と行李は都て松林の内に入り。妖魔大きによろこび、小  
妖を召して三藏を柱に縛付させ、渠が徒弟二人馬と共に我食物にあたへ來れり。門を閉てかの徒弟が  
爰に來れるを待、一連に喫ひ盡さんとてきびしく門を扉し、再び石上に睡れりける。此時沙悟淨は十  
里計りも進み行くに、八戒が在所を見ず。いづくへか行たると岡に上りのぞみ見れば、叢の中に麝の  
音す。沙悟淨あやしみ草を開きて是を見れば、かの八戒此中に打臥て現なく寢入たり。沙悟淨心怒り  
耳聾を擱て引起し、汝馱子師父の飢え給ふもかへり見ず、爰に在て眠りぬるやと引立て舊の松林へ  
かへり見れば、馬と行李は在て師父は見えず。沙悟淨大きにおどろき、師父ははや妖魔の爲に拿れ給  
へり。皆是備が馱子より事發れり。はやく行衛をたづぬべしとて、馬を牽て林を出で南の方を見るに、  
一個の寶塔かしこに在り。八戒わらうて備みだりに人を罵ることなかれ、師父は必ず此塔下に至り佛  
像を拜し給ふならんとて、二人走りて塔門に至り見れば、門の扉緊しく閉ち門上に碗子山波月洞とい  
ふ六字を鐫たり。兩人の徒弟あら、かに門を叩き、吾師父をかへせくと叫びけるに、かの妖魔太刀

を提げ門をひらきて躍り出で、八戒沙悟淨兩人と追つかへしつ戦て勝負の色いまだ見えす。

脱難江流來國土  
承恩八戒轉山林

此時三藏は洞中に縛められ、涙落ること雨の如し。時に一人の美女洞の奥より出できたり、三藏を見て共に涙をながし、問て曰く、長老は是れ何人ぞや。三藏答て曰く、吾は大唐より西天に至り經を需むる者なり。備事を尋るに及ばず殺さんと欲せばやく殺すべし。かの美女の曰く、我は人を喰ふ妖魔にはあらず。舊我家は爰を去る事三百餘里、寶象國といふ、國王は則ち我爺々なり。我不幸にして十三年前此妖魔のためにとらへられ、夫婦の交りをなし、一女一男を生てつらき命をながらへ侍る。吾今一個の計を設けて、長老の命をすくひまゐらすべき間、我寶象國へ書を持ち行き、吾此所に在る事を父母に告げて給はり候得とて、いそがしげに書とりしたため、三藏に附屬し繩を解て三藏をゆるしければ、三藏夢の心地して深く活命の恩を謝し、かの書はかならず備の父爺に見せまゐらせ、備つゝがなきをも語るべし。扱ていかにして此處をのがれ出候はんと問給へば、かの美女三藏を引て後門に至り、都て我に打まかせ、しばらく爰にしのおはせとて、身を回して前門に立ち出で、黃袍郎しばらく戦ひを止て爰に來り給へと呼はれば、此時妖魔八戒沙悟淨と雲中に在て戦ひけるが、渾家の聲を聞て兩人を打ち捨て洞の中へ飛び來り、備何の急事有てか我戦かひを止めたるぞや。妻の曰く、

吾今不思議の夢を見たり。其夢に依て郎君に説話あり。我昔幼稚時より心に一つの願を立て、賢明丈夫を得て一生を任せなば、僧に對して一の善事を修んと誓たり。さればこそ郎君のごときの丈夫を得て常に樂めり。吾今に至りて僧に施す誓をわすれるたり。然るに只今夢の内に一個の金甲神將來たり給ひ、誓ひに背く罪を責め給ひ、既に劍をもつて斬るゝと見て夢は覺たり。しかるにはからずも一人の和尚縛めを受けてかしこにあり。是れ將に妾が誓を満すべき期至れり。郎君妾を愛する事真ならば、かの僧のいましめを解免し歸らしめ玉は、吾が甘心せること甚しからん。かの妖魔笑うて曰く、我何の時か備が申すことにたがひたる事やある。善となく悪となく備が願ふほどのこと、すべて我これを聽ん。唐僧をゆるさんと思は、備が心にまかすべし。女大きによろこび、後門に走り行き三藏に向ひて曰く、長老、備が命は既に救ひ得たり。我名は寶象國王第三の公主百花羞と申す間、今の書かならず傳へて給はれとて、終に後門を開きて三藏を走らしむ。前門には妖魔大聲を聞て呼はりけるは、備、兩人の僧我あへて恐るゝにあらずといへども、渾家の命乞ひによりて唐僧と俱にゆるし歸らしむる間、後門に至りて師父をたづねよと云ひ終て洞門をさしたり。八戒沙悟淨を聞て大によろこび、馬を牽て洞の後に至り、見れば果て荆棘の中より三藏一人走り出で、師徒三人互に恙なきを悦び、忙ぎ師父を馬にかきのせ、道をいそぎて馳たりける。行くこと三日を過て寶象國の王城に至り、かの公主百花羞が書をさへげて朝廷に至りければ、國王三藏師徒を金階の下にまねき、半ば悦び開き見る。

其書に曰く、

不孝女百花羞頓首再拜。稟父王萬歲殿前。暨三宮母后宮下。拙女幸托三坤宮。感激劬勞。不能盡孝。乃於二十三年前。中秋夜賞玩月花。不期一陣狂風閃出。個金睛藍面魔王。將女擒住。駕雲攝至深山。被妖強占。爲妾勉捱十三年。產下兩兒。盡是妖種。論比敗壞人倫。不當傳書玷辱。但恐女死之後。不見二分。明適遇一唐僧。亦被一妖怪擒住。是女設計放脫。特托寄此片楮。以表寸心。伏望父王垂憫。速遣上將。至碗子山波月洞。捉獲黃袍怪。救女回朝。深爲感恩。幸草早闕。恭泣陳不一。

國王讀み終て聲を放て大きに歎き、文武の百官をまねきあつめ、誰か能く波月洞に至りて這妖精を捉へん。群臣皆妖怪が通力を聞て一言の答るものなし。國王三藏をちかくまねき申けるは、我向に聞く、長老は大唐より西天に至り、經をもとむる人なりとや。ねがはくは法力を以て妖魔を降し、公主をすくひ給は、深く此恩を感すべし。三藏之を聞て答て曰く、貧僧は只佛を念ずる事を知りて曾て法術ある事なし。いかんぞよく妖精を降得んや。國王の曰く、長老魔を降す術なくんば、西天に至ること能ふまじ。是より西方に至て深山幽谷數かぎりなく、悉妖魔の住没なり。いかゞして佛を拜し候はん。三藏の曰く、我二人の徒弟あり頗る法術ありて我を守護し、幾度も危ふき難を免かれたり。國王大き

によるこび、八戒沙悟淨をちかくめしよせ、是を見るに尋常の人間にあらず。國王先づ問て曰く、二位の長老よく妖魔を降す法術ありや。八戒聲に應じて答て曰く、我よく魔を降す術を知れり。爰において國王試に其變化を見ん事を乞ふ。八戒頓て口中に咒文をとなへ、一度身を動かせば其身の長八九丈、左右の群臣驚くこと大方ならず。沙悟淨もまた身をくるはし、同じく春高き人と變じ、兩人互に相謂て曰く、いざ是より波月洞にいたり、かの妖精を拿へ來らんと、云ふかとおもへば忽ち一羣の雲を起し、八戒は釘鉈を提げ沙悟淨は寶杖を携へ、雲にまたがり空中を一飛に波月洞へと駆け行きける。

二編叙

教亦多術矣。詭正之所施。唯問其歸旨如何而已。周之荒唐。聃之虛無。翁受敷施。豈無世教於其間哉。瞿曇氏之道。有觀於此也。其於化雖導民設黜陟於幽明。寓懲勸乎因果。縱雖至蠢愚之人。聞者愔々辭順。見者兢兢砭膽。不覺優然引入其封域焉。西遊記初編譯書之行于世也久矣。書肆惜其無繼。乞諸友人山子士信。士信飲酌之間。游戲翰墨。遂成全稿。今將授梓而問諸世焉。嗚呼。澆漓之季。人性之變。機巧欺詐。何啻意馬心猿之無羈。繼之比哉。世之觀此編者。鞭箠銜轡。無逸其押。歷乎昇平三百載。雨露膏澤之所洩。將收濟々於此編者。是謂之譯者之志也焉。

文政丁亥秋八月醉後題于浪華馳濠第二街之客居

遠霞陳人

二編卷之一

前編之下回

前に説しごとく、唐の玄奘法師は唐帝の綸命を得て西域に到り、佛を拜し經を求めんと、悟空、悟能、悟淨の三徒弟を従へ、種々の魔障を免れ、椀子山波月洞に到りて、又々妖怪の爲に細縛られ、洞の中に在りて既に危かりけるに、不意妖怪が妻百花羞が好意にて萬死を免れ、八戒悟淨と俱に寶象國にいたり、國王に謁して百花羞が文牒を奉りければ、國王大いに驚き、三藏の徒弟悟淨八戒に公主を救ひ歸らし、事を頼けるに、二人領掌して等く身を長大に變じ、雲に乗じて須臾に椀子山波月洞に至り、雲端を下りて窺ふに、洞門嚴しく閉て物音せざれば、八戒先づ釘鉞を揚て洞門に向ひ、力に任せて丁々と打たりしかば、那石門遂に破れ碎たり。此物音に騒然て小妖急に跑入妖怪に報じけるにぞ、妖怪勃然として一口の鋼刀を拵て走り出で、聲を厲して曰く、汝等我好意を以て師弟三人を免しぬるに、今又きたつて門を破れるは、如何なる無禮ぞやと叱ける。八戒嘲咲ひ、汝寶象國の公主を奪捕て妻となすよし、我徒國王の頼に因て汝を打殺し、公主を奪返さん爲きたれりと呼はりければ、妖怪聞も敢ず躍上て惡發を起し、一言の答もせず鋼刀を弄して斬てかゝる。八戒悟淨心得たりと、釘鉞寶杖を揮て双方



よりはさみ撃んと戦ふこと三四十合、されども妖怪が勇力少しもたゆまず、右に打左に打秘術を盡して闘にぞ、さしもの二人遂に敵する事能はず。茲において八戒悟浄を賺し、吾類に出恭したくて戦ひ意に任せず、汝一人且く他と闘へ、頓てきたりて力を添んと言ひ捨て、終に其場を逃去藤羅の茂みに隠れて、前後もしらず寐たりけり。悟浄はかゝるべしともしらず、只一人妖怪と戦ひしが、終に戦ひ負て妖怪が爲に擒れければ、妖怪頓て是を搔抓み、洞の中に回りて緊く細めおきたりけり。

邪魔 意馬 意馬 意馬

邪魔 意馬 意馬

斯て妖怪心中におもひけるは、彼唐僧我情をもつて放ち回せし恩恵を思はず、却て徒弟をして我を捉へ妻を奪はんとするは、言語に絶せし悪僧なり。是は必ず我妻彼をたのみて父母に書を贈り、此里を逃れんとするにこそ、只悪むべきは賤婦が不貞心なり、いで抓殺してくれんすと、忽ち兇性を發して洞の奥へ跑入、妻が梳て居ける後より鬚を抓で曳倒し、眼を怒らし牙を咬み罵けるは、卿狗心の賤婦我多年の鍾愛をも顧す、父母の事のみ慕ひ、唐僧に書信を央み夢に託て我を欺き、渠等を助け回せしは何事ぞやと責問にぞ、百花羞頗る驚くと雖、尙さあらぬ面色にて曰けるは、郎君何ゆゑ如此分離のある事を曰ぞや。妾何ぞ君を疎じ父母に書信すべき。是は必ず別に子細あらん。先づ心を愼てよく思惟し給へと推宥む。妖怪尙も怒憤り、汝尙強嘴いふ事勿れ我儘なる證見あり。然ありても

尙争ふや。百花羞が曰く、證見とは何なる物にや。妖怪が曰く、即ち那唐僧の徒弟八戒悟浄、前にきたつて石門を破り我を捉んとす。我忽ち沙悟浄を擒にして今那處に細おけり。汝を彼が面前に曳行、一聲を問は虚實分明ならんとて、頓て妻を捉て沙悟浄を繋おきたる所へ駈り行く。百花羞心中に想けるは、那唐僧道人に勝たればこそ、西天へ行の擇にも當りたれ。されば妾が活命の恩を感じて、今擒となりぬとも、妾が一命に及ぶべき事を明白にはよも不言。よしさもなくとも生死を天に任せんと、胸を定めて提行れけり。時に妖精沙僧が前へ行て妻を押倒し、鋼刀を抜て其胸にさし付け大喝して曰く、汝沙悟浄八戒と俱に再度きたつて不禮をなすは、此賤婦が父の許へ書を送りしにより、汝等二人を央み我を捉しめんと計るならん。さもあらば明白にいへ、汝が一命を助け歸らしめんとなじり問ふ。沙悟浄細られながら、妖怪が兇惡の心を起し、公主を殺さんとするを見て、心弱くて協まじと聲を厲まし、汝輕忽に手を下すことを止よ。汝が妻に書のことばかりたる覺なし、我徒再度きたつて汝を捉んとする故は、汝嚮に我師父を捉へし時、師父洞中に有て公主の模様を見知り、寶象國に到り國王に見ゆるに及んで側を見れば、その婦人の形を畫き掛て有き。依て師父其意趣を尋しに、國王始終を語り、路上もし此妾の女子を見ざりしやと問しゆる、師父則ち此處にて見たるよしを告げられしかば、國王我徒を央み、汝を捉へ公主を宮中へ迎んとせしのみ。汝我を殺すならば速に殺せ、罪なき公主を殺す事勿れといふにぞ、妖怪漸に狐疑を晴し、刀を納て公主を抱き起し、我過て汝を疑ひ

多く驚かしめたり。必ず怨ずる事勿れとて、手を携へて席上へ返り、酒宴を設て陪禮し、扱て半酣にいたつて妻を安撫て曰く、汝は家に在て二人の小兒を守り、又那沙悟淨を逃す事勿れ、我寶象國に行て汝が父に見ゆべしと、忽ち身を動かすよと見えけるが、俊秀なる郎君と變じたり。百花羞其袂をひかへ、郎君行て父王に見えば、かならず酒宴を設て饗し玉はん。郎酒を飲とも酔て本相を顯し玉ふ事なかれと諫めければ、妖怪曉得たりとて、頓て雲に打乘て寶象國に到り著き、朝門の外に停立て、黃門官に對して云ふやう、某は國王第三の駙馬なり、聖上に見え奉らんと來れり。願くは斯と奏したまへといふ。黃門官怪しみながら内に入て奏しければ、國王沈思し朕二人の駙馬あり。今第三の駙馬とは誰ならんと問ふに、左右奏すらく、察するに陛下第三の公主は先年妖怪にとられ玉ひ、其在所知ざりしが、頃日唐僧に託し書を寄玉ふにより、初て碗子山に居玉ふ事を知る。今三駙馬と申は公主をとりたる妖怪にや候べき。國王色を失ひ、他既に妖怪たらば宣入て何かせん。早く追回せよと恐驚くを、三藏制して曰く、他雲に騰り霧に駕る。今追歸し玉ふとも、きたらんと思は必す來り候べし。不如宣入て見え玉はば、口舌を免かれ玉はんと。茲に於て國王諫に順ひ宣入よと命じければ、頓て妖怪金階の下に入來り、舞踏して山呼の禮をなしぬ。君臣是を見るに其人品美麗俊秀なれば、是は妖怪にあらず天晴棟梁の才、世を濟ふ器なりと感歎して止す。國王怖畏の心を悦びにかへ、問て曰く、汝は是れ何の公主の駙馬ぞや。妖怪が曰く、臣は是れ城東碗子山の麓、破月庄の民に候。幼なき時よ

り弓馬を嗜み、獵をなして爲生とし候が、十三年以前山間に在て獵物を待候ひしに、一頭の斑虎一人の女子を駄山坡を走り來て候ゆゑ、一箭を引て射しに、其箭斑虎にあたり女子を捨て、箭をおひながら山中へ逃去ぬ。臣即ち女子を勞はりて家に歸り、湯藥を以て終に生に回し、何國の人ぞと問ふに公主なる事を不言、只民家の女なるよし答しにより、遂に配合して妻となし、十餘年の月日を送り候處、頃日初て公主なる事を聞き、今日きたつて罪を謝し候。又彼公主を取し斑虎は山中に隠て痕を養ひ、成精て能變化し、専ら人を感し害し候。臣或人の語を聞候に、大唐より西天に赴き經をとる僧、那虎に害せらる。虎唐僧の文牒を得て、己れ唐僧と變じ人を感はし害せんとするよし、今大王の殿上を見候に、綉墩の上に座したるは、是十三年以前公主を取たる斑虎なり。大王何ぞ察し給はざると言を巧みに奏しければ、王はなはた訝り、汝何を以て是を知るやと問ふ。妖怪が曰く、臣常に猛虎を狩獵する事を業とす。因て那が變化する法を悉く知る。疑ひ給は、他が本相を顯はし見せ奉らんと、一盞の水を取寄唐僧に向ひて、黒眼定身の法をつかひ、一口の水を含で唐僧に吹かけしかば、唐僧果して妖怪が爲に咒はれ、一隻の斑虎とぞなりにける。君臣大に驚き後殿へ逃走り、急に武臣に命して、數百の兵器をもて秋撞しむると雖も、護法の諸神唐僧の身を守りて佑により、多くの兵器傷る事能はず。官軍騒ぎわめきて左右して天晚に至て、漸に虎を活提鐵繩を以て是を細め鐵籠に入れ置けり。茲に於て國王駙馬が功を賞し、光祿寺に於て大に筵宴を排き饗應る。斯て衆臣朝を退きて後妖精銀安

殿に進み入十八人の官娥をえらび歌舞吹彈を奏させ、飽まで酒肉を喫樂みけるが、二更の頃にいたり大に沈酔し、堪かねて身を跳らせ、己が本相を現し、側に琵琶を彈居たる官娥を掴み一口に咬碎きぬ。残の官娥此體を見て肝を消魂を失ひ、皆散々に逃ながら、あしすくみて走りたければ、國王に奏する事も能はず、丹墀のかけに蹲踞戦々兢々てぞ居たりける。時に唐僧の白馬金亭驛に繋がれて在ながら、唐僧妖怪に咒はれて虎となりたるを聞て大いに駭き歎息し、大師兄孫悟空あらば此難に遭給ふまじきを、師父八戒が讒を信じて孫行者を追ひ、かゝる口舌に遭給ふ薄情さよ。今八戒悟浄が音信もなし。よし／＼我此妖怪を打殺し唐僧を助んと、忽ち韃繩を絶斷舊より西海小龍の變身なれば、本相を表して龍となり、黒雲に駕て空中より城内を臨み見るに、銀安殿に那妖怪上面に座して、自掛咬死したる官娥の手足血流て淋々たるを控過殺となし、恣に受用する體なれば、小龍心に計を案じ出し、身を揺して一人の官娥と變じ、下氣的に歩みたりて妖怪が前に禮をなして云ひけるは、駙馬相公賤妾が一命を助け給へ、一言を聞え奉らん。相公此大殿に獨坐して自掛給ふ恐らくは興なからん。賤妾酌をとりて相公の陪をなし奉らん。妖怪甚はだ悦び、小龍に酌をとらせて、又多く飲屠をくらひながら曰く、汝定て唱をうたはめ、我ために一曲をうたへと望む。小龍聲に應じて咬韻の小曲をうたふ。妖怪甚はだ感賞し、汝斯まで堪能なり、舞をも知つらん我爲に一奏せよ。小龍微笑し、賤妾は舞をたしめり。されと素手にて舞を奏候ては興うすくや侍らん。願くは相公の腰間な

る寶刀を借給へと乞ふ。妖怪好々と云て寶刀を解て與へけるにぞ、小龍寶刀を抜放し心中には妖怪が綻間を伺ひながら、上三下四左右六花刀法を奏けるに、刀光空に閃めきて白雪の飛に異ならず。妖怪其妙手を感歎し眼を咤て見とれ居けり。小龍他が餘念なきに乘じ、飛上さま妖怪が頭を望で一刀を斬下すに、妖怪早く身を側て躲過し、一根の滿堂紅を取て架住けり。此時小龍も本相を現はし、銀安殿を跳り下り互に雲に飛上り、空中に有て戦こと二三十合、されども小龍終に敵し得ず、妖怪が面を望て寶刀を投付るに、妖怪片手にて之を搔抓み、片手には滿堂紅を振上て小龍を丁と打つ。小龍是を躲んとし、腿の上を強く撃れしかは、急に雲中より逃下り、御水河に潜り入て身を潜めたり。妖怪趕きたりて尋ぬれども其形を見ざれば、又銀安殿に回り登り屠を喰ひ酒を飲み、大いに亂酔して前後もしらず打臥けり。扱て那小龍は半時ばかり在て水を出で、竊に金亭驛にかへり依舊白馬と變じて殿にぞ伏居たりける。時に八戒は沙悟浄を欺り叢に入て眠りけるが、三更の時分にふと眼を覺して、大いに周章雲に打乗て驛亭に回り、師父を尋れども見えず、只白馬のみ在り。八戒つらくと見て訝り、此馬只茲に繋ぎおきしのみなるに、全身汗に浸りしかも腿の上に痕有こそ不審なれ。察するに歹人きたりて師父を劫し、馬をも打壞ひしならめと呔けるにぞ、白馬早く八戒なる事を知り、忽ち人語をなし、師兄何ぞ歸ことの遅きやと呼はれば、八戒は白馬の人語を聞て仰天し、地に跌仆て速しく爬起て逃んとするを、白馬他が皂衣を咬住て曳戻し、師兄我を怖るゝ事なかれ。早く師父を救の謀を廻

らせよとて、有し事どもを説聞せければ、八戒頭をなで我徒が武藝かれに及ばず、逆も師父を救ふ事能はじ、不如是より散火せんにはとて又逃行んとす。白馬また衣を咬とめ、師兄何ぞかく臆病なる、那妖怪を殺し師を救はんものは大師兄孫行者なり。早く華果山に至り大師兄を請じきたれ、但し今師父の難に遭玉ふ事を語らず。只師父一朝の怒に他を放逐せしを悔み、常々戀々として墓玉ふと欺き吐きたれ。他きたつて師父の難を見れば、かならず妖怪を除き師父を救べしと諫厲しければ、八戒終に諾し身を跳らして雲に上り華果山をさしてぞ飛行ける。

猪八戒義釋三猴王

孫行者智降三妖一

斯て八戒は東洋大海を過て華果山に至り見るに、孫悟空石崖の上に座し、數千の猴子を左右に陳て酒宴をなし居たり。八戒懼るゝ其邊に躡躡ければ、孫悟空早く見咎め、汝は是れ猪八戒ならずや。汝師父を護りて西天には行ず、却て茲にきたれるは何事ぞ。八戒が曰く、師兄の疑ひ尤なり。我茲にきたる事別事ならず、師父汝を恨て放逐せし後、頻に汝が事を思て前事を悔み、今我に命じて汝を請玉ふ處なり。願くは師兄師父が一旦の過を念とせず、きたつて師父に事は、我々も大幸ならんと言を巧にして言ければ、悟空大いに怒て八戒を叱り、汝虚妄を以て我を欺とも何ぞ信すべき。速に其實を申せと責問ふ。八戒大いに驚き、師兄かならず疑ひたまふな。我敢て偽を不言といふ。悟空益怒り、汝

何ぞかく我を欺くや。我此左の耳には上三十三天の人語迄も聞え、又此右の耳には下金輪水際八大地獄に至り、十代閻王判官等と算帖する迄も聞るなり。今師父難に逢て救に術なく、我を賺して師父を救はせんとの事ならめ。汝明白に告すんば忽ち我鐵棍を以て、二十根打べしと怕しければ、八戒大いに周章、師兄かならず短慮をいだし給ふな。我實を告んとて、波月洞の妖怪が事を説事一遍す。悟空嘲わらひ、さも有んさも有べし。汝夯貨前に吾別に臨み、若し路上妖魔有て師父を捉へ困しめば、大徒弟孫悟空と云者ありと告げよ、さらば西方の怪邪敢て犯すこと有まじと教たるに、何とてさは言ざるや。八戒是を聞心におもひけるは、他をきたらしむるには、激せしむるにしくべからずと思惟して申しけるは、師兄強て問こと勿れ、小弟教のごとく言聞せしに、妖怪大いに笑ひ、他何者なれば汝等斯まで大話するや。若し那瘦猿我面前にきたらば、他が皮を剝他が筋を抽油を以て蒸吃はんといへり。依て他極て師兄に勝る神通あるやと疑て、如何ともする事能はず。只きたつて師兄を請のみ。悟空八戒に厲されて暴燥亂跳、他何者なれば吾を侮り斯無禮をいふや。よし、汝と同じく行て他を捉へ、五體を萬段に打ち碎き、悪言の仇を酬べしと叫び、即時に錦の直褌を穿ち、虎の皮の裙を束ね、鐵棍をとつて衆猿に辭し別れ、八戒と俱に雲に乗て東洋大海を過り、逕に碗子山の金塔の前にいたる。八戒指ていふ。此處即ち黃袍怪が家なり。他は今寶象國にあり。おもふに悟淨いまだ他が家に捉られて在ん。悟空聞て、等我見きたらんとて雲端を下り、洞門に至り見るに、二人の小兒頑要たり。

一人は十歳計一人は八歳ばかりなり。悟空直に二児が頭を掴み走出るにぞ、小兒は恐れて哭わめく、洞口に在し小怪急に走入て百花羞に斯と報す。公主驚き周章洞門に走り出で、聲を上げて悟空を呼び、汝何者なれば我兒を捉行ぞ。其兒の父は甚だ強勇の者なれば、少しにても着錯あらば、汝に患憂を見すべきぞ、とく返せよと呼はりけり。悟空聞て我は是れ唐僧の大徒弟孫悟空といふ者なり。我法弟沙悟淨汝が洞の中に捉へ在よし、他を放し出さば我又二人の孩兒を汝に還さん。公主是を聞て急に内に入、沙和尚が細を解て曰く、先には妾が父母に書を贈りしより一命も危かりしに、長老言紛して妾が性命を救ひたり。依て妾長老を放し饒さんとおもふ處、期せずして、今洞外に和尚の師兄孫悟空きたりて、汝を逃すべき事を請ふ、長老早く走去て妾が二人の兒を返らしめよと云。悟淨一度孫悟空の三字を聞て大いに悦び、公主に謝して洞門を走り出で、悟空と八戒を見て禮をなし、昨日の事體を細説す。悟空が曰く、汝二人此孩兒を抱き寶象國に到り、突殺して玉階の前へ投落し、且つ黃袍怪が兒なるよしをいへ。他怪かならず惡發て此里へ回りきたらん。吾茲に待受て他を手捉にせん。二人聞て領諾し、遂に二兒をとらへ雲を起して去しかば、公主泣て曰く、汝唐僧の徒弟といへども甚だ信義なし。先に沙和尚を放し出さば、二人の兒を回さんと云ながら、今却て其事なきは如何。悟空笑て曰く、公主我を怨事なかれ。汝妖怪が事をおもひて、汝が父母をおもはざるは何ぞや。公主是を聞て涕泣し、妾豈父母をおもはざらん。只此妖精妾を騙し捉へしに因て此里に在のみ。妾かゝる妖怪の

配んより、自害せんとはおもへども、父母を今一度見ずして死せんも悲しく、殘喘を延べ古郷へ歸る日待つ事多年なりと、云ひ終て泣伏 泪泉のごとし。悟空が曰く公主必ず傷く悲まされ。委しくは猪八戒に聞きとれり。我汝が爲に那妖精をとらへ、朝に回て双親に見えしめん。公主が曰く、汝如何なる手段を以て他を促すべきぞ。悟空が曰く、汝何處にも身を深く廻避て我消息を待て、吾別に手段あり。公主是に順ひ廻避しかば、悟空は忽ち公主の模様へ變じ、洞の中に躲居て専ら那妖精を待居たり。却説八戒と悟淨は二人の孩兒をとらへ、寶象國に至り二兒を等く刺殺して玉階の下に投落しぬ。滿朝の文武是を見て仰天し、天上より二兒の尸を降せりと驚き騒ぐ。八戒悟淨雲中より此體を見て、是は公主を捉去し黃袍怪が孩兒なり。我徒二人捉きたりて殺捨たりと高聲に呼はりけり。此時妖怪は銀安殿にあつて、未だ宿酒醒す打臥て在けるが、黃袍怪が孩兒を殺捨たりと聞て大いに驚き、起て雲中を見れば、悟淨八戒嗚喝居たり。他は既に我洞中に綁りおきたるに、如何して遁出しや。又我兒何ゆゑ促られたるやいと覺束なし。いで我家に歸りて子細をたづね、再びきたりて説話するとも遅からじと、雲に乗て山に歸る。此時國王は夜來の事を委しく聞、始て三騾馬は妖怪なる事を知り、多の官人に命じ牢中の虎と二人の僧をぞ守らせる。時に黃袍怪は回りて洞中へ入きたりければ、悟空は公主の姿に變じ待居し事故、他を見て胸を打て大いに哭す。妖精是を悟空とはしらす立寄て棲起し、我渾家何ゆゑ泣ぞと問ふ。悟空泪を汪汪とながして曰く、郎君何とて早く回來給はざる。今早八戒と

やらいふ僧きたりて、沙和尚を劫し去、又二人の孩兒まで搶行、其存亡をしらす。然に郎君是等の事も顧みず、妾を割捨にし給ふ事の怨しきよとて、又さめくと泣ければ、妖怪拳を爪で亂跳罷了々々我兒は既に彼等に突殺されたり。等吾他等を捉て我子の仇を報じなん。汝先づ泣事なけれ。悟空が曰く、妾久しく哭て心疼、起事能はず。妖怪が曰く、患ることなけれ、我に一件の寶貝あり。是を以て模れば忽ち痛を忘るゝなり。只此寶貝指を以て弾く事を忘む。もし弾く時は我本相を現はすなりと示す。悟空是ば聞て潜に悦ぶ所に、妖怪は悟空が手を携へ洞の奥深き處にいたり、即ち口中より一顆の内丹舍利大さ鶏子の如くなるを吐出す、其色玲瓏て内丹し。悟空是を請把、偽て心頭を模事一遍し、忽ち一弾はじきければ、妖怪慌て搶んとするを、悟空早く寶貝を把て一口に吞下けり。妖怪大きに駭き怒り拳を上て打んとす。悟空其手を隔住め、妖怪が臉を強く抹り、忽ち本相を顯しければ、妖怪愕然とおどろき、汝は何者なれば我を欺き寶貝を騙し捨しぞ。悟空が曰く、我は唐僧の大徒弟孫悟空なり。故有て師父に放逐せられ故郷に歸しが、汝我師父を困め、且つ背後にて我を悪口す、依て我茲にきたつて先二人の孫兒を捉へ、八戒等に殺さしめたり。汝も首を伸て我一棒を受よ。妖怪大いに怒り、我汝を悪口せし事あらず。其はとまれ二人の孫兒が仇たる汝、逃とも遁さじとて洞中の群妖を點齊し、三四層の門を闢し餘すまじと闘たり。悟空見るより大喝一聲して、三頭六臂の形と變じ三根金箍棒を弄し、八方に當て數多の小怪を悉く打殺し、遂に黃袍怪にわたり合、門外に跳出半雲半霧の

間に有て戰事五六十合、然るに妖怪悟空が一棒を蒙り忽然として形を消たり。悟空身を跳して雲端に飛上り、四方を見れども所在をしらす。悟空心に點頭き吾既に悟得たり。此妖怪必らず天上よりきたれるならん。等我天上に行て查看すべしとて、筋斗雲に跳乗て南天門に上り、徑に通明殿の下に至る。四大天神問て曰く、大聖今何の爲茲にきたるや。悟空が曰く、吾唐僧を保護て寶象國に至りしに、一個の妖魔有て國女を犯し又我師父を困ましむ。依て我他と闘ひしに、他忽然として其形を消たり。おもふに是天上よりきたれる妖精ならめ。此妖神は何者なるや。早く查看して其原を糺せ。天師是を聞て靈霄殿に進み、玉帝上帝に悟空がいひし趣を啓奏しければ、玉帝勅を下して普天の神靈を査勘らるゝに、都て天上の諸神缺る者なし。只二十八宿の内二十七位まで有て奎星を見ず。天師此旨を回奏し奎星狼下界へ走り候と申。玉帝宣く、多少の時日を経る。天師指を屈て籌へ、四卯至らず三日にして卯一次を點ず、今既に十三日を過し候と申。玉帝宣く、天上の十三日は下界の十三年にあたり。急ぎ二十七宿に令して他を捉へきたるべしと勅詔ある。是に依て天師命令をつたふれば、二十七位の星員旨を領して奎星を尋るに、那奎星は悟空に撃れて山間に躲けるゆゑ、水氣にて妖雲隠され、更に見出す事能はず。此時本部の星員等が念咒するを聽得て、纔に頭を出しけるにより、遂に躲るゝ事能はず、衆星に曳出されて、玉帝の前へ引居られぬ。奎星頭を叩て罪を謝しければ、玉帝宣く、汝何故に私に下界へ走りけるぞ。奎星奏して曰く、萬歳臣が罪を赦し給へ、臣下界へ走候事

別の子細に候はず、那寶象國の公主は本是披香殿侍香の玉女なり。臣他と私通せんと欲し候へども、恐らくは天宮の勝景を汚さば罪輕からじと思ひ、他を下界へやりて皇女に托生、臣又走りて妖魔となり碗子山に居を占め、他を捨ひとりて夫婦となる事十三年、今日大聖孫悟空がために、遂に此情顯はれ候と明白に逃ければ、玉帝旨を下して奎星を兜率宮に貶し、太上老君が丹藥を煉る所の爐邊に在て火を焚役となし給ひ、功あらば職に復し、功なくば罪を加へんと命令あるにぞ、奎星は頓首して殿を退きけり。悟空は玉帝の發放を見て心中歡喜し殿に昇て恩を謝し、衆神に辭し別れて再び筋斗雲に打駕り、波月洞に回りにて公主を尋出し、妖怪を收し條を語り聞せける處へ、八戒悟淨二人ともたづねきたりしかば、大いに悦び終に公主を伴ひ、縮地の法を以て須臾に城中へ歸り、金鑾殿に進みて公主を國王にわたしければ、父王母后夢かとはかり嬉みて親子相抱き、久別の情をのべ涕泣する計りなり。文武の百官斯と聞て列位入朝し、公主の歸宮を駕し萬歳をぞ唱ける。國王悟空に那黃袍怪は何の妖精なるやと問にぞ、悟空前事を説事一遍す。國王大いに悦び厚く謝して、即ち朝房の内なる鐵籠の邊へ悟空を伴ひ、虎と成たる三藏に見えしむ。其時衆官那假虎を曳出し、鐵索を解くに三藏法師は猶妖術に厭れて、言事能はず。悟空呵々とわらひ、師は實に好和尚なり。前には八戒が讒言を信じて、我をして兇惡なりとし、逐退給ひしが、今日恁麼是等の事を弄出給ふやといふ。悟淨聞て跪き、師兄聞給へ不看三僧面一看佛面とは、古人の金言にあらずや。師兄既に是にいたる。萬望師父を救ひ

給へ。悟空わらつて曰、吾豈心に忍び救ざらん、汝早く水をとりにきたれ。悟淨急に一盃の清水をとりにたつて悟空に與ふれば、行者是を拿て那虎の頭を望み、一口を噴かけ妖術を退けしかば、忽ち三藏本の身にかへり、性を定め眼を開き悟空を見て且駭き且悦び、汝那裡して茲にきたりしや。悟淨有し條を説こと一遍すれば、三藏謝して曰く、賢弟が功勞限なし。吾西天に至り功果を遂て東土に歸らば、唐王に奏して汝が功勞を第一とせんとて歡喜する事限なし。時に國王素筵を整へ三藏師弟を饗應し、數多の寶物を積で酬としけれども、師徒分毫をも受けず辭し別れて寶象國を立出るにぞ、國王多くの官員を率て遠く送り戀々として別れけり。

平頂山功曹傳信

蓮花洞木母逢災

唐の三藏は又孫行者を得て意悦び、師徒四人寶象國を離れて西に向ひ、夜は住り曉に行き、又三春の景候に値ふ。或日行て一座の高山にかへり、其路險峻にして行がたし。四人暫く憩て前面を見れば、綠草青々たる坡の上に、一人の樵夫ありて三藏に向ひひけるは、長老且らく住り給へ、吾一言を告ん。此山中に一夥の妖魔あり。専ら東來西去の人を吃ふ。かまへて油斷し給ふな。三藏是を聞て大に駭き、三人に向ひ如何せんと議す。孫行者が曰く、師父怕給ふな。吾行て委く問きたり候はんとて坡の上に行て禮をなし、今大哥教られたる處は、是何の妖魔なるや願くは委く語り聞せ給へ。樵夫

答て曰く、此山行回ること六百里號て平頂山といふ。山中に一個の洞あり蓮花洞と號す。洞の裡に兩個の魔頭あり。他等唐僧の形を圖畫し、尋求て吃はんとす。長老心を用ひて一個の唐の字を言出し給ふなと訓へ、忽然として其かたちを見失ふ。行者頗る怪み頭を擡て空を見れば、那樵夫と見えけるは、日値の功曹にて雲の上に居たり。悟空大いに腹を立て雲を起して追到り匂ていひけるは、汝這夯貨話説あらば直に來り慇懃に申べきに、變化を賣弄し吾を様見るは無禮なりと叱りければ、那功曹慌て禮をなし、大聖吾罪を饒し給へ。那妖怪果して神通廣大にして變化窮りなし。恐らくは卿が神機を多く働かすにあらずんば、師父を保て行がたからん。孫行者曰く、不打緊吾唐僧を護て山を過んと、功曹に別れ心におもひけるは、那妖怪も何程の神通ありや。試に先八戒をやりて闘はせ、もし他打負なば吾行向て本事を見すべしとて歸りきたりぬ。三藏其子細を問に、孫行者が曰く、師父心を安んじて行給へ。此山只一個の山怪あるのみ。此邊の者ども膽少なる故、纒なる小怪を恐れて先のごとく告げ候なり。しかし猶も心を安んじ給はんとならば、先八戒をやりて窺ひきたらしめ給へ。三藏然りとして八戒にしかく命じければ、八戒底氣味わるくおもひながら、師命黙止がたく領掌し、釘鉈をとつて出去りけり。悟空三藏に向ひ、八戒一言の辭退もせで行しは其意得ず。他が跡に付て委しく窺ひきたり候べしとて、忽ち身を搖すよと見えけるが、一個の蟪蛄と變じ八戒を追て飛行、他が窺の下に住りてぞ伺ひける。八戒斯とは夢にもしらず、只管道を走りて逕に七八里を経しが、身體





疲れければ大いに孫行者を恨み、頭を轉じて罵りけるは、汝此弼馬温何を吾を捉弄にし、かゝる嶮山を巡らむるは何事ぞ。吾今身疲れ睡きざして堪がたし。此處にて一眠し覺て後立かへり、山を巡りたりと云含糊さんと獨言し、山の凹かなる處の叢に鎖り入て眠けり。行者彼が耳根にとまりて此體を見て、扱こそと可笑他が耳際より飛下り、身を動して又啄木虫と變じ、嘴をならして一翅に飛きたり、八戒が唇を照て挖植的刺。八戒慌て爬起、妖怪あり〜とわめきながら、唇を撫て曰く、彼妖怪吾を一搶突けるに不疼こそ呀しけれとて、四方を見れども一物もなし。猶頭を擡て空を見れば、一個の啄木虫半空に飛居たり。八戒大いに腹を立て、吾那弼馬温の亡人に欺かれ、山を巡るすら悔氣なるに、汝又きたつて吾眼を妨るぞ安からね。吾是を曉れり。汝慥に我嘴を朽木なりとおもひ、啄て裡面なる虫を吃はんとするなめり。吾今嘴を隠して睡るべしとつぶやき、遂に嘴を懐に押入依然叢にぞ打臥ける。行者又飛下り八戒が耳根を強く刺けるにぞ、八戒再度おどろきて跳起、是かならず他が窠ありて吾に占られん事を恐れ、如此刺ならめ。罷々今は睡るまじとて釘鉞をとつて立上れば、悟空もまた蟪蛄と變じ、八戒が耳の後に住り、扱て四五里計行ける處、一座の青石あるを見て立止り、石に對して禮をなし、獨言していふやう、吾今此青石を師父に准へ、歸ての答應を演習せんとして自問自答して曰く、吾回て師父に見えれば必ず問ひ給はん。此所妖怪有やと。吾有と答ん。又此山の名はと問給はば、吾答て此石にかたどり石頭山と云ん。又何の門ぞと問はば、此釘鉞になぞらへ釘々鐵葉

門と云ん。又洞の廣狹を問ば、三層なりと答ん。もし又門上の釘子多少か有ると問ば、吾心忙しくて不記といはん。如此停當して滯なく答なば、師父はいふもさらなり、那弼馬温をも欺くべしとて遂に舊の路に回りきたる。行者は先達て飛かへりて本相を顯し、三藏に見えて、八戒が讒話をいふべき事を豫め語る所に、八戒程なく回來る。三藏問らく、此山妖怪ありや。八戒が曰く、若干有り弟子親に是を見たり。行者叱て曰く、汝前に叢にて睡けるが、猶覺ずしてかゝる夢語の餘りを吐出すや。八戒是を聞て頗る驚きながら身を矮め、師兄何ぞかかる事をいひ給ふや、吾更に睡たる事なし。よし睡たりとも師兄奈何ぞ是を知ん。行者が曰く、此山何とか號るや。八戒答て曰く、石頭山是なり。行者叱て曰く、汝先づ口を開く事なかれ、吾能く是をしれり。山中洞門をば釘々鐵葉門といひ、洞裡の廣狹を問ば三層なりといはん。又門上の釘子多少か有と問ば、吾心忙しくして不記といはん。如此停當して滯なく答へなば、かの弼馬温を欺くべし。正に斯のごとくならざらんや。八戒仰天して頭を叩きて罪を謝し、師兄は誠に天眼耳通なり。吾再び行て誠に山を巡りきたるべし。願くは罪を宥し給へ。行者はたと睨へ、這奔貨師命を得ながら却つてわれを罵り、恚に睡りて啄木虫に釘覺され、なほ大説をいひて師を惑さんとす。以後の誠のため、吾這五根の棒を脊に受用せよと、鐵棒を把て振上る。八戒大いに哭喪、師父に就て種々謝言しければ、三藏悟浄言をつくして行者を宥め、再び八戒をやりて山を巡らしむ。八戒悦び釘鉈をかたげて走りりけり。此度は孫行者跟行すといへども、疑心

生暗鬼ならひ、八戒始に懲はて、草の動き木葉の落るも行者かとおそれ、蟲飛鳥の啼も悟空が變せしにやとうたがひ、只管恐怖して道を急ぎけり。茲に這平頂山蓮花洞に兄弟兩個の妖怪あり。兄を金角大王といひ、弟を銀角大王といふ。此日金角弟の銀角に向ひ、吾曾て人のいふを聞くに、東唐大唐の天子、三藏といへる僧に命じ、西天に往て佛を拜し經を求しむと。那唐僧は金蟬長老の臨凡十世修行の好人なり。他が肉を吃ふ者は延壽長生ならしむといへり。他が一行四人馬ともに五口、吾委く一幅の畫圖に寫おけり。汝今日山を巡り路の上もし和尚に遇ば、畫圖を照驗とし、似たる者あらば早く捉きたれとて、一幅の繪圖をわたしければ、銀角命を領し三十個の小妖を引て逕に山を巡りけるが、端なく八戒と行逢たり。一個の小妖銀角に告て曰く、此和尚那圖中の猪八戒によく似て候といふ。銀角即ち畫圖を鎗の柄に掛開き熟と見て曰く、白馬に騎しは三藏、毛臉は孫悟空、色黒く丈高きは沙悟浄、嘴長く大耳なるは猪八戒と記されたり。扱は猪八戒に窮れり。引捉よと呼はれば、八戒大いに驚き急に逃んとす。銀角忽ち刀を擧て追かくるにぞ、八戒も是非なく釘鉈をとつて引返し、二十餘合鬪ひいまだ勝負を分たざる處に、三十個の小妖一齊に打てかゝるにぞ、八戒遂に敵しがたく逸足出して逃げんとせしが、忽ち藤蘿に足を絆はれ地上に倒れければ、小妖ども折かさなり遂に擒にして蓮花洞へぞ引ける。

二編卷之二

外道迷眞性

元神助本心

斯て銀角は八戒を曳せて洞の裡へ回きたり、金角に斯と報じければ、金角畫圖を開きて引合せ大いに悦び、果然他猪八戒なり。早く後邊の池中に浸し、兩日を過して下酒になすべしとて、小妖に命じて八戒を曳て、後邊の池水に浸さしめ、扱銀角に向ひ、汝既に八戒を捉得たり。唐僧必ず近きならん。再び行て山を巡り唐僧に遇ば捉きたれ。只かの孫行者は神通廣大なりと聞、輕々しくは敵し難からん。宜く謀をもつて擒にせよ。銀角唯々として再び小妖若干を率ゐ、高山に登り四方を窺ひ居たり。此時三藏孫行者に向ひ、八戒去て多時といへども今に歸りきたらず、是如何なる故ぞと問ふ。行者が曰く、那猓子また途中に睡り居候にや。師父先馬に乗給へ我々一同に行て尋ね候はん。三藏然りとして馬に騎り、師徒一齊に山中に尋ね入る。銀角山上より是を見て果然唐僧きたれりと悦び、小妖に命じて曰く、吾今變化して唐僧等三人を捉べし。汝等茲に有てまてよとて、忽ち年老たる道士と變じ跌て傷たる體をなし、足より血を流し草の上に倒伏て命を救ひ給へとぞ叫び居ける。三藏此聲

を聞て二人に向ひ、かゝる山中何人か如此叫びぬるやと問ふ。時に妖怪草中より爬出馬前にいたりて禮をなす。三藏是を見るに年老たる道士なれば、連忙馬より飛下り、挽起さんとするに、銀角故意と聲を揚げ、疼痛々早く手を放ち給へといふ。三藏心得ずおもひ手を放ちてよく見れば、他が足折き損じて血の流る、事津淋たれば、駭て其故を問ふ。銀角が曰く、吾は此山の西なる、清幽觀といふ小觀中の道士に候が、前日徒弟と共に山の南なる施主の家に赴き、禳星散福をなしてかへるさ、不計猛虎に遇、吾徒弟は皆他に吃はれ候。吾は一命を捨逃走りしに、忽ち石に跌き倒れ、如此足を傷り觀中へ歸り得ず、再度虎出きたらば逃るゝ事能はじ。今幸に師父の來臨に遇。願くは吾を扶け歸らしめ給へ。三藏甚はだ憐み、先生患ふる事なけれ。吾扶て送り歸さんとて、孫行者に向ひ、汝此道士を駄て那觀中へ送り行よと命す。悟空は早く道士をば妖怪なりと知り、一棍に打殺さまくおもへども、又以前のごとく師父に責られんことを恐れ、輕忽手を下さす。命に應じて道士を駄ひ、行々三里の道を過るに、三藏悟淨は先に歩み山の凹なる處へ下りて、稍形も見えざれば、須波今こそ妖怪を打殺さんとおもふに、妖怪も早く是をさとり、元來銀角一個の法術あり、天下の山を遣事自在を得たれば、行者が背上に在て捻訣念咒となへ、忽ち一座の須彌山をとつて孫行者が上に落しかくる。行者早く身を傾け、避逃して左の肩に受留、冷笑て曰く、賊怪何ぞ重身の法を使ひ吾を壓んとするや。銀角他を壓損したるを見て又念咒を語へ、一座の峨眉山を空中より落しかくるに、行者是をも閃外し右

の肩に受留、兩座の大山を肩の上におきながら、走ることに星の飛ぶがごとく三藏に追付んとす。銀角以ての外に驚き、又忙はしく念咒を語へて、一座の泰山を空中より行者が頭の上へ落しけり。是に依てさしも神通廣大の行者も、泰山壓頂の法に遭ひ、三座の神山に壓れしかば、終にその處へ壓倒され、七竅より血を流し敢て動き得ず。銀角仕すましぬとて急に三藏を追蒐、雲中より手を伸し人馬もろとも掻抓み、悟浄をもともに捉へ終り、一陣の風を發して蓮華洞へかへりきたり、大音に小弟既に唐僧師徒を捉へきたれりと呼はりければ、金角動き出て是を見、是は唐僧と沙和尚なりといへども、肝心の孫行者を捉へ得ざれば、唐僧を吃ひがたしと難す。銀角呵々とわらひ、大王過念し給ふな。那孫行者は小弟三座の神山を以て壓おきたれば、今我々が行にも及ばず、只兩個の小的に命じて大王の二件の寶具を持せやりて裝きたらしめ給へ。金角是を聞いて大に悦び、即時に紫金紅葫蘆、羊脂玉淨瓶とて、二個の寶具を取出し、精細鬼、伶俐蟲といふ二人の小妖を呼び、汝等此寶具を持って高山に登り、葫蘆淨瓶の二件、底を天にし口を地に向け、一聲孫行者と呼べ。他答へなば即ち他を裝べし。然して早持回れ。我又太上老君奉勅急々如律令の帖兒を貼おく時は、他が身體一時三尅の間に化して血水と成べしとて、寶具をわたしければ、二怪命を受けて出行ければ、金角また銀角に令して、三藏師弟を細縛させ、高く廊下の上にご釣おきける。扱も孫行者は三山の爲に壓倒され、神通變化も力究まり、涙の下ること雨のごとく、悲て申けるは、我師父昔日兩界山にして吾を救ひ給ひしより、徒弟となして

法味を授らる。吾又常に馬前に有て妖魔を驅て路を開き、師父を保護して西天にいたり、ともに正果を得ん事を計しに、誰かおもはん、此處にいたり魔障のために山をもつて壓殺され、師徒是までの千辛萬苦遂に畫餅となるべしとは、噫呼天か抑又命かと、聲を上て叫ければ、其聲直に天上に聞え衆神を駭しけるにぞ、衆神此處に降臨し、中にも護法揭諦三山を見て駭て曰く、此山は是誰か管する所ぞ。土地山神出て曰く、此山は則ち小神等が管理する山にて候。護法揭諦叱て曰く、汝等好歹をも辨へず山を妖怪に借あたへ、何ぞ他を壓殺さんとはせしぞ。此壓れたる者を誰とかおもふ。是れ齊天大聖孫悟空なり。今正果に歸して唐僧の徒弟となり、西天に行て經をとらんとす。汝等早く山を把て他を救へよ。土地山神大いに恐怖し、急に咒語を念へ動山をとつて本の處へ回せば、行者急に跳りおき金箍棒を擧出し、土地山神に打てかゝる。土地山神頭をたいて種々に陪禮す。しかる處に山の凹なる處より、霞光爛々と輝ききたるあり。行者土地山神に問て曰く、汝久しく此所にあれば妖怪が事をよく知りつらん。今彼處より光を放つは何物ぞ。又妖怪が友とするは何やうの人ぞ。且好める物は何なるぞ。速に告げなば罪を宥さん。土地山神が曰く、今彼光を放つは妖怪が持所の寶具紫金紅葫蘆、羊脂玉淨瓶の兩件ならん。又他が友とするは仙術を得たる道人、好める物は仙家の丹藥なり。行者聞得て衆神を歸しめ、身を變じて一人の道人となり、光を目的に行處に、精細鬼伶俐蟲の二妖出きたり、行者を見て怪み、道士は何方よりきたれると問ふ。行者答て吾は蓬萊山よりきたれり。今日

此山にきたり、一人の好人に仙術を傳へんとす。汝等は何國へ行ぞ。精細鬼が曰く、我徒は此山中蓮花洞の小仙、今大王の命を受けて山下にいたり、唐僧の徒弟孫行者を捉に行候なり。行者聞て曰く、那孫行者は神通廣大なりと聞つるに、汝等二人が力にて奈何ぞ捉得んや。伶俐蟲わらひて曰く、汝道士其一を知て其二をしらず。我第二の大王、三座の大山をもて他を壓へおき給ふ。故に我徒に命じ、二件の寶貝をもつて他を裝て收しめ給ふ。何ぞ他が神通を恐れんや。行者又問て曰く、其寶貝如何なる物にて何やうにして人を裝や。伶俐蟲則ち葫蘆淨瓶の人を裝る由來、又封じて人を血水とするまで委しく説ければ、行者心に駭きながら笑て曰く、汝の寶貝好といへども未だ稀罕とするにたらず。吾に一個の寶貝あり。人を裝ごとき小能にあらすとて、暗に一根の毫毛を抜とり、長さ一尺七寸計の葫蘆と變じ、腰間よりとり出して見せければ、二妖是を見て云けるは、師父の寶貝また如何なる奇特の候や。行者が曰く、我此葫蘆天を裝の妙有。二妖駭きて曰く、恐らくは是詐にては候はずや。行者笑て曰く、我何ぞ詐をいふべき。疑ひなば眼前に裝て見すべし。伶俐蟲精細鬼が袖を引て側に退き、商量して云く、今此天を裝葫蘆と我人をもる葫蘆と他にこうて換なば、是莫大の利なるべし。汝如何おもふや。精細鬼が曰く、是甚だ大利なれども他必ず承引まじ。伶俐蟲が曰く、他若承引せずんば、又玉淨瓶をも添て換んに、一をもつて二に換るなれば、他一定喜で換べしと密々に語合を、行者て暗によるこび、伶俐蟲を呼び、汝等もし葫蘆を換へんと思はば、則ち換つかはさんが、天を裝器

と人を裝器と品を同じくして取換る理有んや。汝其淨瓶をも添ば我猶少しの損あれども換つかはさん。二妖が曰く、我々元來如此を欲すれども、只師父の葫蘆天を裝の名を聞て、其實を見ざるを恐るゝなり。行者が曰く、さらば我目前に天を裝て見すべしと、捻訣念咒語をとなへ、暗に日遊神を呼で曰く、汝今我ために玉帝に奏せよ。我唐僧を扶け西天にいたり經をとらんとする處に、此平頂山に妖怪ありて、二件の寶貝をもつて行路を妨ぐ。依て我一計を設て他が二件の寶貝を奪はんとす。願はくは眞武君の皂旗を以て南天門にいたり、一度展て日月星辰を閉し、須臾六合を闇となし給へ。我れ其を以て天を裝たりと欺き、妖怪が寶貝をもつて師父が難を救はん。日遊神是を領掌し、悟空が頼のおもむきを奏しければ、玉帝是を赦し、其手當を命じ給ふ。日遊神は行者が耳根に下り斯と報するにぞ、行者斜ならずよろこび二妖に向ひ、今ぞ天を裝て見すべし。眼を定めてよく見よといひもあへず、那葫蘆をとつて天に向ひ力に任て投上たり。天上には是を相圖に皂旗をとつて一度展れば、日月星辰を遮り閉し、四方暗々として咫尺の間もわかちがたくなりぬ。二妖おどろき、今日輪午中の節なるに、何として斯く黒闇になりたるや。行者が曰く、既に天を裝終り、日月星辰すべて葫蘆の裡にあり。何ぞ是暗からざらん。二妖心疑ひ迷ひ聲を上げ、道士此所は何の地方なるやと問ふ。孫行者詭て曰く、此所渤海の岸の上なり。汝等足を動かす事なけれ。もし跌倒なば海水に落入、七八日を過るとも還て底に到り得じ。二妖以の外に驚き慌忙、師父早く天を放し給へ。我々よく見果たりと呼はる

にぞ、行者又咒語を念すれば、天上にも皂旗を巻收れば、日光奮のごとく正午なり。二妖よろこび斯のごとき好寶貝、疾々換てたび候へと葫蘆と淨瓶を行者にわたせば、行者は假物を二妖に授け、身を跳して雲端に飛上り、二妖が勾當を伺ひけり。

魔頭巧算 困心猿

大聖騰那 騙寶貝

斯て兩個の小怪、悟空が假葫蘆を得て甚だ悦び、互に手にとりて是を見けるが、伶俐蟲頭を廻らし、那道士を見るに、忽ち形を見失ひしかば大いに訝り、怎麼か他辭もせずして去しや。精細鬼も駭き實も道人は何地へ行けん。もしや孫行者假に神仙に粧きたつて、我々を嗤し寶貝を奪ひしにはあらざるか。伶俐蟲が曰く、等我此葫蘆をもつて天を装見んと、先に行者が抛り上たることく、天に向ひ力に任せて抛上れば其儘撲的と落たり。是は如何とて千錯萬錯すれども装得ず。扱は汝がいふこと孫行者に欺されしならん。精細鬼が曰く、不要亂説、我おもふに他天を装とき、幾句の咒語して後に天を装了、我汝にかはりて装て見んと、葫蘆を把て口中に咒語となへ、扱て力に任せて抛上れば、不旨撲的落きたる。兩怪とも大いに慌忙、是は彌假物なりとて初て悟り騒を、行者半空より見て打わらひ、終に葫蘆に假たる毫毛をも把きたりて上身へ收めければ、兩怪は四手皆空しく、葫蘆をさへ失ひて狼狽まはり、木の下草の裡まで搜せども見えす。兩怪呆々拵々て面を見合せ、我等此ま、歸な

ば必ず打殺されなめ。不如是より散火すべきか。精細鬼が曰く、二大王哥々と甚好。我と汝との身上を憑まい、生命ばかりは助かる事もや。先々かへりて二大王に歎きたのまんと、轉歩して蓮花洞へかへり去る。行者是を見て又身を變じて蒼蠅となりて、小怪が跟に付てぞ飛行ける。那二件の寶貝元來金箍棒と等しく、身に隨て變化し、可爲大可爲小。斯て行者は小妖に隨うて洞裡にいたり窺ふに、兩個の魔頭正面に座して酒を飲居たり。伶俐蟲精細鬼の二怪座下に蹲て、只管頭を叩き言ところをしらす。二魔が曰く、汝等孫行者を拿へたるか。二怪羞入て曰く、願はくは大主小的等が萬千死罪を宥し給へ。我等寶貝をとり走て半山にいたる時に、忽ち蓬萊山よりきたる一個の神仙に遇著候ひしが、他に一個の葫蘆あり。よく天を装の妙ありと申、我等一時他に騙され、人を装寶貝よりは天を装寶貝十分の徳と心得、二件の寶貝と換候ひしに、早く道士を見失ひ、あまつさへ葫蘆をも失ひ候。萬望大王大慈悲をたれて、小的等が罪を恕し給へと、頭をもつて地を叩き謝しければ、金角銀角、暴燥雷の如くわめき、罷了々々、是れ孫行者神仙に假きたりて汝等を欺きたるなり。那猴頭如何して山を抜、我寶貝を騙し捨たるや。よし、他を拿べき寶貝猶三件あり。七星劍、芭蕉扇は身邊にあり。又一條の規金繩は厭龍山厭龍洞の老母の所にあり。今小的を老母の方へ使し、唐僧の肉を吃せんといはせ、他が規金繩を帶きたらせ、孫行者を捉へんと商議し、巴山虎倚海龍といふ小怪を呼び、しかじか命じければ、二怪命を受て走り去る。行者一々明白に聞得て翅を開き飛去り、又變じて一個の

小怪と成り、走つて巴山虎と同道を急ぎ、已に午日ごろ過ぎ行き、行者巴山虎に問て曰く、まだ何程の道あるや。倚海龍手指て曰く、鳥林此裡なり。行者是を聞きて鐵棒を取りだし、忽ち倚海龍巴山虎を打殺し、一根の毫毛を抜き變じて巴山虎となし、我身は又變じて倚海龍となり、鳥林に蒐入て見るに兩扉の石門あり。半門を掩ひ一個の女妖停立めり。行者を見て問て曰く、汝は那里よりきたりたるや。行者答て、我は蓮花洞より使にきたれり。女妖就ち行者を引て三層の門を進み入。行者吃と堂中を見れば一個の老媽々座し居たり。行者急に禮をなせば、那怪問らく、汝は是誰なるぞ。行者答て曰く、小怪は蓮花洞の小的なり。大王 奶々を請て唐僧の肉を進らんとの事に候。願はくはきたらせ給へ。又那唐僧の徒弟孫行者を捉へんあひだ、現金繩を帶てきたらせ給へとの命令にて候と申ければ、老怪大いに悦び、女を呼て一頂の香藤轎を拾きたらせ、自ら洞座を出て乗りうつれば、二人の轎夫擡着て行事既に五六里に及びて、轎夫等轎をかきおろし、須臾息をやすむるひまを見ずまし、行者忽ち鐵棒を出して轎夫を打殺しにぞ、其物音に驚きて、那老怪轎より頭をさし出す處を、行者また一棒に打死し、轎より惹出して是を見るに、是九尾の狐なり。行者現金繩を搜し出して袖の裡に收め、二根の毫毛を抜變じて巴山虎倚海龍となし、又二根の毫毛を抜變じて二個の轎夫となし、己は變じて老奶々となり、轎の裡に有て抬起させ、不多時蓮花洞へいたりぬ。把門の小怪入て斯くと報じければ、金角銀角洞を出て洞中へ迎入、行者を南面に座せしめ、二魔をはじめ大小の群妖跪て尊

敬す。行者が曰く、兒們我を請きたりて何の幹かある。魔頭が曰く、母親を請ふこと別事ならず。今早唐僧を擧得たり。依て母親を請ひきたり、同じく他が肉を吃ひ、延壽の酒宴を促さんとおもひ候と、話未だ終らざる處に、忽ち見る巡山の小妖速しく走りきたり報じて曰く、大王禍すでにいたり。那孫行者奶々を打殺し、己奶々に粧てきたり候、かまへて油斷し給ふな。金角銀角大いに仰天し、惘果たる透を窺ひ、行者は本相を現はし雲に跳上て逃げ走る。金角銀角に向ひ、哥々心を安んじ給へ。小弟他と交戦拿きたらんとて寶劍を提げ、門外に走り出で高く呼て曰く、孫行者早く我寶貝と母親を還せ。我また唐僧師徒を饒し返さん。汝早く經をとり去れ。行者聞て罵て曰く、潑妖怪偽言を吐とも我何ぞ信すべき。見よ、頓て汝兄弟を一根に打殺し、師父を救ひ出すべし。銀角大いに怒り雲中に跳上り、寶劍を輪して砍てかゝる。行者も鐵棍を擧て相迎へ、半空の中に在て戦ふ事三十餘合、未だ勝負を分たず。行者心焦燥那規金繩を把いだして刷喇、銀角に投かくる。銀角元來一個の緊繩咒あり。又一個の鬆繩咒あり。若し他人おのれを縛る時は鬆繩咒を念じ、己他人を縛る時は緊繩咒を念す。今行者が投かけし繩を見て、己が寶貝の規金繩なるを知り、急に鬆繩咒を念じて繩を脱しとり、却て行者を望て抛かけ緊繩咒を念す。さしもの行者も鬆繩咒をしらざれば、此繩を脱すこと能はず。さながら金圈子からまれしごとく更に働き得ず。銀角頓て繩を曳て洞中にかへり、大音に長兄々々我孫行者を拿きたれりと呼けるにぞ、金角是を見て大いに悦び、銀角が功を



賞して、小怪們に分付行者を細おき、他が懷中を捜し葫蘆淨瓶の二件を取返し、兄弟後面に入て飲酒す。行者は柱に繋かれ這回りて居けるが、監怪の立去るを見て身を消して圈子をぬけ、毫毛を抜て變じて己が形となして柱に繋ぎ、本身は變じて小怪となり、後面に入て曰く、那孫行者柱に繋れながら、頻に爬踏候へば、終に那規金繩を磨切候べし。一條の粗相なる繩と細換候はんと申ければ、金角聞て尤とし、腰間より一條の獅蠻帶を解て行者にあたふ。行者是を請とり去て假行者を細め、寶貝の繩は袖内に籠し、一根の毫毛を抜て變じて規金繩とし、入て金角にあたふ。金角是を假物ともしらず請取て收む。行者は急に身を轉じて、門外に走り出で本相を顯はし高く呼はつて曰く、孫行者きたりたり、潑怪とく出でよ。小怪駭き急に走り入て斯と報じければ、金角大に訝り、孫行者を拿へ柱に細おきたるに、又孫行者といふ者きたれるは如何。銀角が曰く、長兄放心し給ふな。我這葫蘆をもつて他を装きたり候はんとて、那紫金紅葫蘆を携へ走り出で問て曰く、汝は何者ぞ。行者が曰く、我は是孫行者が舍弟者行孫なり。汝我家兄を拿へたり。故に仇を報せん爲きたれり。銀角が曰く、汝きたつて仇を報す。我汝と戦ふ事能はし。我只汝を一聲呼んに、汝よく應んや。行者が曰く、我何を答ざらん。銀角悦び空中へ跳上り、葫蘆をとつて、兒朝天兒朝地者行孫とよぶ。行者敢て應へず。銀角二聲よぶ。行者心中におもふやう、我眞の名は孫行者なり。今者行孫は鬼名なれば、他に應ずるとも何の妨かあらんと思惟し、忍不住て一聲應すれば、忽ち吸れて葫蘆の中へ装入れた

り。銀角得たりと貼上貼兒ぬ。此寶元來名字の眞假に不管、およそ答ふる心有ても、就ち装入る不測の寶貝なり。時に行者葫蘆の裡に装入れ、眼をひらき見るに烏黒にして物を見ず。されども大膽不敵の行者、些も恐れず心中におもふやう、我五百年前老君我を八卦爐中に煉成ども、我銅頭鐵背火目金睛、遂に免る、事を得たり。他が此葫蘆一時三剋よく凡人を化して血水とす共、我を化する事能はし。他が封を開くを待て走去んと心を定めけり。時に銀角葫蘆を携へて洞中へかへり金角に謁し、小弟既に者行孫を葫蘆の中へ装きたり候と云ふ。金角大いに悦び、賢弟手も動さず拿へきたる勇ましさを。早く他を化し盡して血水となし、掲開帖兒。銀角領掌し捻訣念咒して腰骨まで化したり、早速腰骨まで化し候といふにぞ、金角喜び今は開帖て見よと令す。行者是を聞て就ち毫毛を抜て半截身となし、眞の身は變じて雌螻蟻となり、葫蘆の口もとにとまり、銀角が封を開て見る時行者早く飛出で、又身を變じて小怪となり傍に座す。金角葫蘆を開き見るに半截身あり。依てもとのごとく貼上て曰く、既に截身に成たり。とてももの事に悉く化し盡して啜らんとて、葫蘆を小怪にもたしめ兄弟悦びの飲宴をなす。豈しらんや此小怪は是孫行者なりとは。行者は葫蘆を捧居けるが、隙を窺ひ毫毛を抜き變じて葫蘆となし、誠の葫蘆は懷中す。金角是を知らず、稍醉を盡してかの假葫蘆を把て席上になほし、猶銀角と談話す。行者は潜に舌を吐して門外へ走り出けり。

外道施威欺正性

却説行者は寶貝を騙し捨て門外に溜出、本相を現し聲を勵して潑怪出よと叫ぶ。小怪おどろき立出て、汝は何人ぞと問ふ。行者が曰く、われは是前に老怪に捉へられたる孫行者者行孫等が弟行者孫是なり。小怪此旨を魔頭に報す。金角大いに駭き、先に孫行者を捉へ再び者行孫を葫蘆に装たるに、今又行者孫といふ者きたる。賢弟此たびは奈何なる謀を以てか敵に抵ん。銀角が曰く、長兄放心し給ふな。我此葫蘆よく千人をば装、何ぞ行者孫を恐れん。我出て一發に装きたらんと大言はき、假葫蘆をとつて走り出で高く呼で曰く、汝行者孫喧しく吠鳴事を止よ。我と汝と相打に及ばず。但我汝を一聲呼ん、汝敢て應へんや否や。行者笑て曰く、汝我を呼ば何ぞ應へざらん。我又汝を呼ば、よく應んや。銀角嘲わらひ、我汝を呼には一個の葫蘆あり、もつて人を装べし。汝又我を呼で何にかする。行者が曰く、我も一個の葫蘆あり。先づ試に汝我を呼べ。銀角大いに悦び身を跳して空中に飛上り、假葫蘆をとつて一聲行者孫と呼ぶ。行者是をき、て連聲に八九聲應ふ。されども敢て装事能はず。銀角仰天して忽ち雲中より大地へ墜脚を跌て曰く、天世情を變ず。恐らくは汝が葫蘆も敢て装事不能行者が曰く、汝先づ葫蘆を收よ。我輪到なれば汝を呼んとて、急に斛斗雲に跳り上り、葫蘆を以て底兒朝天兒朝地一聲高く銀角大王と呼ぶ。銀角聲に應じて一聲應るに、忽ち装れて葫蘆の裡へ吸入らる。行者早く貼上して急々如律令と帖子雲端を下り、逕に蓮花洞口に到り、葫蘆を揮廻し勇に勇みて响で

曰く、我一課して銀角を奪へたり。汝等早く師父をわたして罪を謝せすんば塵にせん。小怪大いに恐怖して、遽しく金角が前にいたり、大王禍ひ既にいたれり。那行者孫銀角大王を葫蘆の内に装きたり候と報す。金角聞もあへず地に跌倒聲を放つて大に哭ければ、洞裡の群妖も一齊に病哭。然るに又小怪蒐きたり、行者孫已に洞門を打破て進みきたり候といふ。金角大いに駭き、急に芭蕉扇をとつて後に挿み、七星劍を提て跳り出で、汝潑猴我弟を害す。誓て汝が肉を以て弟の靈を祭すんば不止。行者嘲わらひ、此潑怪むだ言を止て早く我師父を返せ。然らば汝が狗命を饒さん。金角大いに怒り七星劍を振て切てかゝる。行者金箍棒を提て戰ふ事二十餘回、いまだ勝負を分たざるに、數百の群妖金角を扶て八方より行者に切てかゝる。行者少しも恐れず、身外身の法をつかひ一把の毛を抜きとり、口に含て吹出せば、無數の行者となり、群る小怪を打ち散すこと風の雲を拂がごとし。金角是を見て急に芭蕉扇を取て、南方丙丁の位に向て煽ば、只見地上一面の火光となり焰々と焰上る。元來此扇平地を一度煽ば忽ち火を出きたる。是天上の火にして一點の靈光火なり。金角機に乗じて七八丁煽ば烈々たる煽飛發り、大地を焦す。行者此惡火に焼立られて大いに駭き、急に毫毛をとつて身に收め、只一條の毛を以て假に我像となして火中におき、本身は斛斗雲に跳駕、逕に蓮花洞に至り、鐵棒を廻して小怪を殘らず擊殺し、後面に走り入て三藏師徒を尋る處に、机の上に羊脂玉淨瓶の有を見て、急にとつて袖中に入れ、此時また金角洞中へかへりきたれば、行者師父を尋ぬる隙なく、身を變じて小

怪となり、金角を見て胸を打て痛哭し、大王回り給ふ事何ぞ遅き。前に行者孫きたりて、大小の群妖ことごとく他が爲に打殺されたりと云ふ。金角ほとりを見れば血流て河のごとく屍地に充滿たり。金角聲を放て大いに哭大地に跌倒る。行者是を扶て洞の裡へ入しむれば、金角大きに身體疲れ、石案上に伏て昏々と眠りけり。行者傍に在て他が呼々として熟睡するを伺ひ、暗に芭蕉扇を抜とり身を返して逃れ走る。金角足音に驚き睡を覺し、行者が芭蕉扇を捨去るを見て大いに怒り、劍をとりて追きたる。行者も是を見て扇子を腰に挿み鐵棒を廻して金角と戦ふ事三十餘回、金角抵敵する事不能、西南をさして逃走り厭龍洞へ遁れ入る。行者長追せず頭を回して蓮花洞へかへり、終に師父沙和尚を梁の上より解下し、八戒を池水の中より扶上て悦び合ふ事限なく、素齋を調へ師徒四人飽まで食ひ、其夜は洞裡に安臥しけり。斯て金角は厭龍洞に在て打殘されし小怪を呼集へ、再度妖兵を調て蓮花洞へ寄せきたる。行者斯と聞て沙僧に師父を守らせ、自身は八戒と俱に門外に出て敵を迎ふ。金角が先驅狐阿七といふ怪、陣頭にをどり出て高聲に罵て曰く、汝此潑猴多く吾金角大王に无禮す。早く頭を伸て死に就よ。八戒かれが爲體を見るに、玉面長髯鋼眉刀耳にて手に方天戟をとれり。八戒一言の問答にも及ばず、鉈を掣一聲叫で撃てかゝる。兩人戦ふ事十四五回いまだ雌雄を分たざるに、金角群妖を下知して一聲に撃て掛らしむ。行者も金箍棒を揮て八戒を扶け魔軍に相當る。沙悟淨洞中より是を見て、三藏を深くかくしおき、寶杖を回して横合より群妖を打退くるにぞ、魔軍沙和尚に不意

をうたれ、利を失ひてにげ走れば、狐阿七も敵を振捨て引退くを、八戒追かけて鉈に引かけ打倒して打殺し、よくよく見るに是一頭の狐狸にぞ有ける。金角遙かに狐阿七が討れしを見て、急にとつて返し八戒に打てかゝる。沙和尚もまた寶杖を揚て八戒を扶け一往一來して挑み戦ふ。此時行者は雲上に跳上り、淨瓶を解下して一聲金角大王と呼ぶ。金角是を我小怪の呼ぶぞと心得頭を回して一聲應れば、忽ち吸れて淨瓶の内にもり入れぬ。行者急に帖上を帖子、他がとり落したる七星劍を拾ひとり、邪魔を拂ひ盡して洞中へ引返し、三藏に事の始末を語りければ、大によろこび其功を賞し、早齋を吃して早く西天に行んと立上る。時に空中に人有て、孫行者我寶杖を還せといふ。行者聞て空中へをどり上つて是を見るに是李老君なり。行者其ゆゑをとふ。老君が曰、那葫蘆は我仙丹を盛の寶杖、淨瓶は我水を装の寶杖、寶劍は廣を煉寶杖、扇は火を煽の寶杖、幌金繩は我勒袍帶なり。那兩怪は一個の金爐童子一個の銀爐童子なり。他我寶杖を偷み下界へ逃走し所在を知ざりしに、不期も今汝に拿られたり。行者叱て曰、汝這老官兒縦に家童を放て、吾師父に害をなさせ經をとるの邪をなす、罪方に汝にあり。老君が曰く、是事我預る處にあらず、汝が師徒魔ありて難に逢ふなり。此難に逢ふんば正果にいたる事難し。行者聞て初て了然、五件の寶杖を老君に返しければ、老君葫蘆淨瓶の口を開きて兩股の仙氣を出し、一指を入れ化して二童子となし、行者に別れて天宮へぞかへりける。

二編卷之三

心猿正處諸緣伏

劈破傍門一見月明

却説孫行者は雲頭を按落、老君の事を備に師父に語りければ、三藏是を感歎し、夫より師徒進で行く事數日にして、一日天色將に晩んとするに、山の凹なる裡に樓臺疊々殿閣重々たるを見る。却て是一座の寺院なり。三藏馬を下り進で山門に至り見るに、額に五個の大字を鐫て勅賜寶林寺とあり。三藏顧て曰く、徒弟們は茲に待て、我院内にいたりて宿を借んと、逕に山門に入て見るに、兩邊に一對の金剛神を座たり。二層門に到り見れば四天王の像を排列す。大雄寶殿にいたつて三藏合掌して是を拜し、佛臺を廻りて後面に到り見るに觀音の像あり。三藏又是を拜す。然るに傍門の裡より一個の道人出きたりぬ。三藏則ち道人に向ひ、貧道は是東土唐の使、西天にいたり佛を拜し經を求んとす。今寶刹にいたり天晩に及べり。ねがはくは一宿を許し給へ。道人が曰く、我は僧官にあらず。裡に老師あり入て斯と告ん。師父此所に待給へとて入て僧官に報じければ、老師すなはち門を開て迎へしが、三藏を見て大いに不興し、道人を罵て曰く、汝しらすや我は是僧官なり。只士夫降香ある時は我出迎

て接す。這等の遊和尚の天晩て是非なく宿を乞はば、前廊の下に臥しむるとも事足れり。何ぞことごとくしく我に報するやとて、身を轉して内へ入ぬ。三藏是を聞て双眼に涙を流して長歎し、我前世幾千の悪業をなせしにや。今生常に不良人に遇事よと身を悔み愁然として歸りいづる。行者師父が滿眼愁容たるを見て問て曰く、寺内の和尚何事を罵り候ひし。三藏が曰く、此寺不便なり別里に行て宿を求むべし。行者が曰く、豈此理あらん。我進入て宿を求めんと、鐵棒をとつて逕に殿上にいたり見るに、道人佛前に挿香て居たり。行者厲聲に一聲呼はれば、道人誑了して跌倒大に戰慄て滾々方丈へ蒐入、老師に向ひ外面に又一人の和尚きたれりといふ。僧官が曰く、這猊子再び來て何をかいふや。道人が曰く、這個の和尚は那の僧と一般からず。滿面毛にして環眼ながら雷公のごとし。手に長き鐵棒を把て狼々の人に打んとする勢なり。僧官是を聞て門を開き見るに、早行者進みきたる。其面誠に醜陋。和尚慌て方丈の門を鎖しけるに、行者早く一脚を上て堅門を踏破り叫て曰く、早く一千年を打掃し老孫に借與へよ。僧官房裡に躲れ窓より覗て曰く、這荒山方便宜しからず、別所に行て宿を求給へ。行者が曰く、汝等方便あしくば手道具を搬出して去れ。僧官が曰く、我寺中の僧四五百人那の裡へぞ到りさらん。被窩のみにても置處有まじ。行者が曰く、汝立出すれば一個出きたれ。此鐵棒を試て見すべし。和尚嘲わらひ我決して不出、汝誰を呼てか試し見るや。行者大いに腹を立て、罷等試して見すべしと頭を回らして見るに、側に大なる石獅子あり。頓て走り寄根を上げて兵々一下ば

忽ち粉砕となる。僧官是を見て膽を消し骨なえ筋麻で聲を上、大徳手を止め給へ、宿を借まわらせん。行者が曰く、先に我師きたつて宿を求るに汝罵て借さす。今吾手段を見て借んといふ。何ぞかく薄情なる。今汝を那石獅子の如くなすべけれども、吾師父西天に赴き經をとるの旅路ゆゑ、大慈悲心をもて汝を打たす。汝を始め寺内の僧徒残らず長衣を着て、懃懃に我師父を迎へきたれ。さもなくば一人も残らず獅子の如く粉砕になさんと威しければ、和尚大いに恐れ心得候とて、那道人に云々分付けるに、道人行者が猛威に恐れ後の狗洞裡より拔出て本堂に上り、鼓を打鐘を敲せば満山の衆僧一齊に集りきたる。老師一々に分付各衣服を改め行者を先に立て、山門の外に出て跪下、中にも僧官頭を叩て罪を謝し、願はくは唐老爺父方丈に入て按宿し給へと乞ふ。三藏心悦ばすと雖、さのみはとて徒弟と俱に方丈にいたれば、衆僧齋を供して管待けり。三藏師弟吃罷て請て禪堂にいたり座禪し、其後衆僧を退しめ、三藏小門を逍遙するに、月いと清く皎潔なれば、悟空を呼で俱に月を賞し、三藏懐を興して一詩を賦す。其詩に曰く、

皓魄當空寶鏡懸  
 山河搖影十分全  
 瓊樓玉宇清光滿  
 水鑑銀盤爽氣旋  
 處々應軒吟白雪  
 家家院宇弄朱絃  
 今宵靜玩來山寺  
 何日相同返故園

行者聞をはりて曰く、師父月色光華を見て心に故里をおもひ給へども、月家の意を知り給はず。即ち天は法象の規繩なり。月三十日にいたり陽魂の金散じ盡、陰魄の水輪に盈故に純黒にして光なし。即ち是を晦といふ。此時日と相交る。晦朔兩日の間に在て陽光を感じて孕み、初三日にいたり一陽現す。初八日に二陽生じ魄中魂半なり、故に上弦と云ふ。十五日に三陽備足す。是を以て團圓なり、故に望と云ふ。十六日に一陰生じ、廿二日に二陰生ず。魂中魄半なり、故に下弦と云ふ。三十日に三陰備足し又晦日あたる。是先天採煉の意なり。我等能く温養八の功をなす故園に返て亦やすし。豈聞ざらんや。

前弦之後後弦前  
 藥味平々氣象全  
 採得歸來爐裡煉  
 志心功果即西天  
 三藏聞て一時に解悟し、滿心歡喜して稱して悟空に謝し、禪堂に回り悟空八戒沙僧をば退て睡らしめ、三藏は經本をとつて燈下に是をよみ居たりけり。

鬼王夜謁唐三藏  
 悟空神化引嬰兒

却說三藏は獨禪堂に座し燈の下に看經し居けるに、時三更の頃にいたり、忽ち一陣の怪風門外に聞えて燈を削り、或は明く或は暗く成り、何となく身毛豎て覺えければ、三藏ふと頭を擡て見る

に、燈のかけに一個の人渾身水に淋れ眼中泪を垂て佇立り。三藏駭て曰く、汝妖怪奈何ぞ我禪門にきたれる。早く去よと喝するに、那人曰く、我は是妖怪にあらず、師父子細に我を見給へ。三藏聞て睛をすゑて見るに、天冠を頂き腰に碧玉帯を束ね、身に赭黄袍を穿ち足に無憂履を踏、手に白玉珪を執り。三藏大に驚き身を射て問て曰く、君は一朝の陛下何の爲茲に至り給ふ。那人泪を流して云く、我家は此里を離るゝ事四十里一座の城地あり。號て烏鷄國といふ。五年前に天大に旱し民皆飢死す。寡人は是を悲み天地に祈と雖も更に其效なし。然るに鐘南山に一個の全真あり、よく風を呼び雨を祈る。依て彼真人を請て雨を祈らしむるに、須臾にして大雨降民の憂患を除けり。寡人其徳を好し他と結で兄弟となり、宮中に同居する事二年、一日陽春の比左右を退け、他と只二人花園に春色を遊び、行て八角の琉璃井の邊りにいたるとき、他寡人を把て井内へ推落し、石の板をもつて井口を掩ひ、上に土を布て一株の芭蕉を植たり。扱真人は身を揺て我姿に變じ、終に國土を奪ひ三宮六院盡く他に屬こと已に三年なり。三藏聞て大に驚き、然らば御身何ぞ陰司閻王の處に行て斯と訴ざるや。鬼王が曰く、他真人神通廣大にして閻羅王と故舊なり。是に依て告るに門なし。纔に夜遊神一陣の神風をもつて我を送りきたる。曾て他我に説て曰く、三年の水災已に滿たりと、此ゆゑに我きたつて師父を拜する事を得たり。師父の徒弟齊天大聖孫悟空は、神通廣大にしてよく魔を降すと聞、願くは我國中にいたり、妖魔をとらへ邪正を辨明給はらば深く大恩を感謝すべし。三藏が曰く、我徒

弟よく魔を降といへども、只恐らくは一個の難あり。鬼王が曰く、そも何の難ぞや。三藏が曰く、那怪すでに變じて君と相似たり。滿朝の文武皆他を眞の君王とおもふ。然るに我徒弟他をさして妖魔とし討んとせば、多くの官人却つて是人を欺き國を亂す賊とせば、是虎を畫き鶴を刻する類にあらずや。鬼王が曰く、師父の疑ひざる事なれども、我に一個の太子あり。他此三ヶ年妖怪に禁せられて、宮に入て母親と相見ること能はず。是は那妖怪母子相逢ば、長短の話説の間におのづから己が事の露はれんことを恐るゝが故なり。即ち太子明早城を出て探獵す。かならずきたつて師父を拜せん。師父其時我物語のおもむきを説聞し給は、かならず信用すべし。もし猶疑は、是を見せ給へとて、白玉珪を三藏にあたへければ、三藏請取て曰く、此上は徒弟と商議し事ははからん。君は先づかへり給へ。鬼王悦で曰く、我又夜遊神に乞て皇宮に入り、一夢を正宮皇后にあたへて合意を教へん。師父必ず約をたがへず仇を報じ給へとて、三藏を三拜して立別る。三藏立上りて門外まで送るに、一度跌とおもへば、忽ちおどろき覺て一場の怪夢なり。茲に於て三藏、徒弟等とくきたれと呼立れば、悟空八戒沙和尚目を覺し走きたつて、何事の候やと問ふ。三藏が曰く、我今怪夢をみたり。故に汝等を呼り。行者が曰く、師父路上に妖怪の多きを恐れ、且雷音寺の遠をうれひ給ふゆゑ、種々のゆめを見給ふならめ。老孫等は千妖萬怪を恐るゝ心なく、真心もつばら佛を拜せん事をおもひ候へば、更に一夢をも見ず候。三藏が曰く、我今夜の夢はさる事ならずとて、則ち鬼王が夢にあたへし玉珪を見

せ、夢中のおもむきを説聞せければ、行者感歎し、かゝる照顧ある上は夢中の事將に真なるべし。吾明日冤魂のために妖怪をとらへ仇を報すべしといふ。三藏其謀を問ふ。行者其時一根の毫毛を抜て、變じて一個の紅金漆の匣となし、玉珪を把て匣の内に收めて曰く、師父明日此物を持って手中に捧げ、錦襪の袈裟を穿て正殿にいたり如此々々にし給へ。他かならず信すべし。三藏聞て此謀甚はだ良とて、なほ種々計議する處に、不多時東方發白たり。行者筋斗雲に跳上りて四方を見るに、果して正面に一坐の城地あり。愁雲漠々とし妖氣紛々たり。然るに忽ち砲聲響き、東門より一隊の人馬閃き出づ。是就ち探獵の軍兵なり。軍中に一個の小將軍あり。頭に盔甲を頂き手に寶劍を執、腰に弓箭を帶したるが、隠々として帝王の像あり。行者心中におもふやう、這かならず太子ならん。吾一個の戲をなし、他を寺内へ誘ふとて、雲頭を下りて身を搖し、變じて白兔となり太子の馬前をかけ回る。太子是を見て一箭を引て兵と放つ。行者此矢を把住走りて寶林寺の山門にいたり、忽ち本相を現はし矢をとつて門の檻に挿みて走り入り、三藏に見て曰く、頓て太子きたれば、吾を那匣の裡へ入給へとて、變じて二寸許の小和尚と成ければ、三藏是を紅金漆の匣に入れ鎖をおろして相待たり。時に那太子は白兔を追て山門に至り見るに、兎は見えずして件の矢は門上に挿みたり。太子大いに怪み、更に其ゆるぎを知らざれど、馬かけ寄て矢を抜とり、頭を擡て山門の額を見れば、勅賜寶林寺とあり。遂に馬を下りて進で山門に入る。衆僧おどろき慌て出きたり、頭を叩て迎へ入る。太子正殿にいたり佛

像を參拜し終り、目を上て見るに正面に一個の和尚坐し居たり。太子怒て曰く、此和尚我きたるをも憚らず、坐して動ざるは無禮なり。急ぎ引下せよと分付る。左右の臣命に應じて三藏を把て下す。太子叱て曰く、汝は是那方の者ぞ。三藏禮を施して曰く、貧僧は東土大唐の者、王命に依て西天にいたり、佛を拜し寶貝を進むる者なり。太子曰く、汝何の寶貝かあるや。三藏が曰く、我身上の袈裟は第三等の寶なり。又第一等第二等の寶貝あり。太子曰く、汝が袈裟半邊の臂をあらはす、何ぞ寶貝と稱するに足ん。三藏が曰く、這袈裟全體ならずといへども詩あり、開給へとて説て曰く、

佛衣偏祖不須論。内隱眞如脫世塵。萬線千針成正果。九珠八寶合元神。一僧經仙女參修製。遺賜禪僧靜垢身。我見駕不迎。猶自可。備的父冤未報狂。爲

太子聞て大きに怒て曰く、此狂僧何ぞ亂説なるや。備總の袈裟を憑で自ら誇る。我父の冤何國に有て未だ報ざるや、汝精くかたれ。語らずんば我寶劍汝が頭に望ん。三藏が曰く、貧道は實に是をしらす。只這紅匣の裡に一件の寶貝あり、呼で立帝貨といふ、よく過去未來のことをしる。殿下開て問ば即ち知るべし。太子聞て紅匣の蓋を開けば、二寸許の小和尚跳出て兩邊へ亂走る。太子嘲わらひ、此星々小人よく何事をかしらん。行者是を聞て曰く、汝小をきらふ就ち大となるべしと、腰を一たび伸せば七八尺となる。太子をはじめ衆人大いに駭く。太子問て曰く、立帝貨老和尚、汝よく過去未來

の事をしらば、試に我國中の事を説て看よ。行者が曰く、汝は是烏鷄國王の太子、五年前天大いに旱す。汝が家皇帝雨を祈るに効なし。時に鐘南山より一個の道士きたる。他よく風をよび雨を呼ぶ。汝が父王結拜して兄弟となる。夫斯のごとくならざるか。太子駭て曰く、誠に斯のごとし。後二年にして那道士風化して行處をしらす。行者が曰く、今皇帝と稱する者は誰なるや。太子が曰く、是我父王なり。行者はらを抱て高く笑ふ。太子怒て曰く、汝何がゆるに嬉笑するや。行者が曰く、我汝に一大事を告ん衆人を退しめよ。太子聞て則ち命を出して人馬を門外に退け、迹には三藏と行者と太子只三個なり。行者太子に向ひ、那風化して去しは是汝が父王にて、今位に坐したるは是道士なりと、説聞せども猶疑ひて信用せず。行者堪かねて立帝貨の像を變じて、本相を現はして曰く、我假に立帝貨となり汝に實を告るといへども、汝愚昧にして信用せず。今は一定なる照願を見せん。實は我は那長老の大徒弟孫行者といふ者なり。師父を護て西天に行き經をとる。我師前夜此里に宿りて一場の怪夢を見給へり。夢に彌伽が父王の冤鬼きたつて、那道士に哩かれ御花園に遊びて琉璃井へ墮落されて水死す。其後那怪王の像と粧て位に在ども、滿朝の官人凡眼に見しること能はず、汝も幼年にして知るまじ。其妖怪たる照願は其後汝を宮中に入しめず。是母子相逢て説話せば自然己が悪事の顯はれん事を恐るゝがゆるなり。且御花園の琉璃井は、石板をもて口を掩ひ土を布て芭蕉一株を植、御花園をも閉して人を出しせしめざるも此ゆるなりと、汝が父王の冤鬼我師父に委しく訴へ、其仇を報せんこと

を憑み、記にとて携たる白玉珪をといめおき、汝が今日出て探獵する事をもつげたり。依て我白兔と變じて、汝が矢に中りたる體になし、汝を引て這寺にきたらせしは、此因縁を説聞さん爲なりとて、那紅匣の内より玉珪をとり出して見せければ、太子取て熟見るに、實も父王が所持の玉珪にて、道士が風化せし時偷去りとおもひし物なれば、大いに驚き且つ行者が説くところ身に轟々中れば、半は信じ半は疑うて決せず。行者又曰く、汝尙狐疑を抱かば去て汝が娘々に面會し、他が夫妻恩愛の情三年前と三年後と如何と問ひ、其一言を聞ても眞假を知れよと説ければ、太子實もとて玉珪を取收め走り出んとす。行者引留て曰く、汝すべて人馬を茲に住置よ。もし事を漏す時は功をなしがたし。汝一個正陽門より後宰門に入て宮中にいたり、母親に見えて、悄悄に低言て問あきらめよ。那怪神通廣大なれば少にても覺ば、汝母子の性命保ちがたけんと誠けるにぞ、太子謹で教に遵んとて山門を走り出で、軍士等に令し、汝等は此に在て屯し我回りを待つべしとて、獨馬に鞭を中て走去けり。

嬰兒問母知邪正  
金木參玄見假眞

却説太子は城中へかへり、行者が教のごとく暗に後宰門より逕に皇宮に入り、錦香亭にいたり娘々を見るに顔色昔に變りて衰へ、幾個の侍女を従へ亭上に坐せり。太子忙しく下馬し跪て母親を呼ぶ。娘々頭を擡て一目見て大いに悦び、我兒此三年見る事を得ず、今日何としてか來れる。太子が曰



孩兒一言母君に問ふ事在てきたり候。願くは左右の人を退け給へ。娘々即ち分付て侍女を退かしむ。太子低言て母親に問ふ。母君夫妻の情三年前と三年後と如何候や。娘々は是を聞いて滿眼に涙を浮め、汝もし此譯を問すんば、我九泉の下に至りても明白を得じ。そも三年前までは皇帝の身煖なりしに、三年の後は冷なること氷のごとし。我不審にてたび／＼此事を問ふに、只老に逼りて身衰へ、以前のごとくならしと答へぬと、いふ事未だ終らざるに太子忙しく馬に乗んとす。娘々引住め、汝何ゆゑに遽しく此處を去んとするやと問。太子隠す事能はず、唐僧の夢の事を語り、我未だ半疑半信なるに、今母君の曰を聞けば、今父王といふは必然は妖怪なるを知るとて、袖の裡より玉珪を取出して娘々にわたせば、娘々見て又涙を流して曰く、我も昨夜一個の夢を見たり。汝が父王水に淋々て我面前へきたり、我死したれども魂魄唐僧を拜するを得、怪を降し前身を救ふ事を憑きと、いふともひて夢覺たり。されども疑ひ未だ晴ざるに、何ぞ計らん汝又きたりて此事を説く、急に行て唐僧を請きたり、妖魔を降して父王養育の恩に報よといひければ、太子忙しく馬に上り後宰門より出て、鞭を上げて寶林寺にいたり、又獨山門に入て唐僧に謁し、前の无禮をわびて母親の夢をとき、何とぞ力を扶け父の仇を殺させ給へと拜し憑む。行者が曰く、今日はすでに暮に近し。明早老孫汝と俱にいたつて妖魔を降すべし。汝先づかへり去て待よ。太子が曰く、我今日城を出て探獵するに未だ一頭の兎をも得ず、斯ては城に回りがたし。行者が曰く、患ふる事なかれ、我汝に多く得物をあたふべしとて雲

端に跳上り、捻訣念咒すれば山神土地神一時に集り来る。行者命じて曰、汝等多少の野物を擺ひ四十里の路上におきて、太子に與へ取去らしめよと命す。衆神領掌して別れ去れば、行者は雲頭を下て太子に向ひ、我すでによく計らひたり早く城にかへれ。太子恩を謝して衆軍に令をつたへ城に回るには果して路上多く野物有ければ、多少の軍士争ひて是を捉へ勇み進めば、太子も大いに悦び、一更の時分城中へ歸り入ぬ。扱孫行者は唐僧に向ひて曰、老孫明早那城中に至て魔を降さんこと、囊の物を取すより安しといへども、情おもへば一難あり。三藏が曰、如何なる事ぞ。行者が曰、那怪三年皇帝に粧兩班の文武と共に樂しむ。老孫那を拿る時、百官等何の照顧かあると問んに、一定なる證迹なくては罪名をさだめがたし。因て我おもふに、八戒を賺して那皇帝の屍を尋ね出し、明日城にいたりて那妖怪を討ん。他もし照顧呼はりせば、則ち屍を他に看せて討殺ん。然らば文武百官敢て異論し候はじ。三藏聞て汝よきに計ひ候へと命す。行者就ち八戒が睡り居し床の邊りに行き、呼覚せども那獸子眼を覺さず。行者腹を立耳を爪で強く引ければ、やう／＼に眼を開き、あゝ疼々哥々何を戯るやといふ。行者が曰、茲に一個のよき商議あり。八戒目をすりながら曰、そも何の商議ぞや。行者が曰、日間那太子の曰、件の妖怪に一個の寶貝ありと、我明日城に進み入て他と戦ふ時、他寶貝をとつて我を降さば、功勞畫餅となりなん。先へ廻りて捨去には不如、我其隠し所を聞おけり。汝行て偷みきたれ。八戒よろこびて曰、もし其寶貝を取得たらば我すなはち是を捨ん。行者點首、いかに

も汝が得とせん。馱子大いに悦び爬起て衣服を調へ、行者とともに祥雲を起して跳上り、城中へ飛行雲頭を降る。此時方に二更の時分なり。行者八戒を誘て御花園にいたり、門を打開て走り入、四方を見廻に果然一株の芭蕉あり。行者八戒に曰、汝手を動かせ寶貝此芭蕉樹の下にあり。八戒心得鉈を上て芭蕉を撞倒し、嘴をもつて土を掘穿に、三四尺許にして石板あり。是を取退て見るに元來一口の井なり。八戒が曰、哥々是は井なり。索なくては下り取る事を得不得行者が曰、我に一條の金繩あり。汝先づ衣服を脱去。八戒衣服を脱て赤身になる。其時行者鐵棒取出して七八丈の金繩となし井の中へ放ち下せば、八戒是に取縋り、手繰々々やう／＼と水面にいたり呼で曰、哥々々々何の寶貝もなく只是れ井水のみなり。行者が曰、寶貝は水底に沈みあり。汝水中に潜り入て捜しきたれ。八戒誠と心得、元來水性あれば深く水中にくいり入眼を開き見るに、一座の殿閣あり。額に水晶宮の三字を寫したり。八戒大いに驚きて曰、罷了々々是海底にきたれり。玆は井龍王の水晶宮にこそと惘果て停立居けるを、巡水夜叉見つけて急に宮中に入龍王に告て曰、上より一個の長嘴大耳の和尚を下しきたり候。井龍王が曰、是天蓬元帥ならん。昨夜夜遊神烏鷄國王の魂靈を送り唐僧に見えさせ、齊天大聖を請て妖を降さんとす。おもふに大聖天蓬元帥をして、烏鷄國王の屍を取しむるならめとて、即ち門を出て呼で曰く、天蓬元帥請ふ裡に入て座せよと。八戒是を聞て僅によるこび、逕に宮中に入上面に座す。龍王が曰、元帥何の爲玆にきたるや。八戒が曰く、我きたつて寶貝を求む。龍王が曰、元帥我此所に

寶貝なし。那裡にこそ寶貝あれども我取いだしたる事成がたし。元帥自らきたつて取べしとて、八戒を引て廊廡にいたり、一個の死人を指さして曰、他即ち寶貝なり。八戒是を見れば、那死人頭に天冠を頂き身に赭黃袍を穿ち、無憂履をはき瑠玉帯を繫ぐ。八戒わらひて曰、是何ぞ寶貝ならん。龍王が曰、元帥しらすや是烏鷄國王の屍なり。井中より落下りしにより、我他に定顏珠を與ふ故に三年を経とも曾て像を壞らす。汝此屍を駄去て大聖に見せ、起死回生の法をもつて再世せしめよ。然らば如何なる寶貝をも得べし。八戒腹を立、我何ぞ死人を駄去んや、あな忌々しとて身を轉じて走り出る。龍王夜叉に令して屍を宮門の外へ丟下す。八戒是を見ぬふりして急に水際に浮み出て曰、師兄金繩を下して曳上よ。行者が曰、汝寶貝を取きたれるか。八戒が曰、更に寶貝なし。只井龍王教て我一个の屍を駄去といへども、我是を肯す。行者が曰、是寶貝なり何とて駄きたらざるや。八戒が曰、屍を駄事を惡む。汝欲するならば、我に換て駄きたれよ。行者が曰、汝駄きたらすんば我は即ちかへり去て安寐ん。汝は長く井中に居よと伴と回去んとす。八戒大いに慌て、曰、哥々回去事なかれ、我屍を駄きたらんとて、再度水底にくいり入屍を捜し春に駄、水面に遊び出で呼で曰、哥々即ち駄きたれり。金繩を下せ。行者是を見て那金索を伸下せば、八戒金索の端に口咬付、行者に曳上られて漸に井口を出で、屍を放下して身を拭ひ衣服を穿。行者國王の容貌生るがごときをみて不審、何ゆゑ斯のごとくなるやと問ふ。八戒那井龍王のいひし條を説こと一遍す。行者悦び、造化々々、我等明日

果して大功をなさん。汝快く屍を駄きたれとて、捨訣念咒巽地向て一口の氣を吸、一陣の風を吹起して八戒とともに城地をはなれ、逕に寺中に歸りきたる。八戒禪堂の前に屍を丟下して曰、師父起ききたつて見給へ。師兄我を欺き國王の屍を取きたらせり。三藏聞て沙僧とともに門を開き立ち出て見るに、國王の容顔少しも變せず活がごとくなれば、不覺涙を流すこと雨のごとし。八戒馱子腹を抱へて大いに笑うて曰、他又師父のため家父にもあらず、何ぞかく哭給ふや。三藏八戒を叱り出家人は慈悲を本とす。汝何とて這等心硬や。八戒が曰、是心硬にあらず。井龍王我に教て曰、大聖に乞て起死回生の法をもて蘇らせよと。師父さほど憐み給は、何ぞ外公に回生を求給はざる。三藏よろこび、行者に向ひ、汝果して手段あり早く醫活よ。行者が曰、師父又馱子が亂説を聞て信じ給ふか。此國王すでに死して三年何ぞ蘇生するの謂あらん。三藏實もとて罷んとするを、八戒又勸て曰、師父他に騙され給ふな。那呪を念て國王を活するを求め給へ。三藏また八戒に説れ行者に向ひ、汝國王を醫せずんば緊箍咒を念ん。それにても尙醫活すまじきか。孫行者大いに恐れ、師父かならず念給ふな。我思惟すべしとて心中八戒を恨みながら、其手段をぞおもひ回らしける。

二編卷之四

一粒金丹天上得

三年故主世間生

孫行者は師父が緊箍咒を念せんといふに困りはて、國王を活すべき工夫を廻らしけるが、忽ち心中に手段を按じ出し、掌を打て然なり〜といふ。三藏問て曰、汝國王を醫すべき手段を按じ出せりや。行者答て曰、別に手段なしといへども、老孫去て太上老君の許に行き、一粒の九轉還魂丹を乞きたらば、恐らくは醫活すべし。三藏大いに悦び、汝早く行てこひきたれ。行者唯々として筋斗雲に跳り上り、南天門にいたり逕に三十三天兜率宮中に見るに、老君正丹房中に在て丹を煉居たりしが、行者を見て問て曰、大聖汝唐僧を扶て西天に行ず、却て茲にきたる、是何事ぞや。行者すなはち烏雞國王の事績を説こと一遍し、何卒老君一粒の九轉還魂丹を惠み給へ。我那國王を醫活爲に妖魔を降し候はん。老君心に金丹を與ふる事を惜めども、他また神通をもつて多く偷み去ん事を恐れ、且善事のために施す事なれば、僅に一粒を取出して行者にあたふ。悟空是を請取て拜謝し、老君に辭し別れて逕に寺中へ回り下り師父に謁す。三藏悦て丹藥を乞きたれるかと問ふ。行者有々と答へて沙僧に命

じて水を取きたらせ、那金丹を肚下に灌下せば、一時ばかり有て肚内亂响といふ。行者其時唇へ口をあて一口の氣を吹入れば、咽喉より度て重樓を下り、明堂に轉り逕に丹田にいたり、又湧泉に下りまた返り泥垣宮に至り、一聲响で氣聚り、神歸してすなはち身を翻して起きたり。師父を呼んで雙膝を屈め三拜して恩を謝す。三藏慌忙て搥起し座上に請じて禮をなす。折ふし寺内の僧人早齋を獻じきたり、忽ち水衣の皇帝を見て大いにおどろき惑ふ。悟空が曰、這本の烏雞國王にてすなはち汝等が大旦那なり。三年前に妖怪に害せられ給ひしを、老孫昨夜救ひ活せり。今又城に進んで邪正を辯明せんとす。早く齋を獻じきたれ。衆僧驚歎して一齊に早齋を獻じきたるにぞ、五人等く喫し罷り、行者國王に教て身上の袍帶冠履をことごとく脱下し、僧官に命じて布の直綴、一條の黄絲線、一雙の僧鞋をとりにきたらせ、是を國王の衣服冠帯に換、扱僧官に向ひ、我今皇帝を送て城に進み行き、後日賞賜を乞て汝等に謝せん。又衆僧に分付遠く送らしむる事なかれ。事を漏さば却て不良といふ。衆僧領掌して去りぬ。茲に於て三藏師徒ならびに國王すべて五人、一齊に路を急ぎ烏雞國の城中にいたり、朝門に倚て曰、貧僧茲にいたる事關文を換ん爲に、殊にきたつて大王を煩しむ。願くは此よし傳達し給へと申ければ、黃門官急に入て斯と啓奏す。那魔王すなはち令して宣入けるに、五人逕に殿前に挺立りて不動。衆僧曰、這野僧無禮なり。何とて下り拜せざるや。魔王他等を制し問て曰、和尚は何方よりきたれる人ぞ。行者が曰、我は是東土唐王の差西天に往て佛を拜し經を求めんとす。

特きたつて通關文牒を換んことを願ひ候なり。魔王が曰、汝等四人の和尚は子細に尋るに及ばず。這一個の道人踪迹疑べし。是何方の人ぞ氏名を呼て取供を拿きたれ。行者が曰、這老道人聾にして且啞なり。我他が根本よりことごとく知れり。我他に替て供をし候はん。魔王が曰、然らば實々に供せよ罪を免さん。行者すなはち供す。其文に曰、

供狀行童。年老邁。獺。蠶。瘡。啞。家私。壞。祖。居。原。是。此。間。人。五。年。之。年。遭。三。破。敗。二。天。无。雨。民。乾。壞。鐘。南。忽。降。三。全。真。怪。呼。風。喚。雨。顯。神。通。然。後。暗。將。他。命。害。推。三。下。花。園。深。井。一。陰。侵。龍。位。今。三。載。幸。吾。來。功。果。大。起。死。回。生。轉。法。界。一。要。向。金。鑿。一。辨。假。眞。扶。王。滅。怪。安。三。朝。代。也。

魔王是を聞て心中大いに駭き、忽ち寶劍を執て雲に駕て空を望て遊れさる。八戒沙僧燥燥如何せん」と嘆き立。行者兩人を制し、兄弟曉事を止て太子娘々を呼びきたつて父王を拜せしめよといふ。八戒すなはち國王を殿上へ請じ、太子娘々に拜させければ、太子娘々は更にゆめの心地し、親子三人手を組かはして嬉涙にくれ給ふ。文武の百官も始て妖怪の障碍を覺り、山呼してよろこぶ事限なし。行者衆人に向ひ、いで我妖魔を捉へきたらんとて、急に跳て空中へ上り四方を睜眼ば、那魔王徑に東北をさして走り去る。行者追かけて大喝し、妖怪那里へか走るやと呼。那魔王大きに怒り、頭を回らし寶劍を掲げ行者に對ひ砍てかゝる。行者も金箍棒を擧て相迎へ、たゝかふ事數十合、妖怪力怯れて、